

第10節 弥生中期遺構面

第12層（青灰色粘質シルト）上面を遺構面とする。遺構面は北へ行くに従って低くなっている。南端でT.P.+6.9m、北端でT.P.+6.4mをはかる。検出した遺構は建物・土坑・井戸・溝・ピット等である。集落に関連した遺構が中心となる。

A. 建 物

S B 1101 (fig. 96) 2 L 218付近で検出された。梁行1間（約3.0m）、桁行2間以上（約3.8m）の建物である。建物主軸は若干南にふる東西棟である。柱間距離は梁間約3.0m、桁間約1.9~1.95mを測る。柱穴はほぼ正円形を呈し、径約0.2~0.25m、深さ約0.5mである。柱穴2では柱の抜き取りの痕跡がみられた。各柱穴の埋土はほぼ同様であるが、下層が黒灰色粘土で上層がブロック混じりの灰色土で柱根が遺存しているのもみられた。検出面のレベルはT.P.+6.8mである。

S B 1102 (fig. 97) 2 I 232付近で検出された。梁間1間（約3.15m）、桁行3間（約3.8m）の建物である。建物主軸はほぼ東西である。柱間距離は梁間（約3.15m）、桁間約1.2~1.3mを測る。柱穴の形態は円形及び橢円形を呈し、長径0.4m、短径0.2m、深さ約0.55mである。柱の抜き取り痕跡は柱穴4と柱穴8にみられる。各柱穴の埋土はほぼ同様であるが、上層がブロック土であり下層が黒灰色粘質土である。柱穴断面の形態はU字形を呈している。S E 1105との先後関係は柱穴8がそれを切りこんでいるので、S B 1102の方が新しい。その他にも多数ピットが出士しているが、明確に建物を形成するのはみられない。

B. 井 戸

S E 1101 (fig. 96) 2 L 218付近で検出された。上面で長径約2.3m、短径約1.25mの橢円形を呈する。下面では径1.2mの円形を呈する。深さは0.85mをはかり、断面の形態は逆台形を呈している。埋土は黒灰色土で、層内に弥生土器片が混じる。S B 1101と接する。底面のレベルはT.P.+5.9mである。

S E 1102 (fig. 96) 2 M 219付近で検出された。東側は調査区外なので正確な規模はわからない。南北径は0.95mであり、ほぼ円形を呈し、深さは0.45mをはかる。埋土は黒灰色土系である。底面のレベルはT.P.+6.15mである。S B 1101と接している。

S E 1103 (fig. 91) 2 I 226付近で検出された。上面で径0.9m底面で径0.45mをはかり、円形を呈する。深さは約0.75mをはかり、断面の形態は逆台形を呈する。井戸上面で壺の口縁部、底面で壺の体部がばらばらになって検出された。埋土は黒灰色であり、検出面のレベルはT.P.+7.25m、底面のレベルはT.P.+6.55mである。

S E 1104 (fig. 97) 2 G 230付近で検出された。上面で径1.1m、下面で径0.4m、深さ1.7m

をはかる。断面の形態はU字形を呈する。埋土は上層より①暗青色粘土②暗緑色粘土③緑灰色粘土④暗青色粘土⑤暗青色粘土である。上層の①、②層より弥生土器片が出土している。検出面のレベルはT.P.+7.0m、底面のレベルはT.P.+5.3mをはかる。

S E 1105 (fig. 97) 2 H 232付近で検出された。上面で径1.2m、底面で約0.25mである。深さは約1.5mをはかる。断面の形態はU字形を呈する。埋土は黒灰色系であり、建物 S B 1102によって切られている。検出面のレベルはT.P.+6.9m、底面のレベルは、T.P.+5.4mをはかる。

C. 土坑

S K 1101 (fig. 96) 2 L 219付近で検出された。径0.9m、深さ0.4mで円形を呈する。埋土は黒灰色土系で、少量の遺物が出土している。S E 1101のような井戸の掘削を途中で中止したもの

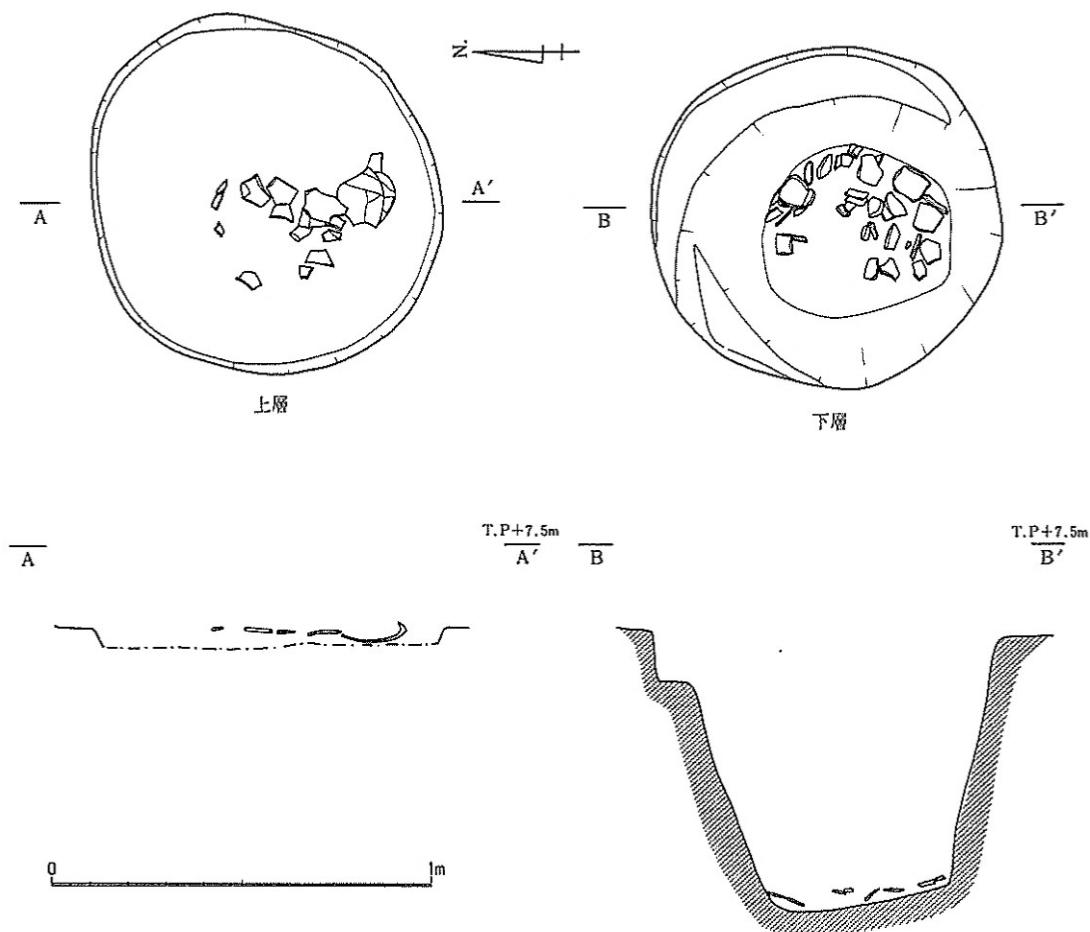


fig. 91 弥生中期遺構面 S E 1103遺物出土状況平面図及び断面図 (1/20)

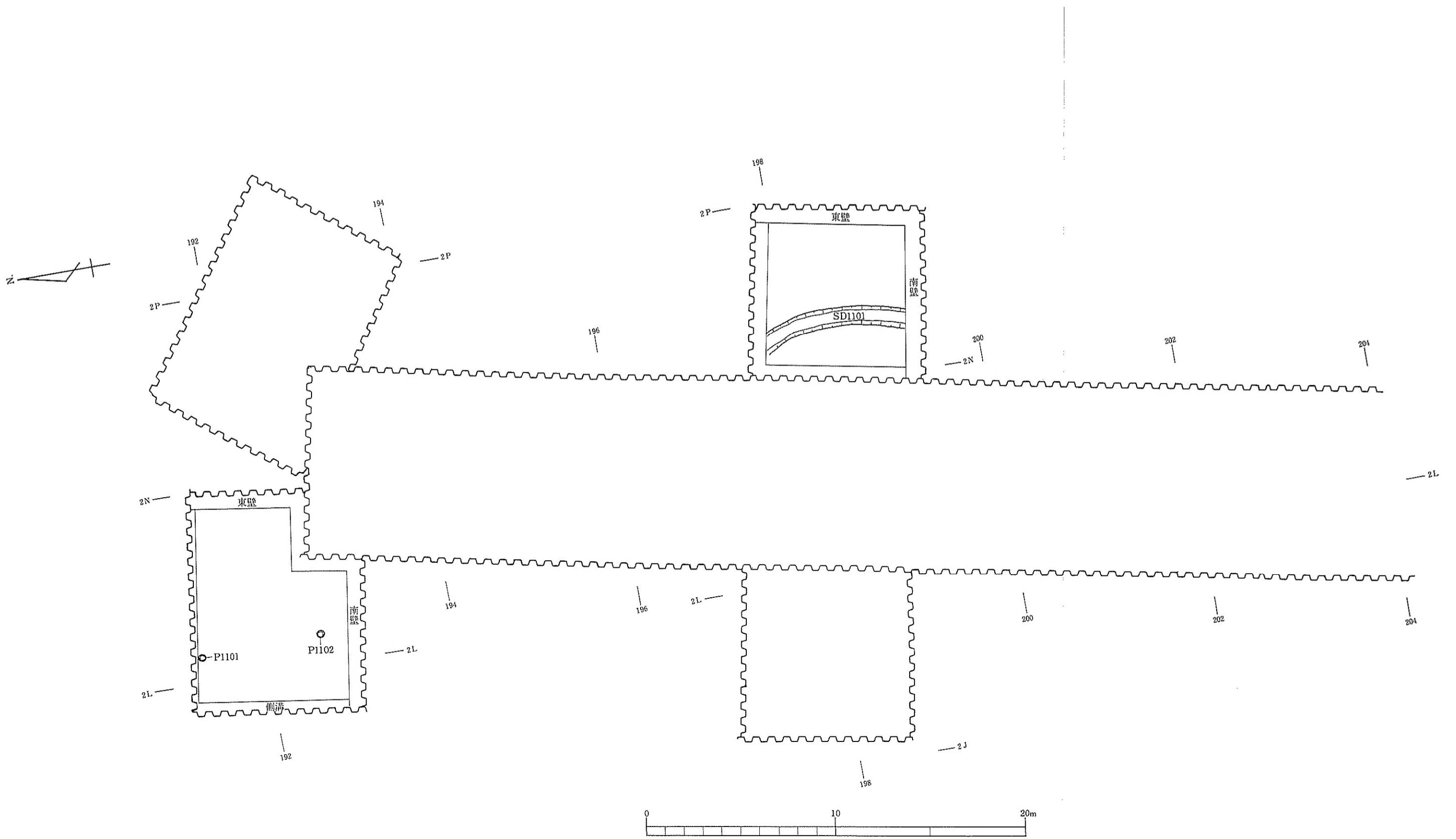


fig.92 弥生中期遺構面① 1/200

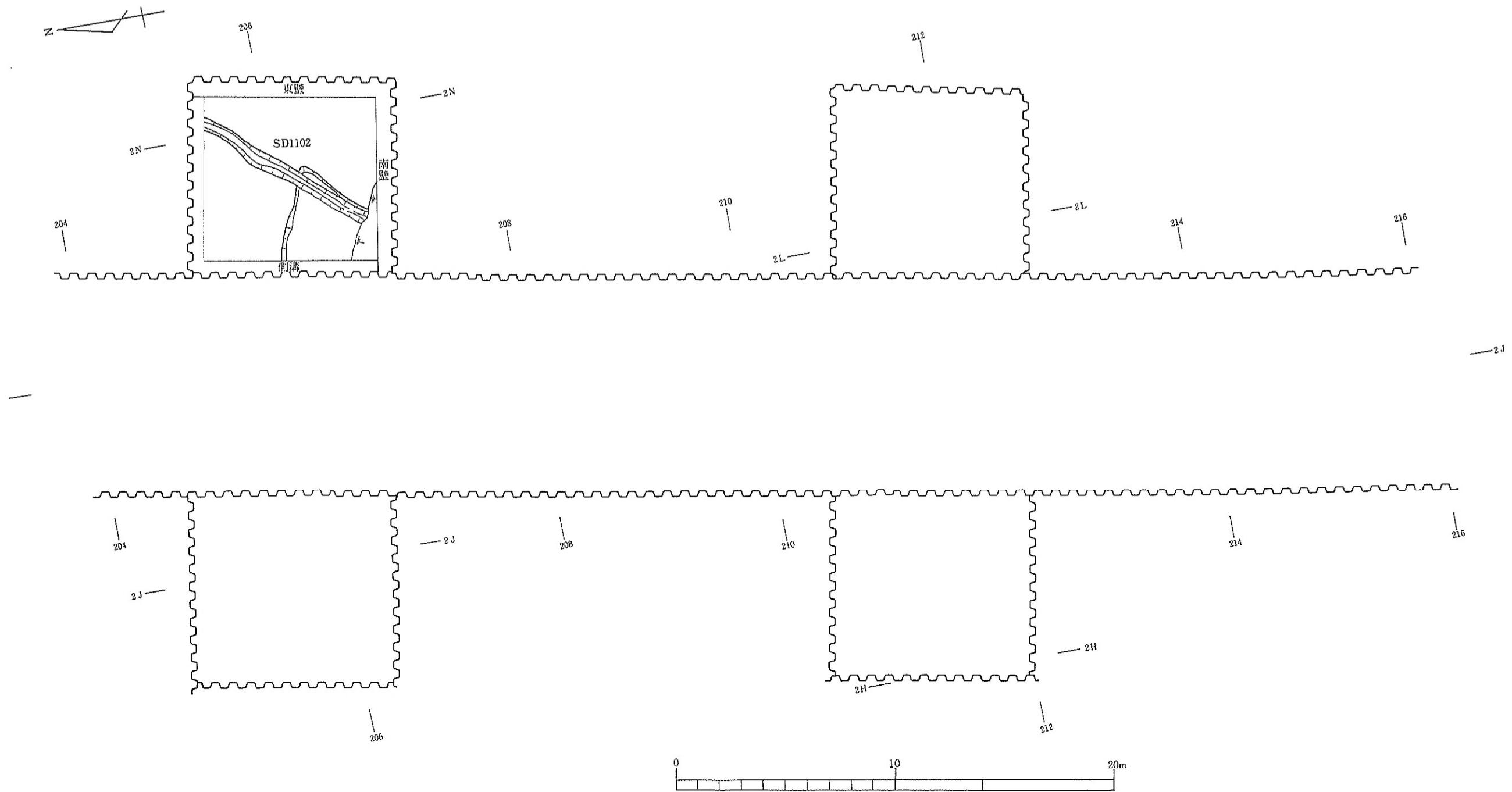


fig.93 弥生中期遺構面② 1/200

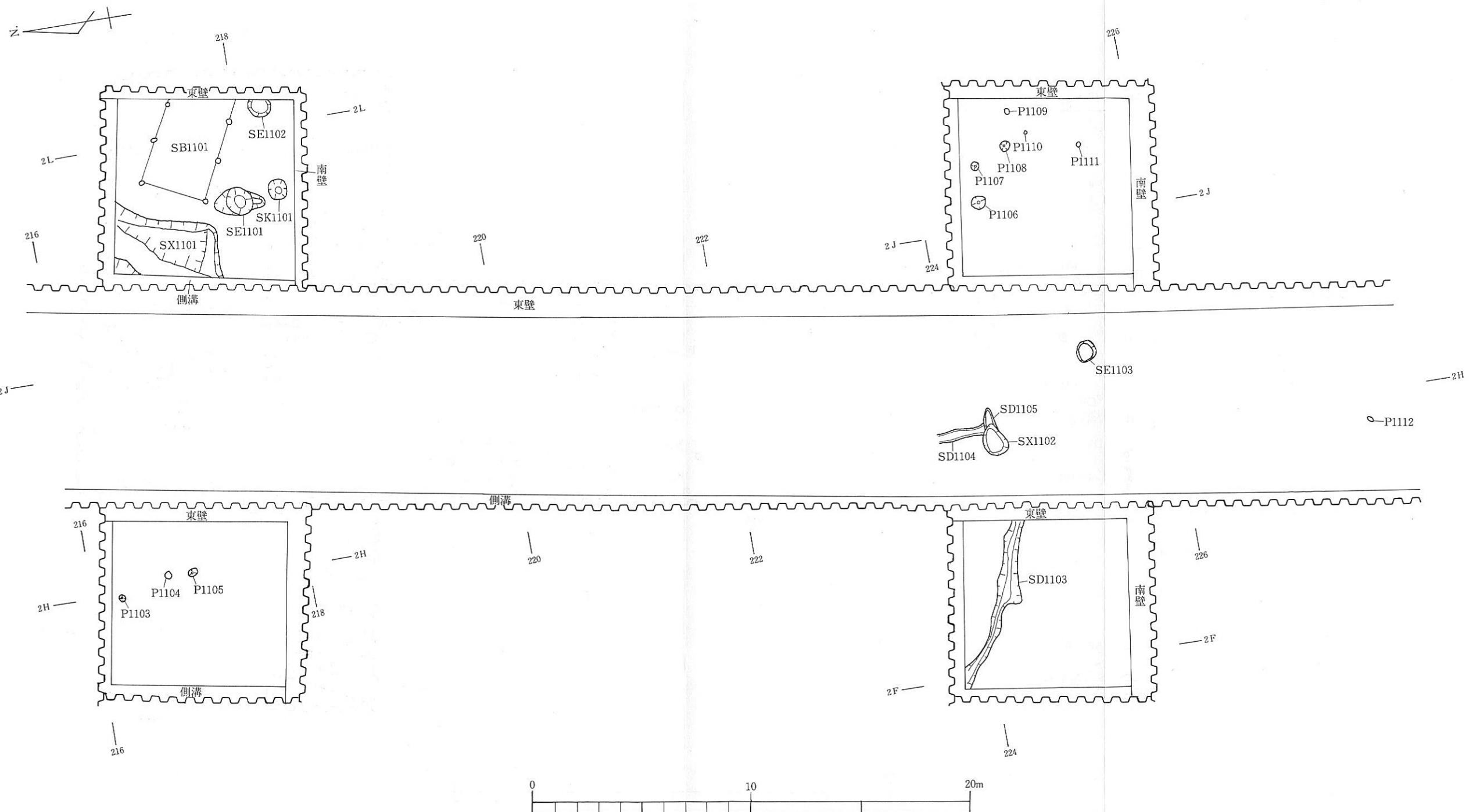


fig.94 弥生中期遺構面③ 1/200

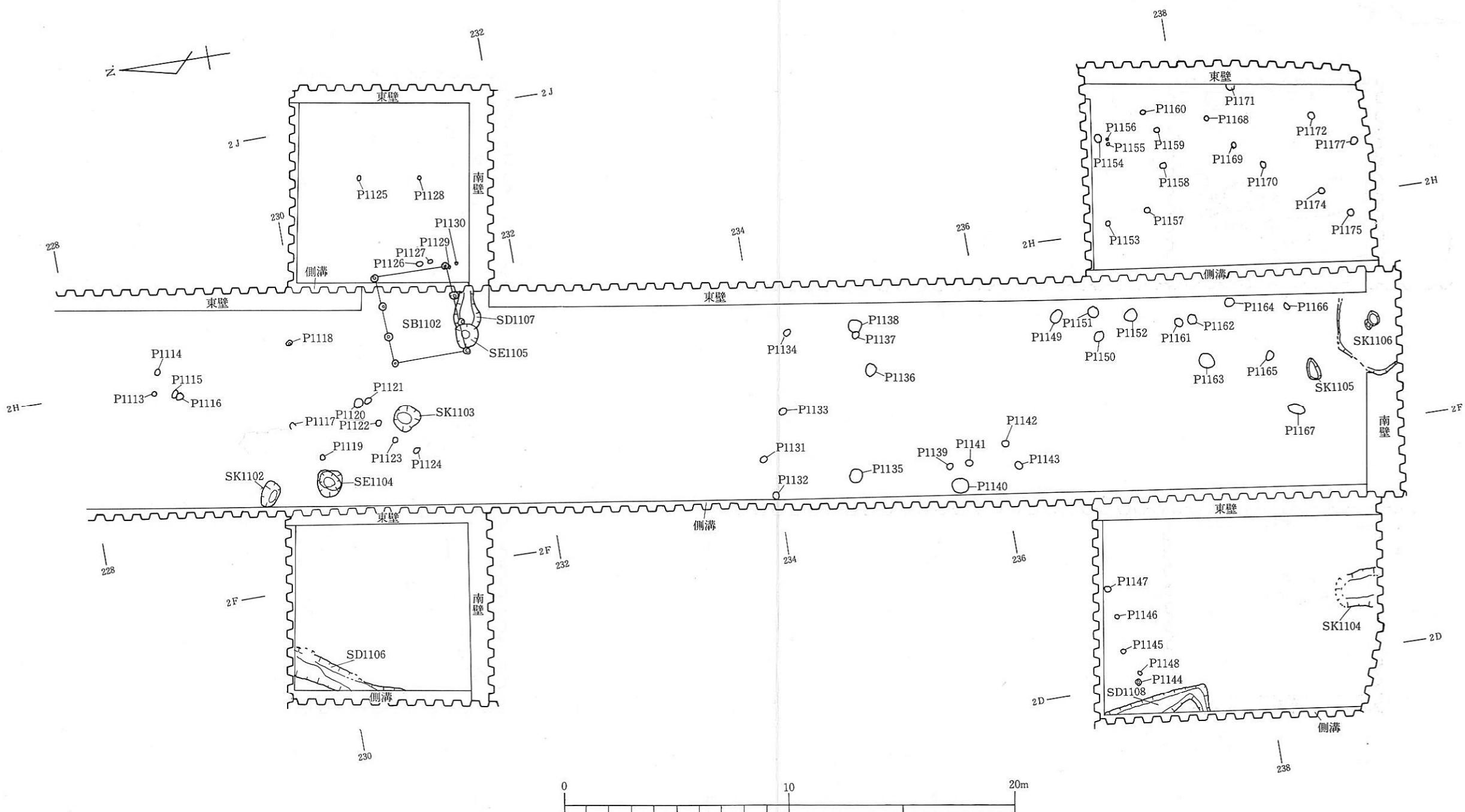


fig.95 弥生中期遺構面④ 1/200

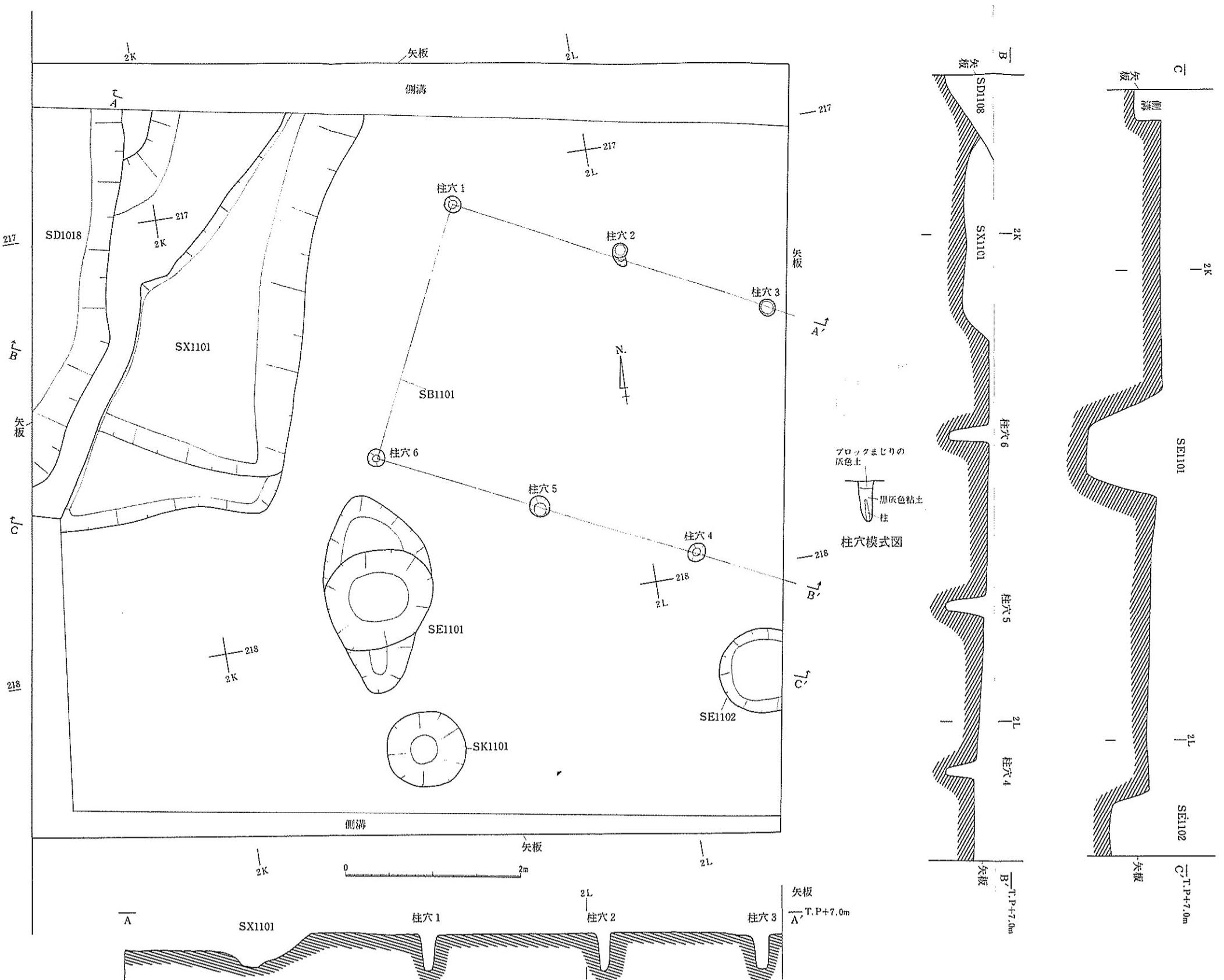


fig.96 弥生中期遺構面 S B1101周辺平面図及び断面図 (1/50)

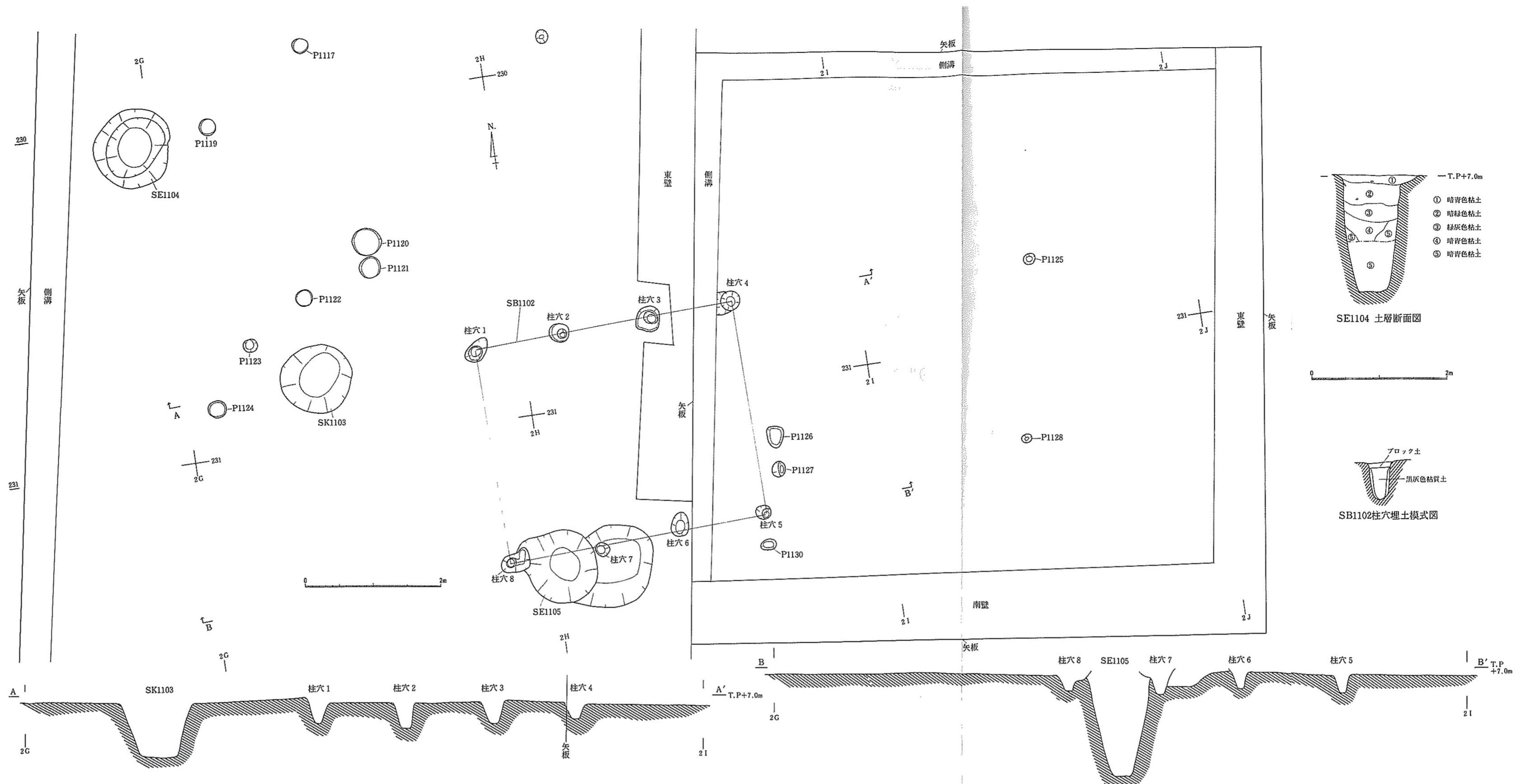


fig.97 弥生中期遺構面 S-B1102周辺平面図及び断面図 (1/50)

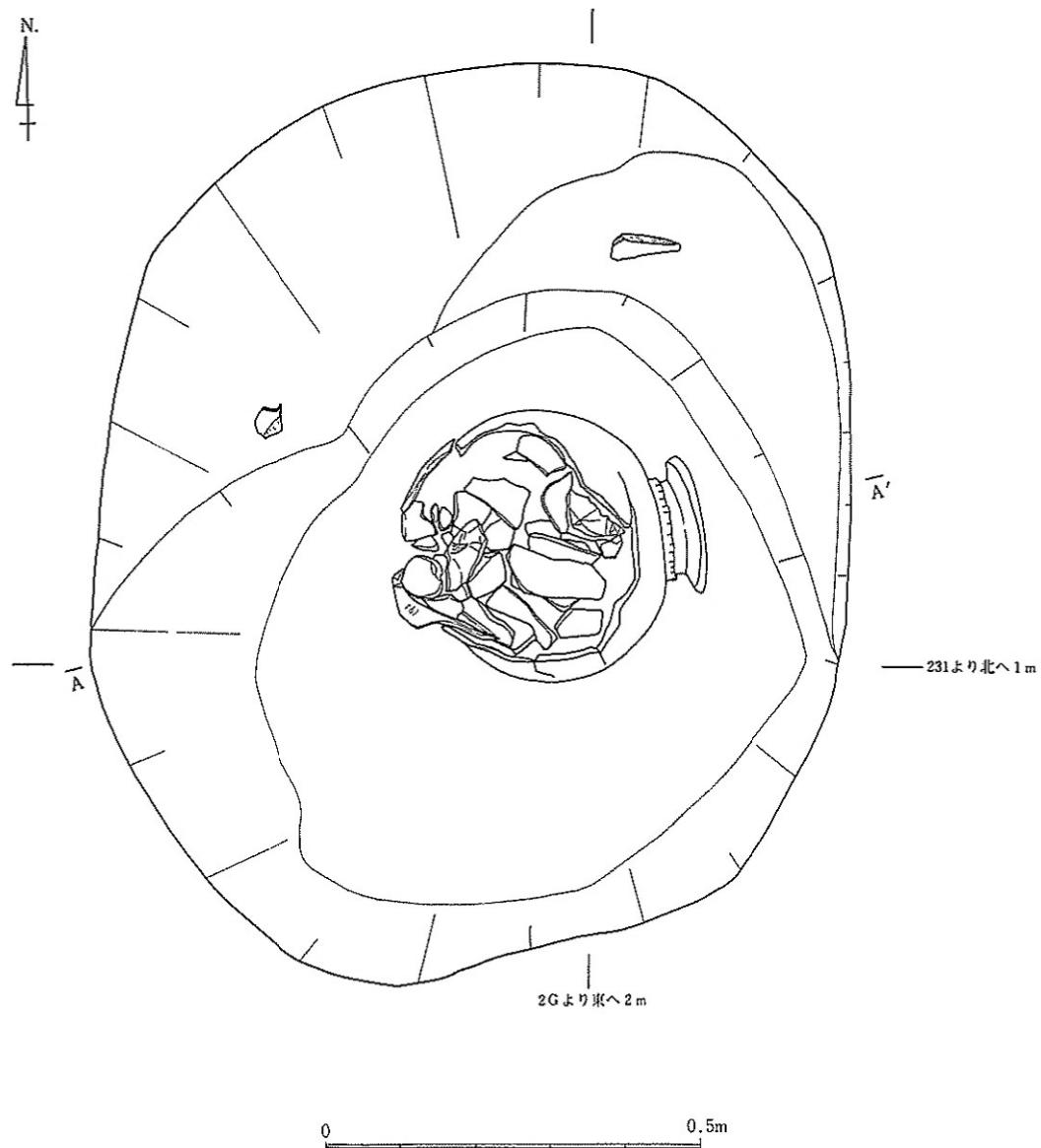


fig.98 弥生中期遺構面S K1103遺物出土状況平面図及び断面図 (1/10)

のであろうか。

S K1103 (fig.98) 2 G231付近で検出された。東西1m、南北1.2mの隅丸方形をした土坑である。断面の形態は逆台形を呈し、埋土は黒灰色土である。深さは0.25mをはかる。検出面のレベルはT.P.+7.0m、底面のレベルはT.P.+6.75mである。土坑掘方より約10cm下がったところで、口縁部を横にした大形の壺一個体を検出した。口縁部を東に向け、底部を西に向いている。体部は埋土の土圧によって破碎され、体内部に落ちこんでいた。これらの状況より、大形壺は、ほぼ中空のまま横位におかれ埋められたものと考えられる。

S E1104、S K1103、S E1105と約4.5m間隔で列状に並ぶことから、検出当初は井戸と考えていたが、大形壺の下面是約2cmしか下がらずベースになっている。そのため、井戸を掘り進むための大形壺を据えた祭祀的な土坑か、壺棺墓のような機能が考えられよう。

大形壺 (fig.99) は、口径20.9cm、器高45.5cm、体部最大径38.2cm、底径6.8cmをはかる。

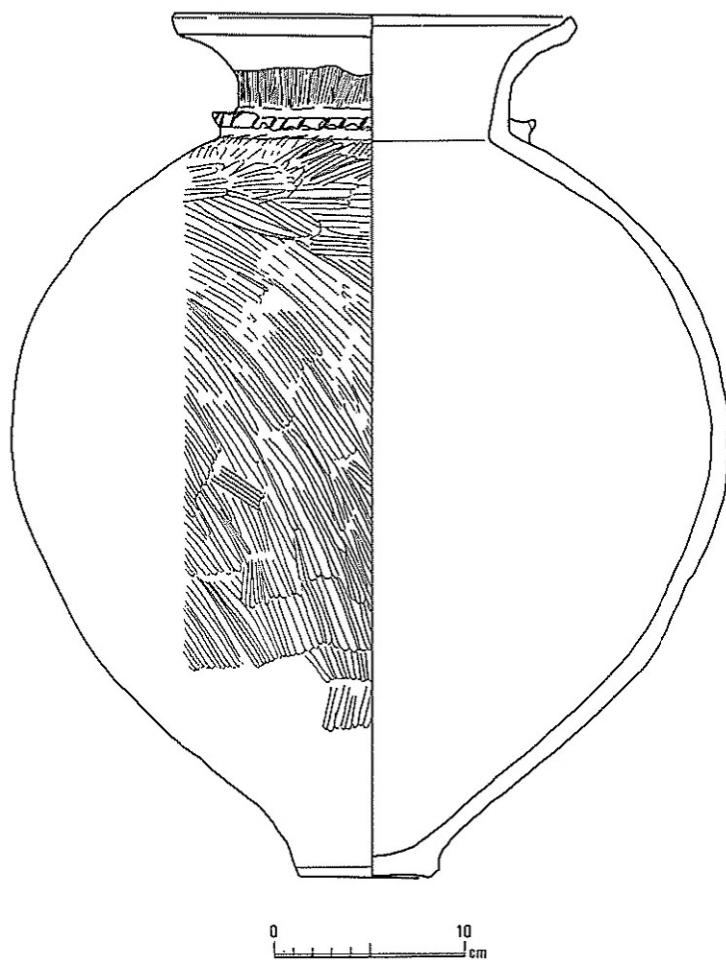


fig.99 弥生中期遺構面 S K1103出土土器 S =1/4

胎土は密で石英・長石・赤色粒を含む。焼成は堅緻で、色調は茶灰色を呈する。口縁部は外反して端部は尖り気味。体部は丸味を帯び底端部は尖る。口頸部周囲に巾約1.5cmの粘土帯をはりつけて断面三角形状にし、約1cm間隔で縦に刻み目をつけている。口辺部外面は縦方向のハケ調整。体部外面は頸部周辺だけが横方向のヘラミガキ、その下方は右下がりの斜め方向の密なヘラミガキを施している。このヘラミガキは何度も重ねられており、光の反射によって暗文状にみえる。体部内面はナデ調整。弥生後期初頭頃のものであろうか。残存率95%。

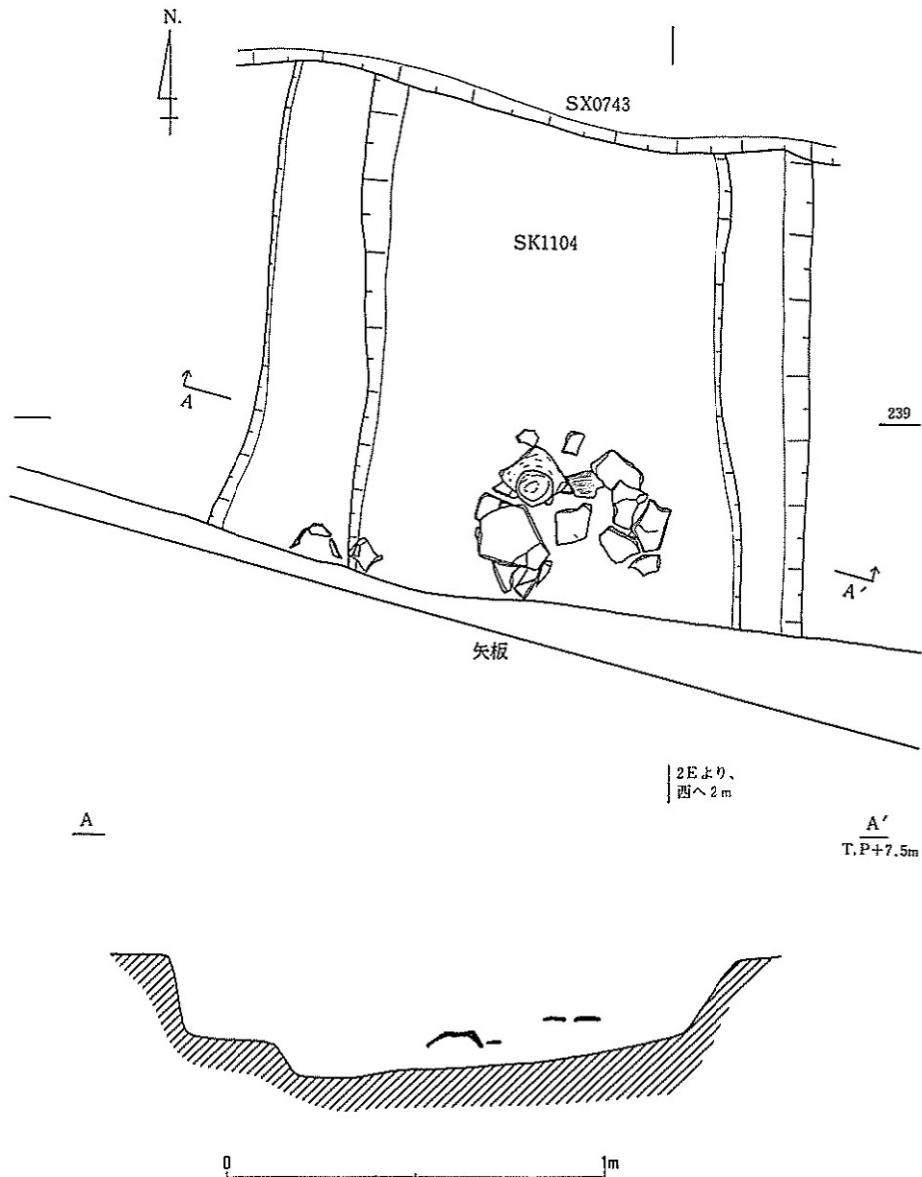


fig.100 弥生中期遺構面 S K1104遺物出土状況平面図及び断面図 (1/20)

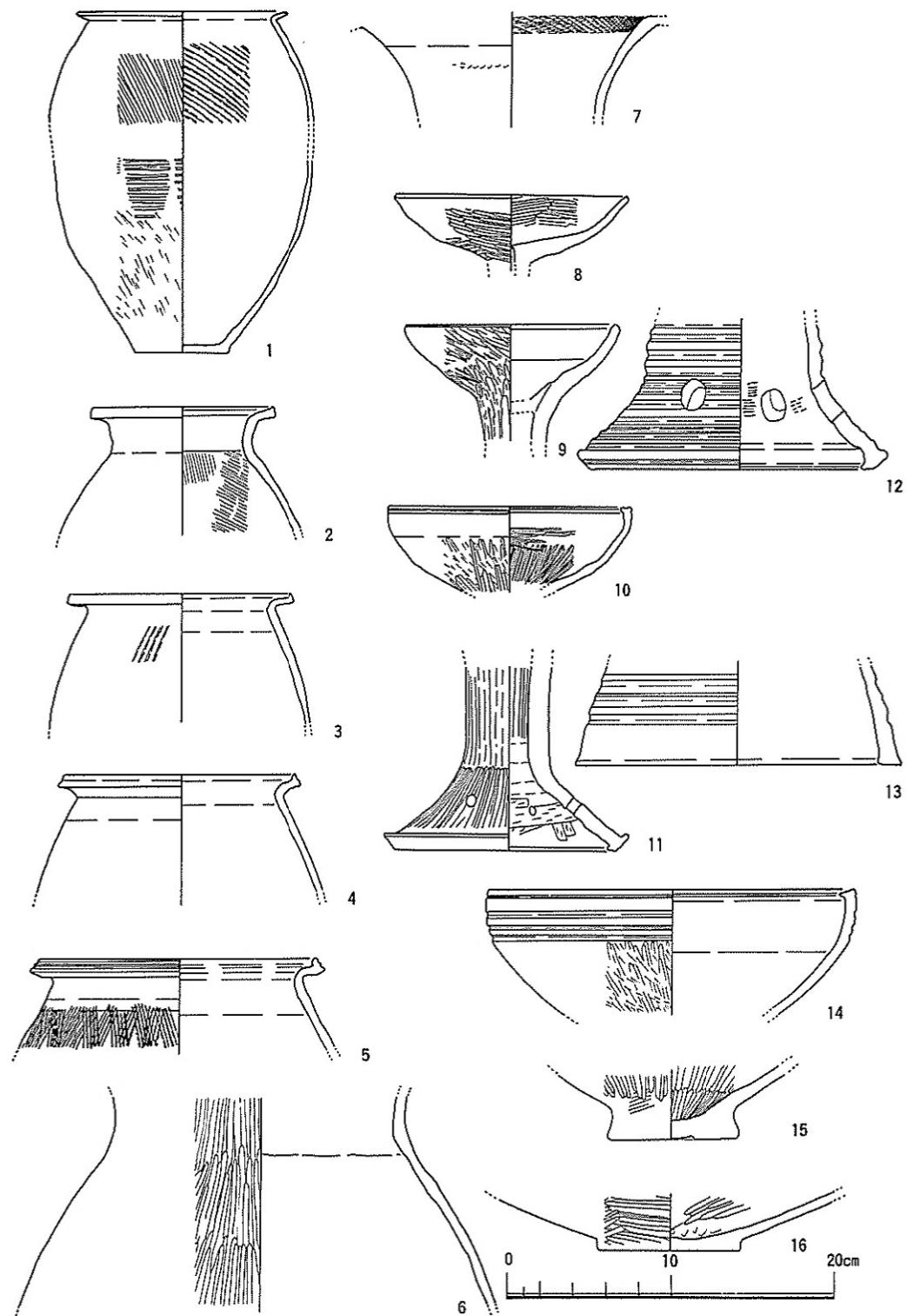


fig. 101 弥生中期遺構面SK1104出土遺物① S=1/4

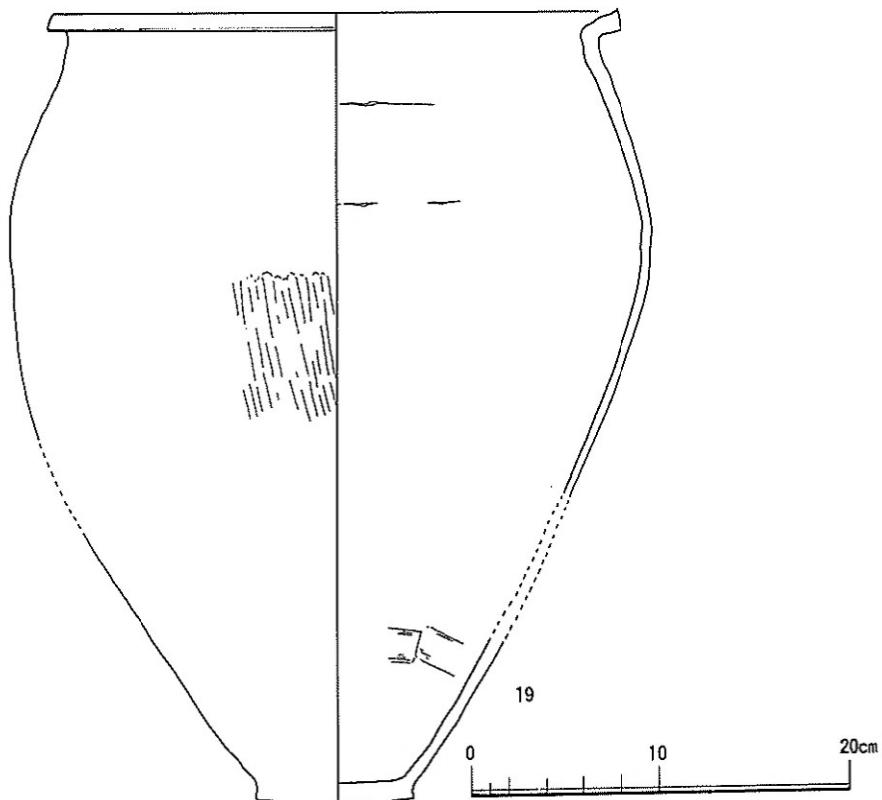
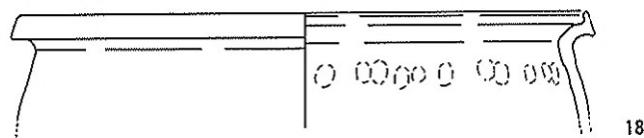


fig.102 弥生中期遺構面S K1104出土遺物② S=1/4

S K1104 (fig.100) 2 E 239付近で検出された。北側は古墳時代の遺構 S X0743によって切られている。また南側は調査区外であり、正確な規模はわからない。巾は上面で1.4m、下面で0.9m、深さ0.35mを測る。断面の形態は逆台形を呈する。検出面のレベルはT.P.+7.2m、底面のレベルはT.P.+6.85mをはかる。埋土は黒灰色土であり、層内より比較的まとまって土器が出土している。

出土土器の器種は、甕・壺・器台・高杯・鉢等である。バラエティに富んでおり、残存状況がよい。土器を廃棄した土坑であろうか。これらの土器の詳細は観察表を参照されたい。出土土器の時期については、弥生中期後葉頃と考えられる。(fig.101,102)

S K1106 (fig.103, 104) Dトレンチ南端の2 G240付近で検出された。東側と南側は調査区外であり、規模は明確でない。遺存していた規模は東西4.2m以上、南北2.6m以上深さは0.4mをはかる。プランは橢円形を呈する。東西断面を観察すれば、①黒色粘土、⑦暗青灰色粘土(炭・弥生土器含む)、⑧黒灰色シルト(炭含む)が上方より堆積している。上層は弥生後期の溝S D0929によって切られている。断面の形態は浅鉢形であるが、⑧層によってU字形に落ち込んでいる。弥生土器が多量に検出されるのは⑦暗青灰色粘土内である。

出土土器の器種は壺・甕・鉢等であり、比較的まとまって出土しており、残存率もよい。これらの土器は廃棄された状況で検出された。この遺構については当初炭等が多量に混じるので住居ではないかと考えたが、柱穴等がみられず土坑とした。土坑の検出面のレベルはT.P.+7.2m、底面のレベルはT.P.+6.85mである。出土土器の時期については弥生中期前葉頃と考えられる。

D. 小 結

本遺構は、ほぼトレンチ全域に遺構がみられるが、弥生後期遺構面IIに比べて希薄で、No.216より以北は、ほとんど溝のみである。

建物遺構は、2棟検出されており、両棟とも1間×3間で、ほぼ同規模の掘立柱建物である。

S K1103からは、大形の壺が横位で出土しており、壺棺墓の可能性が強く、弥生後期初頭のものと考えられる。前述の2棟の建物についても、近似した時期のものであろう。

トレンチ南端で検出されたS K1104はS X0743によって上部を削られているが、中期後葉の土器がまとめて出土した。またS K1106については、当初、竪穴住居と考えていたものが、明確にピットが存在しないため、土坑としたものであるが、畿内第II様式の土器が多量に出土した。

中期の土器がみられる遺構としては、S D1017、S B1003、S K1104～1106しかなく、明確に集落を形づくっているとは考えられない。また、その遺構の構築時期についても、ばらつきがみられる。ただ、遺構内から、中期の土器がまとめて出土していることから、周辺に中期の集落の存在が推定されよう。

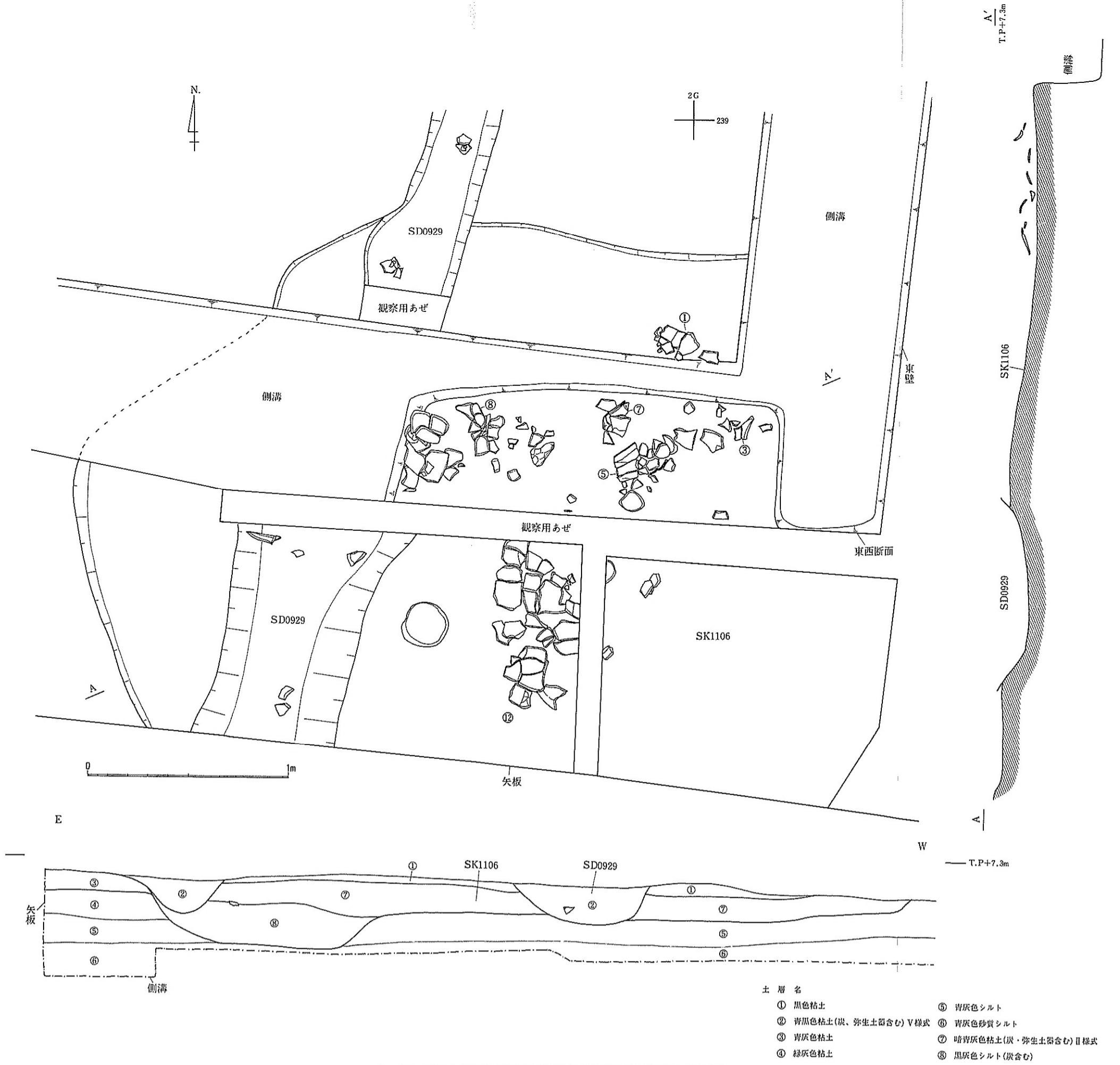


fig.103 弥生中期遺構面 S K1106遺物出土状況平面図及び東西断面図

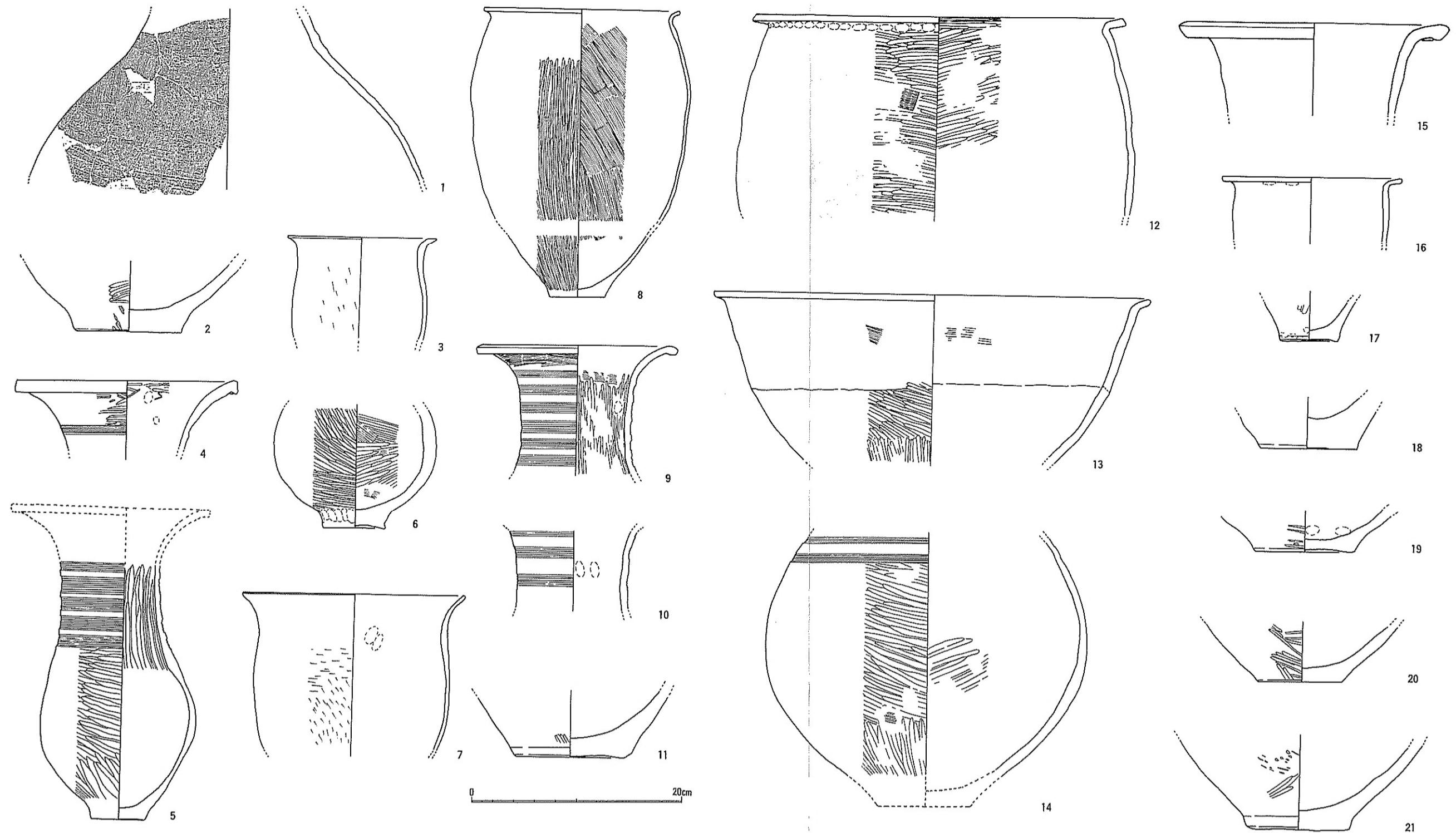


fig.104 弥生中期遺構面SK1106出土遺物 S=1/4

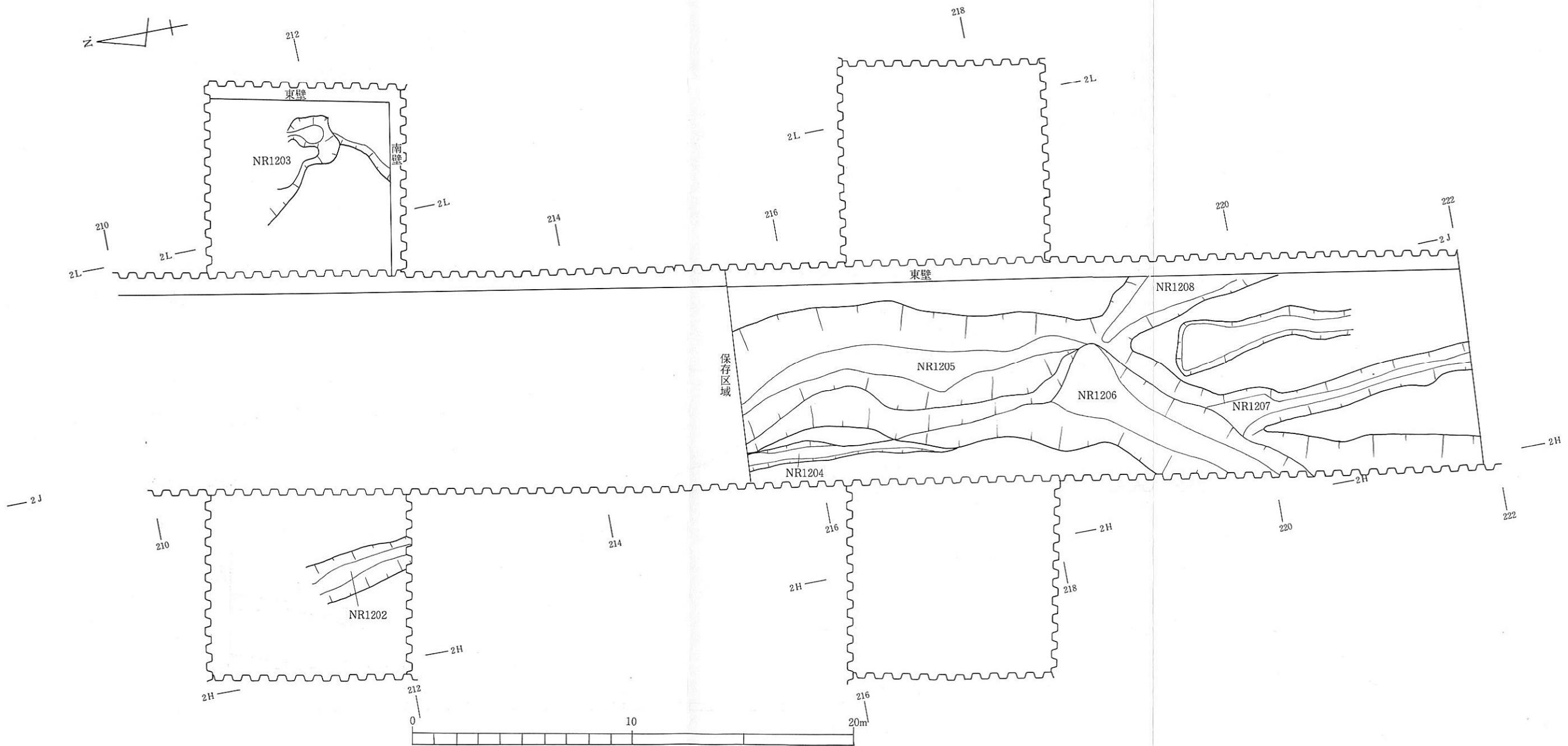


fig.105 弥生中期以前の自然河川① (1/200)

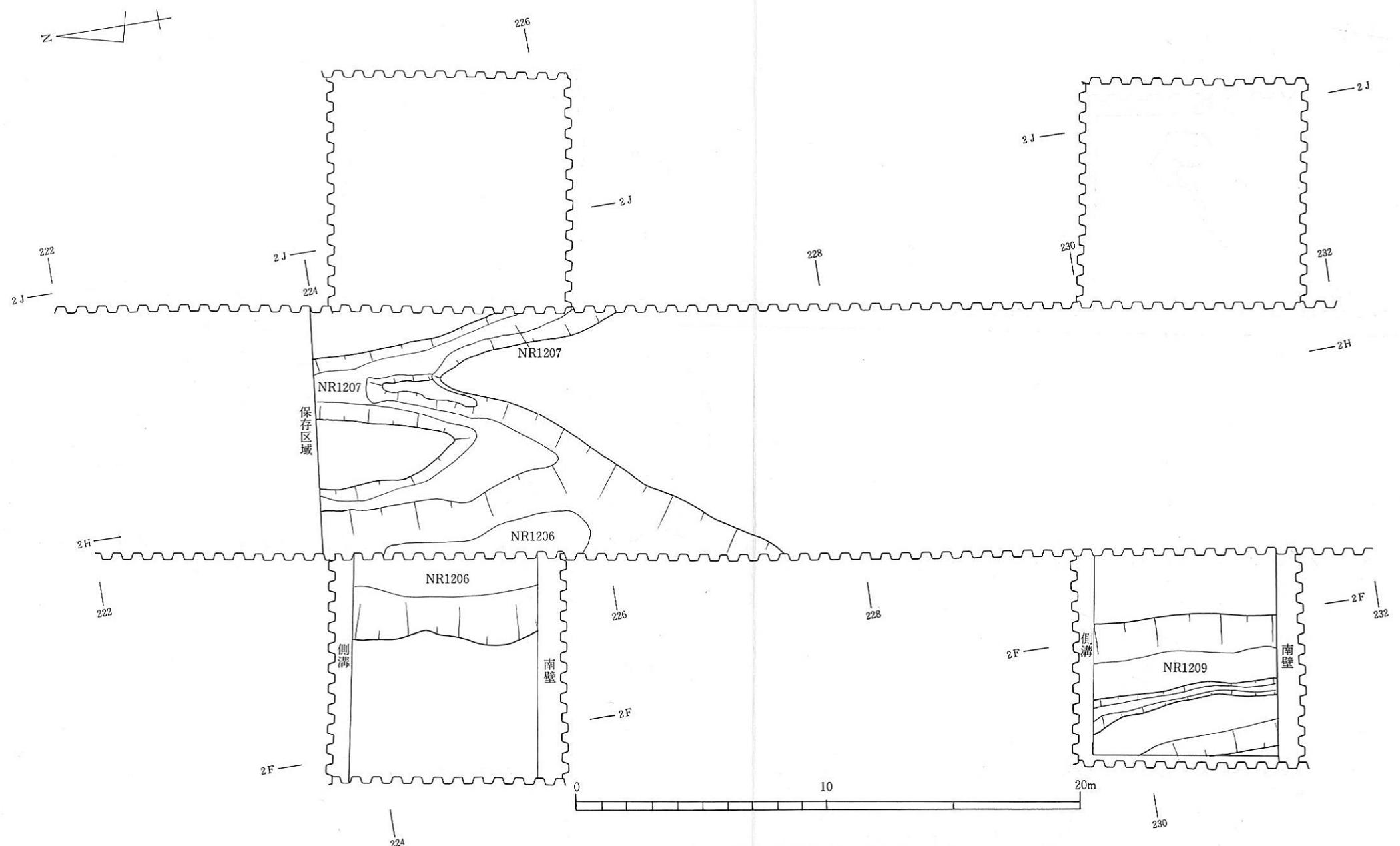


fig.106 弥生中期以前の自然河川② (1/200)

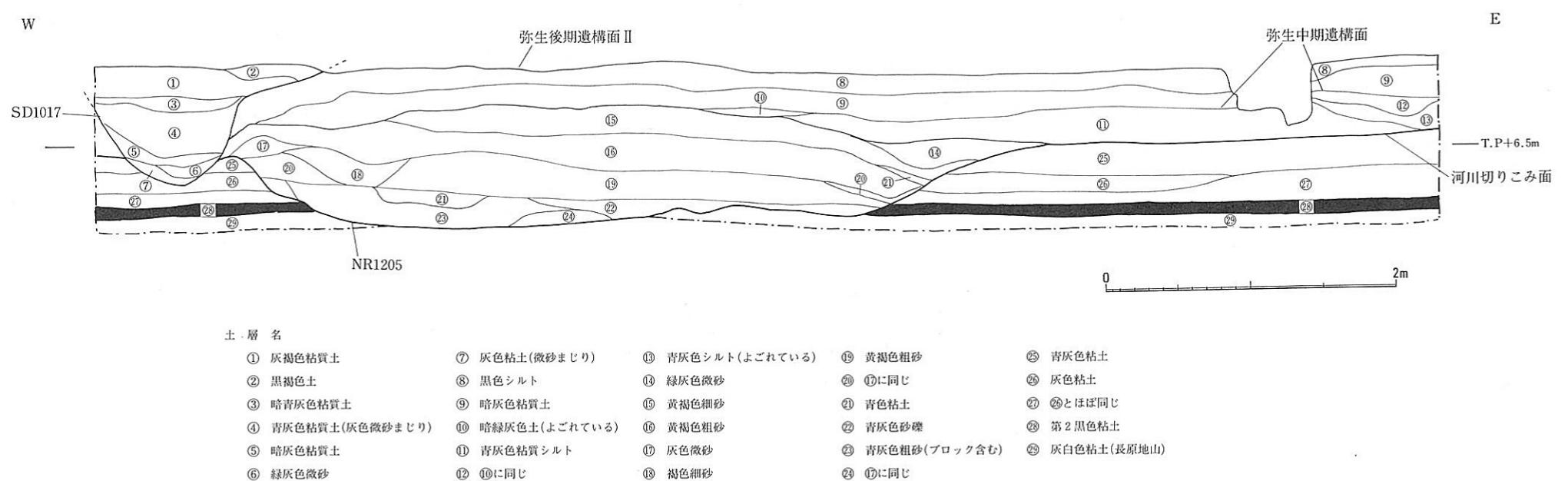


fig.107 弥生中期以前の自然河川NR1205東西断面216付近 (1/40)

第11節 弥生中期以前の遺構

第13層（灰色粘土）上面を遺構面とする。遺構面は北へ行くに従って低くなっている。南端でT.P.+6.6m、北端でT.P.+5.9mである。検出した遺構は幾条にもみられる自然河川である。

A. 自然河川 (fig.105~107)

No.212からNo.232にかけて検出された。

N R 1205～N R 1208 N R 1205は、巾5.5m、長16m以上をはかり、No.219付近でN R 1206、N R 1208と合流する。N R 1206は、巾5m、長37m以上をはかり、南へ伸ばすと、No.230付近でN R 1209になるかもしれない。N R 1209の巾は5.5m。N R 1208は、No.219付近でN R 1205と合流する。南方へ伸びる様で長4m以上である。N R 1207は、No.220付近でN R 1206と合流するが、その規模は巾1.4m、長32m以上をはかり、北へ伸ばすとN R 1204、N R 1202に続くかもしれない。これはS D1017の痕跡でもある。

No.216付近で東西断面をみれば、N R 1205の堆積と他の遺構の状況が明確になる。(fig.107) N R 1205の切り込み面は⑫青灰色粘土であり、レベルはT.P.+6.6mである。底面は⑬第2黒色粘土、⑭灰白色粘土（長原地山）を一部削っており、上層では砂が盛り上がっている。上層より堆積は⑮黄褐色細砂⑯黄褐色粗砂⑰黄褐色粗砂⑪青灰色砂礫⑫灰色微砂になっている。底面のレベルはT.P.+5.9mをはかる。⑮や⑯層から木片等が出土するが、明確な土器はみられない。ただ一点ではあるが、かなりコーリングをうけた前期の弥生土器が出土している。層位等からこの自然河川群の時期を弥生前期頃と考えたい。

B. その他

第13層（灰色粘土）より下層には遺構はなかった。

第14層は第2黒色粘土である。上面のレベルは南端でT.P.+6.45m、北端でT.P.+6.85mで、240mの間に約0.4m北へ傾斜している。この第2黒色粘土は火山灰が堆積したものと最近いわれている。ただ2J 232付近の、第2黒色粘土上面で、長20cm、径5cmの軽石が出土している。持ち運ばれたものであろうか。火山の噴火の時期によって第2黒色粘土上面の時期も明確になるであろう。

第15層は灰白色粘土である。洪積層にあたる。上面のレベルは南端でT.P.+6.3m、北端でT.P.+5.7mをはかる。厚さは約10cmである。層内より遺物は出土しなかった。これより下層は青灰色粘土系の土層が続き、T.P.+5.2m付近では、青灰色細砂の河川も見られる。かなり大規模な河川なのである。最終掘削面のレベルは、T.P.+4.5mである。 (上林)

城山遺跡（その2）出土土器観察表

SD 0502 (fig. 20・21)

土器番号	トレンド名	遺構名	器種	法量 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	特 徴	備 考
1	D	SD 0502	土師器皿	口径 器高 20.0 3.2	密。赤色粒含む。	堅 級	外) 淡黄 内) 黄赤 断) 淡黄赤	内面に暗文がみられる。	残存率 90%
2	D	SD 0502	土師器皿	口径 器高 14.8 2.8	密。	やや軟	外) にじい黄橙 内) 淡黄		残存率 80%
3	D	SD 0502	土師器皿	口径 器高 14.8 2.7	密。1mm以下の砂粒を若干含む。	やや軟	外) 橙 内) 黄橙		残存率 97%
4	D	SD 0502	土師器皿	口径 器高 14.8 2.7	密。2mm以下の砂粒をわずかに含む。	やや軟	外) 灰白 内) 灰白		残存率 65%
5	D	SD 0502	土師器皿	口径 器高 13.8 2.5	密。赤色、白色粒を含む。	堅 級	内・外・断) 灰白 (5 Y 8/2)		残存率 95%
6	D	SD 0502	土師器皿	口径 器高 13.6 2.6	密。雲母、白色粒を含む。	堅 級	外) 灰 内) 黄灰 断) 黄灰		残存率 98%
7	D	SD 0502	土師器皿	口径 器高 13.1 2.0	密。	堅 級	外) にじい黄橙 内) 淡黄橙		残存率 25%
8	D	SD 0502	土師器皿	口径 器高 8.9 1.75	密。赤色粒を含む。	堅 級	灰白 (5 Y 8/2)		残存率 75%
9	D	SD 0502	土師器皿 (底部)	底径 9.65	密。1mm以下の微砂粒を含む。	堅 級	淡黄		残存率 15%
10	D	SD 0502	須恵器皿 (底部)	底径 9.8	密。3mm以下の石英、その他の砂粒を含む。	堅 級	青灰		
11	D	SD 0502	土師器皿 小型壺	口径 10.2 器高 6.9	密。金雲母・白色粒を含む。	堅 級	外) 黒灰 内) 赤黄 断) 赤灰	口縁部に1条の沈線がめぐる。 口縁部から体部にかけて外面にヘラミガキがみられる。	完形品
12	D	SD 0502	土師器皿 小型壺	口径 10.8	密。1mm以下の砂粒をわずかに含む。	堅 級	外) 橙 内) 灰白		残存率 20%
13	D	SD 0502	土師器皿 小型壺	口径 12.3	密。4mm以下の砂粒を含む。	堅 級	外) 淡黄 内) 淡黄		残存率 50%
14	D	SD 0502	土師器皿 小型壺	口径 14.8 器高 9.15	密。8mm以下の砂粒を含む。	やや軟	外) 淡黄 内) 明黄褐		残存率 40%
15	D	SD 0502	須恵器皿 杯身	口径 17.7 器高 5.0 高台径 18.25	密。	堅 級	外) 明灰 内) 明灰		残存率 20%
16	D	SD 0502	須恵器皿 平版	体部最大径 底径 18.5 7.5	密。黑色粒を多く含む。	堅 級	明青灰 (5 B 7/1) 綠灰 (5 G 6/1)	頭部上方に1条の沈線をめぐらす。 外面、自然釉かぶり。	残存率 80%
17	D	SD 0502	土師質 飼付壺	口径 80.4 飼径 88.0	粗。8mm以下の長石、その他の砂粒を含む。	やや軟	外) 淡赤褐 内) 灰褐 断) 灰褐	飼下面から体部にかけてスス付着。	残存率 20%
18	D	SD 0502	土師質 飼付壺	口径 80.6 飼径 81.9	粗。2mm以下の砂粒を含む。	堅 級	外) 黄褐 内) 灰黄褐 断) 灰褐	飼下面から体部外面・体部内面ス ス付着。	残存率 10%
19	D	SD 0502	土師質 飼付壺	飼径 27.5	密。2mm以下の砂粒を含む。	やや軟	外) にじい黄橙 内) にじい褐 断) にじい褐	飼下面から体部外面ス付着。	残存率 5%
20	D	SD 0502	土師質 土金	口径 19.4 飼径 24.8	粗。4mm以下の砂粒を含む。	やや軟	外) 灰黄 内) 暗灰黄 断) 明赤褐		残存率 7%
21	D	SD 0502	土師質 飼付壺	飼径 32.0	粗。3mm以下の砂粒を含む。	堅 級	外) 橙 内) 橙 断) にじい橙	飼下面から体部にかけてスス付着。	残存率 8%
22	D	SD 0502	土師質 飼付壺	飼径 80.0	粗。4mm以下の砂粒を含む。	やや軟	外) 灰黄 内) 断) 灰黄褐	飼下面から体部にかけてスス付着。	残存率 5%
23	D	SD 0502	土師質 飼付壺	飼径 41.4	粗。4mm以下の砂粒を含む。	やや軟	外) 灰白 内) 暗褐 断) 褐	内面ス付着。	
24	D	SD 0502	土師質 把手付釜		密。1mm以下の砂粒を含む。	堅 級	外) 灰黄褐 内) にじい褐 断) 橙		残存率 5%

SX 0743 (fig. 30~33)

土器番号	トレント名	遺構名	器種	法量 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	特 徴	備 考
1	D	SX 0743	壺	口径 20.2 体部最大径 29.6	密。赤色粒・白色粒 金雲母を含む。	堅 級	外) ススにより黒灰 内) 淡黄(2.5 Y 8/4) 断) 淡黄(2.5 Y)	外面スス付着	残存率 85% 反転復元
2	D	SX 0743	高杯 (杯部)	口径 18.3	密。白色粒・赤色粒 金雲母を含む。	堅 級	淡黄(5 YR 8/4)		
3	D	SX 0743	須恵器 高杯 (脚部)	底径 10.8	密。白色粒・黒色粒 を含む。	良 好	外) 青灰(5 B 6/1) 内) 断) セピア サンドイッチ状	脚部中位に4方向の円形スカシを 穿つ。	
4	D	SX 0743	土師器碗	口径 12.1	密。3mm以下の砂粒 を含む。	やや軟	外) 灰白(10 YR 8/2) 内) 淡黄(2.5 Y 8/3) 断) 淡黄(5 YR 7/6)と 灰(5 B 6/1)のサン ドイッチ状		残存率 80%
5	D	SX 0743	土師器 高杯 (杯部)	口径 13.7	赤色粒多く含む。	堅 級	外) 淡黄橙 内) 淡黄(7.5 YR 8/4) 断) 淡黄橙 (7.5 YR 8/3)	須恵器に用いられる調整がみとめ られる。(体部から口縁部にかけては内・外とも回転ナデ、底部 外表面回転ヘラケズリ、内面ナデ) 内外面とも一部火をうけている。	残存率 40%
6	D	SX 0743	韓式系土 器?	口径 11.4 器高 12.9 体部最大径 13.7	白色粒・金雲母を含 む。	堅 級	外) 淡黄橙 (7.5 YR 8/4) 内) 淡黄 (2.5 Y 8/3) 断) 灰白(5 Y 8/2)	外面スス付着。	残存率 70% 反転復元
7	D	SX 0743	須恵器 器台	口径 88.6 器高 29.0 底径 80.5	密。	良好堅級	外) 灰黑 内) 緑灰、自然釉 断) セピアのサンドイ ッチ状	脚部外面に3段(1・3・2条) の突唇、その下方に2条の波状文を 施し、突唇間に1条・2条の波状文、 波線上に2条づつの刺突文を 施す。台部は8段(3・2・2条) の突唇をめぐらし、その間に2方 向の2段長方形スカシと2条づつ の波状文、1条づつの刺突文を配 す。外面に自然釉をかぶる。	残存率 45% 反転復元
8	D	SX 0743	土師器 高杯 (杯部)	口径 13.6	赤色粒・白色粒を含 む。	堅 級	外) 淡黄(5 YR 8/4) 内) 橙(2.5 YR 7/6) 断) 淡黄(5 YR 8/4)	一部須恵器に用いられる調整がみ とめられる(口縁部回転ナデ)。	残存率 40%
9-a	D	SX 0743	土師器 高杯 (杯部)	口径 14.4	密。白色粒を含む。	堅 級	外) 淡黄(5 YR 8/4) 内) 橙(5 YR 7/6)		残存率 80% 反転復元
9-b	D	SX 0743	土師器 高杯	口径 13.8 器高 11.6 底径 8.9	白色砂粒・赤色粒を 含む。	堅 級	淡黄(7.5 YR 8/4)	脚柱部下方に8方向の円形スカシ を穿つ。	残存率 70% 杯部反転復元
10	D	SX 0743	土師器 高杯 (杯部)	口径 13.1	白色粒を含む。	堅 級	外) 乳黄、灰白 (7.5 YR 8/2)	口縁部外面に1条の沈線がめぐる。 口縁内外面粗窓。	
11	D	SX 0743	韓式系土 器?	口径 12.85 器高 13.6 体部最大径 14.4	白色砂粒・金雲母を 含む。	堅 級	外) 橙(2.5 YR 7/6) 内) 赤褐	体部外面のハケは非常に荒く強い。 外面全体と口縁内面は火をうけ、 赤変黒化。ススが付着している。	
12	D	SX 0743	土師器蓋	口径 10.2 器高 4.0	赤色粒・金雲母を含 む。	堅 級	外) 淡黄 (7.5 YR 8/4)	須恵器の形態を呈する。	残存率 65% 反転復元
13	D	SX 0743	須恵器蓋 (口縁部)	口径 25.8	白色粒・黒色粒を含 む。	良好堅級	外) 青灰(5 B 5/1) 内) 断) 灰白 サンドイッチ状	内外面とも自然釉をかぶる。	
14	D	SX 0743	韓式系土 器?	口径 12.1 器高 6.6	密。白色砂粒を含む。	堅 級	淡黄(2.5 Y 8/3)	口辺部内外面一部スス付着。	
15	D	SX 0743	韓式系土 器?	口径 17.6	密。3mm以下の砂粒 を含む。	堅 級	外) 淡黄 (2.5 Y 8/3) 断) 灰白 (2.5 Y 8/2)		残存率 25%
16	D	SX 0743	韓式系土 器?	口径 12.1 器高 11.0 底径 6.0	白色砂粒を含む。	堅 級	外) 橙(5 YR 7/6) 内) 淡黄(10 YR 8/3)	体部外面全体にスス付着。	残存率 98%
17	D	SX 0743	土師器 高杯	口径 12.8 器高 10.9 底径 8.4	白色砂粒・雲母を含 む。	堅 級	外) 橙(2.5 YR 7/6) 内) 浅赤褐 (2.5 YR 7/4) 断) 淡黄(7.5 YR 8/3)	外面は丹を塗布している。	
18	D	SX 0743	土師器 高杯 (脚部)	底径 8.9	白色砂粒・赤色粒を 含む。	堅 級	淡黄(7.5 YR 8/6)	脚部に1条の沈線がめぐる。	残存率 40% 反転復元

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量(cm)	胎 土	焼 成	色 調	特 徴	備 考
1 9	D	SX 0748	須恵器壺(口部)	口径 18.2 器高 底径	白色粒を含む。	良好堅緻	外) 青灰 内) (5B6/1) 断) セビア サンディッシュ状	口縁部上半に2条の突線と、8条(4・4、11~12本)の波状文をめぐらす。一部自然釉かぶり。	
2 0	D	SX 0748	土師器 高 杯	口径 14.1 器高 底径 8.7	白色粒を含む。	堅 細	乳黄・灰白 (2.5 Y 8/2)		
2 1	D	SX 0748	土師器 高 杯	口径 18.0 器高 底径 12.8 11.5	密。金雲母・赤色粒を含む。	堅 細	外) 淡黄橙 内) (7.5 YR 8/4) 断) 淡黄橙 (7.5 YR 8/3)	杯部下方にはりつけ突唇の痕跡がみられる。脚部に回転ナザが施されている。	
2 2	D	SX 0748	土師器 高 杯	口径 12.7 10.4 10.0 器高 底径	赤色粒を多く含む。	堅 細	外) 淡黄橙 内) (2.5 YR) 断) 灰	口縁部回転ナザ。 杯部内面・外面一部火をうけて赤化。	残存率 50%
2 3	D	SX 0748	土師器 高 杯	口径 14.1 器高 底径	赤色粒・白色砂粒を含む。	堅 細	乳灰・赤灰	口縁部外面に赤灰色の火をうけたあとがみられる。(製造に使われたためと思われる)内面にスス付着。	口縁部反転復元
24-a	D	SX 0748	韓式系土 器 平底鉢	口径 12.8 13.1 6.5 器高 底径	密。白色砂粒・金雲母を含む。	堅 細	外) 淡黄橙(10 YR) 内) 乳黄(8/3)	体部外面中位よりやや上に1条の沈線がめぐる。	
24-b	D	SX 0748	土師器壺 (口部)	口径 16.9 器高 底径	粗。5mm程度の小石及び2mm以下の砂粒を多く含む。	堅 細	内) 淡黄橙 (10 YR 8/3) 断) 灰白 (7.5 YR 8/1)		残存率 20%
2 5	D	SX 0748	韓式系土 器 杯	口径 9.4 器高 9.8	密。白色粒を多く含む。	堅 細	淡黄橙 (7.5 YR 8/8)	外面のハケは強い。	
2 6	D	SX 0748	須恵器壺 (口部)		白色粒を含む。	良好堅緻	外) 明青灰(5B7/1) 内) 明紫灰(5P7/1)	口縁部外面に1条の突線をめぐらす。	
2 7	D	SX 0748	韓式系土 器 平底鉢	口径 12.2 14.6 7.4 器高 底径	白色粒・金雲母を含む。	堅 細	外) 淡黄橙 (7.5 YR 8/4) 断) 灰(7.5 YR 5/1)	底部に木ノ葉状圧痕がみられる。内外面にスス付着。一部赤変黒化。	残存率 70% 反転復元
2 8	D	SX 0748	須恵器 高 杯 (杯部)	口径 15.4 器高 底径	白色粒を含む。	良好堅緻	外) 青灰 (5B5/1) 断) セビア サンディッシュ状	内面自然釉かぶり	反転復元
29-a	D	SX 0748	高 杯 (脚部)	底径 15.9 高さ 1mm以下の微砂粒を含む。	やや軟	外) 淡黄(2.5 Y 8/8) 内) 灰(5 YR 7/6) 断) 外面に同じ			残存率 30% 一部反転復元
29-b	D	SX 0748	土師器 平底鉢	口径 11.9 13.8 5.9 器高 底径	粗。2mm以下の砂粒を多く含む。		外) 灰白(2.5 Y 8/2) 黑(2.5 Y 2/1) にみい赤褐 (10 R 6/3) 内) 明赤褐 (2.8 R 5/8) 褐灰(10 R 6/1) 断) 内面に同様		残存率 70%
3 0	D	SX 0748	須恵器 把手付鉢	口径 9.8 10.5 5.8 器高 底径	密。黑色粒を含む。	良好堅緻	暗青灰(5B4/1)	体部外面に1条の沈線及び2条の突線をめぐらし、それぞれの下方に各1条(15・10~12・12本)の波状文を施す。	反転復元
3 1	D	SX 0748	土師器 高 杯 (脚部)	底径 9.5 高さ	白色砂粒を多く含む。	堅 細	外) 淡黄(5 YR 8/4) 内) 淡黄橙 (7.5 YR 8/4)		
3'2	D	SX 0748	韓式系土 器 盆	口径 13.3 13.7 8.8 器高 底径	白色粒・黑色粒を多く含む。	堅 細	外) 淡黄橙 (10 YR 8/3) 内) " (7.5 YR 8/3) 断) "	外面に網目のタタキを施す。	残存率 50% 反転復元
3 3	D	SX 0748	韓式系土 器 平底鉢	口径 11.9 11.3 6.8 器高 底径	密。1mm以下の微砂粒を含む。	堅 細	外) 乳黄・赤黄 内) 乳黄 断) "		残存率 45% 反転復元
3 4	D	SX 0748	須恵器 杯 部	口径 22.4 器高 底径	黑色粒を多く含む。	良好堅緻	灰白(N 7/0)	口縁下方に1条のやや鋭い棱をめぐらす。	
3 5	D	SX 0748	須恵器 高 杯 (杯部)	口径 14.4 器高 底径	黑色粒を含む。	良 好	灰白(N 7/0)		
3 6	D	SX 0748	土師器 直口壺 (口部)	口径 11.5 器高 底径	密。8mm以下の石英長石を含む。	堅 細	にみい黄橙 (10 YR 7/2)		
3 7	D	SX 0748	土師器 杯	口径 7.6 器高 底径	白色砂粒・黑色粒を多く含む。	やや軟	外) 淡黄 (2.5 Y 8/8) 内) 断	須恵器の形態・手法をもつ。	残存率 35% 反転復元
3 8	D	SX 0748	須恵器 高 杯 (脚部)	底径 9.2 高さ	密。黑色粒を含む。	良 好	灰白	脚部に1条の突線をめぐらす。	

SD 0917 (fig. 43)

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量 (cm)	胎土	焼成	色調	特徴	備考
1	D	SD 0917	壺 (口頸部)	口径 12.2	粗。4 mm以下の石英・長石・カリ塗・金雲母を多量に含む。	堅 硬	外) にぶい黄橙 (10 YR 7/3) 内) 断		残存率 5%
2	D	SD 0917	壺 (口頸部)	口径 12.8	粗。7 mmの小石1ヶ 3 mm以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) にぶい黄橙 (10 YR 7/3) 内) 断 にぶい橙 (7.5 YR 7/3)		残存率 5%
3	D	SD 0917	壺	口径 10.0	粗。1.5 mm以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 明黄褐 (10 YR 6/6) 内) にぶい橙 (7.5 YR 6/4)		残存率 5%
4	D	SD 0917	甕 (底部)	底径 5.0	粗。1 mm以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) にぶい赤褐 (5 YR 5/3) 内) にぶい橙 (7.5 YR 6/4)	外面スス付着。	
5	D	SD 0917	甕 (底部)	底径 5.5	粗。3 mm以下の砂粒を含む。	やや軟	外) 浅黄橙 (10 YR 8/3)		
6	D	SD 0917	甕 (底部)	底径 4.2	粗。8 mm以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 橙 (2.5 YR 6/6) 内) にぶい黄橙 (10 YR 7/4)	外面スス付着。	
7	D	SD 0917	甕 (底部)	底径 4.9	粗。8 mm以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 橙 (5 YR 6/6) 内) にぶい橙 (7.5 YR 7/3)		
8	D	SD 0917	甕 (口頸部)	口径 15.2	粗。4 mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 橙 (7.5 YR 7/6) 内) 灰白 (2.5 Y 8/2)		残存率 5%
9	D	SD 0917	壺 (底部)	底径 10.6	粗。4 mm以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 橙 (7.5 YR 6/6)	朱付着	
10	D	SD 0917	甕 (底部)	底径 5.0	粗。3 mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 明赤褐 (5 YR 5/6) 内) にぶい黄橙 (10 YR 7/4)		
11	D	SD 0917	高杯 (杯・口位部)	口径 20.4	粗。8 mm以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 橙 (5 YR 6/6) 内) 浅黄橙 (10 YR 8/3)	口縁部外面及び体部外面にスス付着。	
12	D	SD 0917	高杯	口径 24.4	粗。8 mm以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 灰白 (7.5 YR 8/2) 内) にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 断 灰白 (7.5 YR 8/2)		
13	D	SD 0917	甕 (口頸部)	口径 18.0	密。5 mm程度・3 mm以下の石英・長石・角閃石を多く含む。	堅 硬	外) にぶい黄橙 (10 YR 5/8) 内) 黄褐 (2.5 Y 5/8)		残存率 5%
14	D	SD 0917	甕 (口頸部)	口径 24.0	粗。5 mm以下の石英・長石・カリ塗を多量に含む。	軟	外) 淡橙 (5 YR 8/8) 内) 灰白 (7.5 YR 8/2)		残存率 5%
15	D	SD 0917	甕	口径 12.3 器高 14.7 体部最大径 12.9 底径 5.0	密。8 mm以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 橙 (5 YR 6/6) 内) 断	内面炭素吸着	残存率 40%
16	D	SD 0917	鉢	口径 5.8 器高 6.65 底径 3.9	密。1 mm以下の石英・長石を少し含む。	堅 硬	外) にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 内) 断 灰白 (10 YR 8/1)	体部外面にヘラによる線刻がみられる。	
17	D	SD 0917	壺 (口頸部)	口径 8.5	密。1 mm以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 浅黄 (2.5 Y 7/4) 内) 断	外面にヘラによる線刻がみられる。	残存率 5%
18	D	SD 0917	有孔鉢	口径 18.05 器高 7.4 底径 3.8	密。4 ~ 7 mmの小石 3 mm以下の石英・長石を含む。	軟	外) 橙 (5 YR 7/6) 内) 断	口縁部内面一部スス付着。	
19	D	SD 0917	高杯 (杯部)	口径 18.6	粗。3 mm以下の石英・長石を少し含む。	堅 硬	外) 橙 (7.5 YR 6/6) 内) 橙 (7.5 YR 7/6) 断 にぶい橙 (7.5 YR 7/3)		
20	D	SD 0917	壺 (口頸部)	口径 16.6	粗。8 ~ 6 mmの小石 3 mm以下の石英・長石を含む。	軟	外) 黄橙 (7.5 YR 7/8) 内) 断		
21	D	SD 0917	高杯 (脚部)		粗。1.5 mm以下の石英・長石・金雲母を多量に含む。	やや軟	外) にぶい赤橙 (10 YR 6/4) 内) 断	脚部に6条の弦線をめぐらす。 裾部に4方向の円形スカシを穿つ。	残存率 20%

SB 0901 (fig. 45)

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量 (cm)	胎 土	焼 成	色 調	特 徴	備 考
1	D	SB 0901	壺	口径 18.4 器高 19.4 体部最大径 18.9 底径 19.4	粗。7 mm・3 mm以下 の石英・長石を含む。	やや軟	外) 橙 内) 橙 (2.5 YR 6/8)		残存率 85%
2	D	SB 0901	有孔鉢	口径 12.7 器高 8.4 体部最大径 12.8 底径 8.8	粗。2 mm以下 の石英・ 長石を含む。	やや軟	外) 赤橙 (10 R 6/6) 内) にせい黄橙 (10 YR 7/8) 断) 橙 (2.5 YR 6/6)		残存率 70%
3	D	SB 0901	甕	口径 14.6 器高 21.9 体部最大径 17.6 底径 4.4	密。5 mm以下 の石英・ 長石を含む。	堅 硬	外) にせい橙 (5 YR 7/4) 内) にせい橙 (5 YR 6/8)		残存率 95%
4	D	SB 0901	器 台	口径 18.95 器高 17.7 底径 14.1	粗。4 mm以下 の石英・ 長石を含む。	堅 硬	外) 橙 (7.5 YR 7/6) 内) 橙 (7.5 YR 7/6)	筒部に3段、4方向の円形スカシ を穿つ。 口縁部内面に黒斑がみられる。	残存率 96%
5	D	SB 0901	甕	口径 17.3 器高 24.2 体部最大径 20.0 底径 4.0	密。3 mm以下 の石英・ 長石を含む。	やや軟	外) 橙 (5 YR 7/6) 内) 灰白 (2.5 YR 8/2) 断) 明黄褐 (10 YR 7/6)		残存率 90%
6	D	SB 0901	器 台	口径 21.7 器高 19.95 底径 17.7	粗。6 mm程度・4 mm 以下の石英・ 長石を 多数含む。	軟	外) にせい橙 (5 YR 7/4) 内) にせい橙 (5 YR 7/4) 断) 浅黄橙 (10 YR 8/8)	口縁部外面に1条の竹管文、内面 に1条、腹部外面に2条、底縁部 上方に1条づつの刻み目を施し、 筒部から腹部にかけて2段4方向 の円形スカシを穿つ。	
7	D	SB 0901	壺	口径 11.5 器高 20.0 体部最大径 14.4 底径 4.2	密。白色粒を含む。	堅 硬	外) 乳黄 黑灰 内) 乳白 断) 黄灰		残存率 95%
8	D	SB 0901	鉢	口径 14.85 器高 6.25 底径 5.6	粗。3 mm以下 の石英・ 長石・ クサリ礫を含 む。	やや軟	外) 浅黄橙 (10 YR 8/8)		残存率 98%
9	D	SB 0901	高 杯	口径 19.3 器高 13.4 底径 12.2	密。1 mm以下 の石英・ 長石を少量含む。	堅 硬	外) 灰白 (7.5 Y 8/2) 内) にせい橙 (7.5 YR 7/8)	脚部上方に2段(5・6本)の沈 線文を施し、中位に4方向の円形 スカシを穿つ。 脚部一部スス付着。	残存率 85%
10	D	SB 0901	甕	口径 15.1 器高 28.4 体部最大径 18.6 底径 5.6	粗。4 mm以下 の石英・ 長石を含む。	軟	外) 橙 (5 YR 7/6) 内) 明褐灰 (5 YR 7/2)	体部中位スス付着。	残存率 65%
11	D	SB 0901	壺	口径 10.9 器高 24.5 体部最大径 17.8 底径 5.7	粗。4 mmの砂粒を含 む。	やや軟	外) 灰白 (2.5 YR 8/1) 灰 (10 Y 8/1) 内) 黄橙 (7.5 YR 8/8)	口縁部外面に8ヶ所、ヘラ状工具 による捺刻がみられる。 体部中央にスス付着。	完形品
12	D	SB 0901	高 杯	口径 20.2 器高 12.0 底径 10.9	密。白色粒を含む。	堅 硬	外) 乳黄 黑灰 内) 乳黄	脚部に8方向の円形スカシがみ られる。 一部黒変している。	残存率 99%
13	D	SB 0901	高 杯	口径 24.8 器高 15.85 底径 12.4	粗。4~6 mm及び3 mm以下 の石英・ 長石 を含む。	やや軟	外) 橙 (5 YR 7/8) 内) 橙 (5 YR 7/8)	脚部に5方向の円形スカシを有 する。	残存率 96%
14	D	SB 0901	壺	口径 10.4 器高 21.1 体部最大径 16.4 底径 4.4	密。白色粒を含む。	堅 硬	外) 乳黄 黑灰 内) 乳黄 乳黄	体部上半に7ヶ所ヘラ状工具によ る斜め方向の捺刻がみられる。 下半部火をうけたため、黒・赤化 している。	残存率 99%
15	D	SB 0901	甕	口径 15.9 器高 18.5 体部最大径 15.35 底径 6.95	粗。3 mm以下 の石英・ 長石を含む。	堅 硬	外) にせい橙 (7.5 YR 7/4) 内) にせい橙 (7.5 YR 7/4)		残存率 95%
16	D	SB 0901	甕	口径 15.1 器高 24.0 体部最大径 17.3 底径 4.3	粗。4.5 mm以下 の石 英・長石・ クサリ礫 を多数含む。	やや軟	外) 橙 (7.5 YR 7/6) 内) 橙 (7.5 YR 7/6)	体部下半に黒斑がみられる。	残存率 98%
17	D	SB 0901	長頸壺	口径 11.8 器高 21.1 体部最大径 14.5 底径 4.6	密。金雲母・白色粒 を含む。	堅 硬	外) 乳黄、橙 内) 乳黄、橙	頸部から体部上半に黒斑がみられ る。 生駒西諸産の粘土。	残存率 95%

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量(cm)	胎 土	焼 成	色 調	特 微	備 考
18	D	SB 0901	高杯(脚部)	底径 13.0 密。2.5mm以下の石英・長石を含む。		堅 細	外 (内) 灰白 断 (2.5 Y 8/2)	脚部よりは中位にかけて4条(7-7-7-18本)のヘラ描き状線文を施し、最下段の位置に4方向の円形スカシを穿つ。	残存率 80%
19	D	SB 0901	鉢	口径 22.0 器高 11.2 底径 5.1				内・外面部黒変している。全体的に赤化。内面にスス付着。	
20	D	SB 0901	甕	口径 16.1 器高 22.65 体部最大径 18.55 底径 4.5	密。4~10mm・4mm以下の石英・長石・角閃石・金雲母を含む。	堅 細	外 (内) におい黄褐 断 (10 YR 4/8)	生駒西麓産の胎土。	残存率 95%
21	D	SB 0901	壺(口縁部)	口径 19.5 密。4mm以下の石英・長石・角閃石を含む。		堅 細	外 (内) におい黄褐 断 (10 YR 6/3)		残存率 5%

S X 0902 (fig. 41)

1	D	SX 0902	窓	口径 留溝 体部最大径 底径	18.3 19.6 15.4 4.9	密。白色粒を含む。	堅 級	外) 黒灰 黄灰 内) 黄灰 断) 黄灰	スス付着	残存率 80%
2	D	SX 0902	高杯 (杯部)	口径	21.2	粗。2mm以下の石英・長石・クサリ礫を含む。	軟	外) 浅黄褐 (10 YR 8/3) 内) 浅黄褐 (7.5 YR 8/4) 断) 浅黄褐 (7.5 YR 8/3)		残存率 5%
3	D	SX 0902	器台			密。2mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	堅 級	外) 浅黄 (2.5 Y 7/3) 内) 浅黄 (2.5 Y 8/3) 断) にぶい黄褐 (10 YR 6/4)	簡部に2段の円形スカシを有する。 (下段は4方向、上段は欠損しているため方向不明)	残存率 40%
4	D	SX 0902	窓 (底部)	底径	4.8	密。3mm以下の石英・長石を少し含む。	やや軟	外) 赤褐色 (10 R 5/4) 内) にぶい橙 (2.5 YR 7/4)	外面スス付着。	
5	D	SX 0902	蓋 (底部)	底径	4.6	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) にぶい黄褐 (10 YR 7/4) 内) 褐灰 (10 YR 4/1) 断) 褐灰 (10 YR 5/1)		

SB 1001 (fig. 55~59)

1	D	SB 1001	甕	口径 留高 体部最大 底径	19.1 26.5 20.2 26.5	粗。3 mm以下の石英・ 長石を多数含む。	やや歯	外) 浅黄褐色 (10 YR 8/3) 内) にぼい黄褐色 (10 YR 7/4) 断) 浅黄褐色 (10 YR 8/3)	外面下半スス付着。	残存率 90 %
2	D	SB 1001	器 台	口径 留高 底径	20.2 18.5 16.4	密。白色粒を含む。	堅 硬	外) 赤灰、乳灰 内) 乳灰、黒灰 断) 乳黄	口縁部にヘラ描きの櫛樹文、筒部 外面に3段(4・6・8本)の沈線文 及び最も下段の沈線文の上下に1 条づつ刻み目を配し、2段4方向 の円形スカシを穿つ。	残存率 85 %
3	D	SB 1001	鉢	口径 留高	13.0 13.85	粗。4 mm以下の石英・ 長石を含む。	堅 硬	外) にぼい黄褐色 (10 YR 7/4)	口縁部内・外面スス付着。	残存率 35 %
4	D	SB 1001	高 杯	口径 留高 底径	12.4 11.0 11.6	密。0.8 mm以下の小 石粒を含む。	堅 硬	外) 黒灰、乳灰 内) 黑灰 断) チョコレート 黑灰	口縁部に1条(6~8本)の波状 文、脚底部周辺に8~9本の沈線 文と、その上下にそれぞれ1条づ つの刻み目を施し、さらに下方に 4方向の円形スカシを穿つ。	残存率 85 % 脚底部のみ反 復元
5	D	SB 1001	甕	口径 留高 体部最大 底径	17.05 25.6 19.0 5.8	密。2 mm以下の石英・ 長石を含む。	堅 硬	外) にぼい黄褐色 (10 YR 5/3)	内・外面スス付着。	残存率 95 %
6	D	SB 1001	器 台	口径 留高 底径	16.4 12.4 14.1	密。2 mm以下の白色 粒を含む。	堅 硬	外) 乳黄、黒灰 内) " " 断) 乳黄	口縁部外面に竹管文を施し、脚部 には4方向の卵形スカシを穿つ。	残存率 95 %
7	D	SB 1001	高 杯	口径 留高 底径	28.4 13.2 12.4	密。2 mm以下の石英・ 長石を含む。	やや歯	外) 棱(2.5 YR 6/6) 内) " (2.5 YR 6/8) 断) " (2.5 YR 6/6)		残存率 90 %
8.	D	SB 1001	高 杯	口径 留高 底径	18.6 10.2 10.2	粗。3 mm以下の石英・ 長石を含む。	やや歯	外) にぼい黄褐色 (5 YR 6/3)	口縁部・脚部内外面スス付着。	残存率 95 %

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量(cm)	胎 土	焼 成	色 調	特 徴	備 考
9	D	SB1001	高杯	口径 器高 底径 24.6 19.2 16.9	密。	堅 織	外) 黒灰、淡黄 内) 暗黄、黒灰 断) 淡黄	口縁部外面に円形浮文(3ヶ1組 5方向と思われる)を貼りつけ、 上下縦に刻み目を施す。脚部に 5方向の円形スカシを穿つ。脚部 は火を受け黒変している。	残存率 85% 杯部及び脚部 反応復元
10	D	SB1001	台付壺	口径 器高 体部最大径 底径 7.9 18.4 14.6 9.6	密。2mm以下の石英・ 長石を少量含む。	堅 織	外) にない黄褐 (5 YR 6/6) 断) 橙 (10 YR 6/3)	脚部中位に5方向の円形スカシを 有する。	残存約 60%
11	D	SB1001	高杯	口径 器高 底径 13.85 9.6 7.6	粗。5mm以下の石英・ 長石を含む。	やや軟	外) にない橙 (7.5 YR 6/4)	脚部中位に4方向の円形スカシを 穿つ。 杯部内面及び脚部にスス付着。	残存率 95%
12	D	SB1001	高杯	口径 器高 底径 16.9 11.9 9.4	密。微砂粒を少量含 む。	堅 織	外) 赤灰、乳灰 内) 淡赤灰 断) 乳灰	脚部中位に3方向の円形スカシを 穿つ。全体的に火を受け黒変部分 がある。	残存率 99%
13	D	SB1001	鉢	口径 器高 底径 14.5 5.1	密。0.8mm以下の白 色粒を含む。	堅 織	外) 暗乳灰 内) 乳灰、乳灰	直の底部を切り取り鉢に転用し たものと思われる。転用時に口縁 にあたる部位に粘土をつぎたしヨ コナデにより仕上げている。口縁 部内・外面に火を受けた後がみら れる。	残存率 99%
14	D	SB1001	短頸壺	口径(後) 器高 底径 8.1 11.4 8.9	密。微砂粒を少し含 む。	堅 織	外) 黒灰、乳黄褐 内) 有機物付着 断) 黄灰	口縁部及び体部約2/3は火を受け、 黒変している。	残存率 95%
15	D	SB1001	(壺 (口縁部)	口径 14.1	粗。6~7mm以下の 石英・長石・カリ 等の小石粒及び砂 粒を含む。	軟	外) 橙 (7.5 YR 7/6) 内) 浅黄褐 (7.5 YR 8/4) 断) 灰白 (10 YR 6/2)		残存率 80%
16	D	SB1001	高杯	口径 器高 底径 26.15 19.8 15.8	密。5mm以下の石英・ 長石を少量含む。	堅 織	外) にない橙 (7.5 YR 7/4) 内) にない橙 (6 YR 6/4)	脚部に4方向の円形スカシを穿 つ。 内・外面ともにスス付着。	残存率 95%
17	D	SB1001	高杯	口径 器高 底径 30.7 19.05 16.2	密。3mm以下の砂粒 を含む。	やや軟	外) 黄灰褐 内) 黄灰褐 (10 YR 2/2)	脚部に3方向の円形スカシを穿 つ。	
18	D	SB1001	長頸壺	口径 器高 体部最大径 底径 12.0 30.0 15.7 5.1	密。2mm以下の白色 砂粒を含む。	堅 織	外) 黒灰、茶灰 内) 淡茶 断) 赤茶	体部外面に火をうけている。	残存率 95%
19	D	SB1001	壺	口径 11.8	密。3mm以下の石英・ 長石を少量含む。	堅 織	外) 橙 (2.5 YR 6/6) 断) 橙 (2.5 YR 7/6)		残存率 80%
20	D	SB1001	台付壺	口径 器高 体部最大径 底径 8.1 18.2 14.9 9.7	密。1.5mm以下の石 英・長石を多く含む。	堅 織	外) にない黄橙 (10 YR 6/8)	脚部に5方向の円形スカシを有 する。その上方内面に4ヶ所穿 孔しようとした痕跡がみられるが、 外面は削えられ、ヘラミガキで仕 上げられている。	残存率 80%
21	D	SB1001	(壺 (口縁部)	口径 11.8	密。3mm以下の石英・ 長石を含む。	堅 織	外) 橙 (2.5 YR 6/6) 断) 浅黄橙 (10 YR 8/8)	内・外面部分的にスス付着。	残存率 40%
22	D	SB1001	把手付壺	口径 器高 体部最大径 底径 10.8 16.2 11.45 5.85	粗。5mm以下の石英・ 長石等の小石粒及び 砂粒を含む。	やや軟	外) 橙 (5 YR 6/6)	内・外面ともにスス付着。	残存率 80%
23	D	SB1001	器 台	口径 器高 底径 11.4 13.4 10.7	密。3mm以下の石英・ 長石を含む。	堅 織	外) 黑断	筒部中位に6方向の円形スカシを 穿つ。	残存率 95%
24	D	SB1001	器 台	口径 器高 底径 20.1 16.1 14.0	密。4mm以下の石英・ 長石を含む。	堅 織	外) にない橙 (10 YR 6/6) 内) 淡黄色 断) 淡黄色 (2.5 YR 8/8)	器部内面にスス付着。	残存率 75%
25	D	SB1001	小形無頸 壺	口径 器高 底径 6.7 7.2	密。3mm以下の白色 砂粒を含む。	堅 織	外) 黒灰、灰黃 内) 黑灰 断) 青墨	体部中央よりやや上位に径4mmの 丸いくぼみが見られる。正面の印 か?口縁直下に1対の円孔を穿つ。	残存率 97%
26	D	SB1001	器 台	口径 器高 底径 17.1 12.5 18.5	密。2mm以下の石英・ 長石・雲母を多く含 む。	堅 織	外) 黄灰 (2.5 YR 5/1)	筒部に4方向2段の円形スカシを 有する。 外面は全体にスス付着。	残存率 80%
27	D	SB1001	長頸壺	口径 器高 体部最大径 底径 11.6 27.7 16.7 4.9	密。3mm以下の石英・ 長石・カリ等を多 量に含む。	堅 織	外) 灰白 (2.5 YR 8/2) 内) 灰灰 (10 YR 4/4) 断) 橙 (5 YR 6/6)	口縁下方より体部にかけて黒斑が みられる。	残存率 80%
28	D	SB1001	高杯	口径 器高 残存高 12.6 11.2 8.2	密。白色砂粒を若干 含む。	堅 織	外) 黑灰、黄灰 内) 黄 断) 黄灰	脚部に2段(上3、下4方向)の 円形スカシを穿つ。杯部一部黒灰 色に変色している。(火をうけた ためと思われる。)	残存率 95%

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量(cm)	胎 土	焼 成	色 調	特 微	備 考
29	D	SB1001	高 杯	口径 器高 体部最大径 底径	16.0 11.4 16.2 9.0	密。1mm以下の石英・長石を少量含む。	堅 細	外、内) にぶい粗 断 (10 YR 7/8)	脚根部に2方向の円形スカシを有する。 杯部外面一部スス付着。
30	D	SB1001	高 杯	口径 器高 底径	15.0 13.55 8.8	密。3mm以下の石英・長石を含む。	堅 細	外、内) 粗 断 (5 YR 6/6)	脚根部に8方向の円形スカシを有する。
31	D	SB1001	高 杯	口径 器高 底径	15.7 11.5 9.9	密。4.5mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外、内) 赤根 断 (9 R 6/8)	残存率 90%
32	D	SB1001	甕	口径 器高 底径	14.4 9.9 7.8	粗。3mm以下の石英・長石を多量に含む。	やや軟	外) にぶい粗 (5 YR 6/4) 内) 粗 断 (2.5 YR 6/8)	底体部内外面にスス付着。
33	D	SB1001	器 台	口径 器高 底径	15.4 12.45 16.2	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外、内) 淡根 断 (5 YR 8/8)	全体的に火をうけたため赤変している。また、ススの付着もみられる。
34	D	SB1001	台付甕	底径	9.4 21.6	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外、内) 灰白 (10 YR 8/2)	脚部上方に7方向の円形スカシを有する。 外面スス付着。
35	D	SB1001	甕	口径	10.1	粗。4~7mm・4mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外、内) にぶい黄根 断 (10 YR 7/8)	口縁部に丹を塗っている。 口縁から底体にかけてスス付着。
36	D	SB1001	甕	口径 器高 体部最大径 底径	8.1 14.9 13.1 4.0	密。4mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 赤根 (10 YR 6/6) 内) にぶい黄根 (10 YR 7/8) 断) 浅黄根 (10 YR 8/8)	残存率 70%
37	D	SB1001	器 台	口径 器高 底径	16.0 12.9 13.9	密。3mm以下の石英・長石を多数含む。	堅 細	外、内) にぶい粗 断 (7.5 YR 7/6)	脚部に6方向の円形スカシを有す。
38	D	SB1001	甕	口径 器高 底径	16.6 20.1 5.0	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	軟	外) 淡根 (5 YR 8/8) 内) にぶい粗 断 (5 YR 6/4)	残存率 40%
39	D	SB1001	高 杯	口径 器高	26.5 18.85	密。2mm以下の石英・長石を含む。	堅 細	外) 淡赤根 (2.5 YR 7/3) 内) 浅黄根 (7.5 YR 8/3)	脚根部に5方向の円形スカシがみられる。 脚部及び脚根部内面にスス付着。
40	D	SB1001	高 杯	口径 器高 底径	22.7 15.8 10.7	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外、内) 赤根 断 (10 R 6/6)	脚部下半に2段5方向の円形スカシを有す。 内・外面ともにスス付着。
41	D	SB1001	台付甕	口径 器高 底径	14.95 18.6 9.6	密。4mm以下の石英・長石を含む。	堅 細	外、内) にぶい粗 断 (7.5 YR 5/8)	内・外面ともにスス付着。
42	D	SB1001	鉢	口径 器高	14.0 6.95	密。3mm以下の石英・長石を少量含む。	堅 細	外、内) 粗 断 (7.5 YR 7/6)	片口状になっている。
43	D	SB1001	高 杯	口径 器高 底径	14.2 12.1 9.6	密。3mm以下の石英・長石・クサリ隕を含む。	堅 細	外、内) にぶい黄根 断 (10 YR 7/4)	脚部中位に6方向の円形スカシを有す。
44	D	SB1001	甕	口径	14.6	密。3mm以下の石英・長石を含む。	堅 細	外、内) にぶい黄根 断 (10 YR 7/3)	残存率 10%
45	D	SB1001	鉢	口径 器高 底径	10.6 8.7 4.2	密。1.5mm以下の石英・長石を少量含む。	堅 細	外、内) 粗 断 (5 YR 6/6)	残存率 60%

SB 1002 (fig. 62)

1	D	SB1002	甕	口径 器高 底径	18.0 26.2 19.6 4.9	密。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外、内) 粗 断 (7.5 YR 6/6)	底体から底部にかけてスス付着。
2	D	SB1002	甕	口径 器高 底径	15.4 26.7 17.5 5.6	密。3mm以下の白色砂粒を含む。	堅 細	外) 黄白、黑灰、赤灰 内) 赤灰、白黄 断) 黄灰	体部左半分火をうけたため黒変・赤化している。一部黒斑がみられる。
3	D	SB1002	甕	口径 器高 底径	13.7 14.8 12.0 4.5	密。白色粒を含む。	やや軟	外) 黑灰、乳灰 内) 乳灰	内・外面ともに火をうけている。

土器番号	トレチ名	造様名	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	特徴	備考
4	D	SB1002	器台	口径 器高 底径 19.0 18.6 13.8	粗。金雲母を含む。	やや軟	外 内 断 赤茶	脚部中位から裾部に2段4方向の円形スカシがみられる。口縁部及び底部に火をうけている。	残存率 70% 口縁部及び底部反転復元
5	D	SB1002	高杯	口径 器高 底径 18.4 13.9 10.2	密。8mm以下の白色砂粒を含む。	やや軟	外 内 断 赤灰、黒灰 灰藍、黒灰 断 赤灰		残存率 95%
6	D	SB1002	高杯	口径 器高 底径 14.7 12.6 9.7	粗。6mm及び4mm以下の石英、長石を含む。	堅 級	外 内 断 浅黄 (2.5 Y 7/8) に bei 橙 (7.5 YR 7/4) 断 浅黄 (2.5 Y 7/8)	脚部中位に4方向の円形スカシを有する。 口縁部にスス付着。	残存率 75%
7	D	SB1002	鉢	口径 器高 底径 10.9 11.0	密。白色微砂粒を含む。	堅 級	外 内 断 黒灰、乳灰 断 乳灰	火をうけているため約1/4が黒変している。	残存率 97%
8	D	SB1002	高杯	口径 器高 底径 19.0 15.7 7.9	密。白色砂粒を含む。	やや軟	外 内 断 黒灰、赤茶 乳灰 断 灰褐	脚部中位から裾部に2段4方向の円形スカシを穿つ。 口縁部火をうけて黒変している。	残存率 95%

SB1003 (fig. 64)

1	D	SB1003	壺 (口縁部)	口径 23.6	密。8.5mm以下の白 黒・灰色砂粒を含む。	堅 級	外 内 断 に bei 橙 (7.5 YR 7/4) に bei 黄橙 (10 YR 7/8) 断 褐赤 (10 YR 4/1)	口縁部外面に5条の凹線文を施し た後、2段の円形浮文を貼付する。	残存率 10% 反転復元
2	D	SB1003	壺 (口縁部)	口径 15.7	粗。4mm以下の石英、 長石・金雲母を含む。	堅 級	粗 (7.5 YR 6/6)		口縁部反転復元
3	D	SB1003	壺 (口縁部)	口径 23.8	粗。3.5mm以下の石 英・長石・金雲母・ 角閃石を含む。	やや軟	外 内 断 灰黄 (2.5 Y 6/2) に bei 黄 (2.5 Y 6/3) 断 灰 (10 Y 6/1)	口縁端部に1条の刻み目、外面に 3条の凹線文をめぐらし、その上 に円形浮文を貼り付ける。頭部付 近にも1条の凹線がめぐる。 生駒西麓産の胎土。	残存率 20% 反転復元
4	D	SB1003	壺 (口縁部)	口径 17.4	密。2mm以下の白色 砂粒を含む。	堅 級	外 内 断 に bei 橙 (7.5 YR 6/3) に bei 橙 (7.5 YR 6/4) 断 灰 (7.5 Y 4/1)	一部黒変している。	残存率 5% 反転復元
5	D	SB1003	壺 (口縁部)	口径 14.0	密。4mm以下の石英、 長石を含む。	堅 級	浅黄橙 (10 YR 8/8)	口縁部外面に雑な波状文を1条(3 ~4本)めぐらし、その上に2ヶ 1組、6方向の円形浮文を施す。	
6	D	SB1003	壺 (口縁部)	口径 20.8	密。5mm程度及び1.5 mm以下の石英・長石 金雲母を含む。	堅 級	外 内 断 褐 (7.5 YR 4/8) 灰黄褐 (10 YR 4/2) 断 褐 (7.5 YR 4/8)	口縁端外面に1条の描き点列文 を施した後、2段の円形浮文を施 し、さらに下方に8条の描き罫 文をめぐらす。	残存率 80% 反転復元
7	D	SB1003	甕	口径 器高 底径 13.4 14.2 4.2	密。3mm以下の石英、 長石・クサリ礫を含 む。	堅 級	橙色 (7.5 YR 7/6)		
8	D	SB1003	高杯 (杯部)	口径 27.7	密。2.5mm以下の白 灰色砂粒を含む。	やや軟	外 内 断 褐 (2.5 YR 7/6) 灰白 (5 Y 8/2) 断 灰白・灰 サンドイッチ状		残存率 5% 反転復元
9	D	SB1003	甕	底径 4.4	粗。6mm程度、8mm 以下の石英・長石を含 む。	堅 級	浅黄橙 (10 YR 8/8)		一部反転復元
10	D	SB1003	壺 (底部)	底径 4.9	密。8mm以下の石英、 長石・クサリ礫を含 む。	堅 級	浅黄橙 (10 YR 8/4)		一部反転復元
11	D	SB1003	甕 (底部)	底径 5.2	密。2mm以下の金雲 母・石英・長石を含 む。	やや軟	黑褐 (7.5 YR 8/1)		

SB1004 (fig. 66・70・71)

1	D	SB1004	壺	口径 15.8	密。4.5mm以下の白 黒・茶色砂粒を少し 含む。	堅 級	外 内 断 (5 YR 7/4)	一部黒変している。	残存率 80%
2	D	SB1004	壺 (口縁部)	口径 12.7	粗。3.5~5mmの小 石及び3.5mm以下の 白・灰色砂粒を多量 に含む。	やや軟	外 内 断 灰黄褐 (10 YR 5/2) 灰白 (2.5 Y 8/2)		残存率 5% 反転復元
3	D	SB1004	ミニチュア 壺	口径 器高 体部最大径 5.7 7.6 6.9 底部 8.45	粗。2mm以下の砂粒 を含む。	やや軟	外 内 断 灰白 (2.5 Y 8/2) 灰黄 (2.5 Y 7/2)	体部外面に黒斑あり。	无形品

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量(cm)	胎 土	焼 成	色 調	特 徴	備 考
4	D	SB1004	壺	口径 12.4 器高 20.0 体部最大径 14.4 底径 8.5	密。2mm以下の白・ 灰・黒色砂粒を含む。	やや軟	外) 灰黄褐 (10 YR 6/2) 内) 灰黄褐 (10 YR 5/2) 断) 灰白 (5 Y 7/1)	部分的にスス付着。	残存率 80% 一部反転復元
5	D	SB1004	高杯 (脚部)	底径 15.0	粗。3.5mm以下白・ 灰色砂粒を含む。	やや軟	外) にぶい橙 (5 YR 7/4) 内) 灰 (5 Y 5/1) 断)	脚部に9ヶ1組3方向の円形スカシを穿つ。 カシを穿つ。 底部一部黒斑あり。	残存率 45% 一部反転復元
6	D	SB1004	ミニチュア壺	口径 7.4 器高 5.9 体部最大径 7.2 底径 3.75	粗。2mm以下の砂粒 を含む。	やや軟	外) 灰 (10 YR 6/1) 内) 灰白 (2.5 Y 8/2)	口縁部から体部外面一部黒斑あり。 下半部スス付着。	完形品
7	D	SB1004	幼鎌車	直径 3.05 器高 2.8 孔径 0.5	密。	堅 硬	外) 灰白 (10 YR 7/1) 内)	外面下半に黒斑。	完形品
8	D	SB1004	壺 (底部)	底径 6.1	粗。2.5mm以下の白・ 灰色砂粒を含む。	堅 硬	外) 灰黄褐 (10 YR 6/2) 内) 暗灰 (N 8/0) 断)	外面黒斑あり。	反転復元
9	D	SB1004	壺 (底部)	底径 7.5	密。1mm以下の白・ 灰色砂粒を含む。	やや軟	外) にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 内) にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 断) 暗 (7.5 YR 2/1)	外面黒変している。	残存率 45% 反転復元
10	D	SB1004	壺 (底部)	底径 6.6	粗。2mm以下の白色 砂粒を含む。	やや軟	外) 浅黄褐 (7.5 YR 8/3) 内) 暗 (5 YR 7/6) 断) 灰白 (7.5 YR 8/2)	外面に黒斑あり。	残存率 85% 反転復元
11	D	SB1004	高杯 (脚部)	底径 11.8	密。2mm以下の白色 砂粒を含む。	やや軟	外) 橙 (7.5 YR 7/6) 内) 淡橙 (5 YR 8/4) 断) 灰色 (N 7/0)	一部黒変している。	残存率 45%
12	D	SB1004	器台	底径 11.8	密。3.5mm以下の白・ 灰・茶色砂粒を含む。	外 内 断)	にぶい橙 (7.5 YR 7/4)	脚部に4方向の円形スカシを穿つ。	残存率 20%
13	D	SB1004	鉢	口径 10.9 器高 8.8 底径 4.45	密。3.5mm以下の白 色砂粒を含む。	堅 硬	外) にぶい黄 内) にぶい黄 (10 YR 7/2) 断)		残存率 80%
14	D	SB1004	鉢 (把手)		粗。3.5mm以下の白 色砂粒を含む。	堅 硬	外) にぶい橙 (7.5 YR 7/3) 内) にぶい橙 (5 Y 7/3) 断) 灰白 (5 Y 8/1)	大型の鉢の口辺部に付される把手 と思われる。	
15	D	SB1004	壺	口径 21.2	密。	堅 硬	外) 淡黄 (2.5 Y 7/3) 内) にぶい黄 (10 YR 6/3) 断)	外面に黒斑がみられる。	残存率 5% 反転復元
16	D	SB1004	壺	体部最大径 11.5	密。1.5mm以下の灰 色砂粒を少量含む。	堅 硬	外) 灰オリーブ (5 Y 6/2) 内) 灰 (5 Y 4/1) 断) 灰白 (7.5 Y 7/2)	外面頸部から体部上半にかけて黒 斑がみられる。	残存率 30% 反転復元
17	D	SB1004	(底部)	底径 3.6	密。白色微砂粒を含 む。	堅 硬	外) 橙 (5 YR 6/6) 内) 明赤褐 (5 YR 5/6) 断)	底部に径0.8cmの孔を穿つ。底あ るいは鉢の底部と思われる。	残存率 15% 反転復元
18	D	SB1004	壺 (口縁部)	口径 27.2	粗。2.5mm以下の長 石・角閃石・雲母を 含む。	やや軟	外) にぶい褐 (7.5 YR 5/3) 内) にぶい黄褐 (10 YR 5/3) 断) 灰黄褐 (10 YR 5/2)	口縁部外面に描き模状文をめぐ らせたのち刻文を施す。 内面には円形浮文をはりつける。 生駒西鏡面の胎土。	残存率 5% 反転復元
19	D	SB1004	壺 (口縁部)	口径 22.0	密。2.5mm以下の白・ 灰色砂粒を含む。	堅 硬	外) にぶい黄 (10 YR 6/8) 内) にぶい黄 (10 YR 7/2) 断)	口縁部外面に竹管文をめぐらす。	残存率 8% 反転復元
20	D	SB1004	壺	体部最大径 21.4 底径 4.5	粗。3.5~5mmの小 石・3.5mm以下の白 灰・黒色砂粒を含む。	堅 硬	外) ① にぶい黄 (2.5 Y 6/3) ② 灰オリーブ (5 Y 5/2) 内) 灰 (7.5 Y 6/1) 断) にぶい橙 (7.5 YR 6/3)	体部最大径周辺帶状にスス付着。	残存率 60% 一部反転復元
21	D	SB1004	壺	口径 20.0	粗。5.5mm程度の小 石砂粒及び3.5mm以 下の砂粒(白・灰色) を含む。	堅 硬	外) にぶい橙 (7.5 YR 7/3) 内) 灰白 (5 Y 7/1) 断)	外面一部スス付着。	残存率 15% 反転復元

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	特徴	備考
22	D	SB1004	古付甕	底径 8.4	粗。3.5~5mmの白色小石及び3.5mm以下の白・灰色砂粒を含む。	堅 硬	外) にぶい橙 (5.5 YR 6/4) 内) 暗灰(10 YR 4/1) 断) 灰黄(2.5 Y 7/2)	底部内面黒変している。	残存率 5% 一部反転復元
23	D	SB1004	甕	口径 17.35	粗。4mm以下の白色砂粒を含む。	やや軟	外) にぶい黄橙 (10 YR 6/3) 内) 灰黄褐 (10 YR 6/2) 断) にぶい黄橙 (10 YR 7/2)	内外面に黒斑あり。	残存率 8% 反転復元
24	D	SB1004	甕	口径 18.4 底部最大径 12.6	密。3mm以下の白・灰色砂粒を含む。	堅 硬	外) にぶい橙 (5 YR 7/3) 内) にぶい橙 (7.5 YR 7/3) 断) 灰(7.5 YR 5/1)	外面一部スス付着。	残存率 25% 反転復元
25	D	SB1004	甕(底部)	底径 5.0	粗。4.5mmの黑色小石及び2mm以下の白色砂粒を含む。	やや軟	外) 灰褐 (5 YR 5/2) 内) 黒(5 G 1.7/1) 断) 灰色 (7.5 YR 8/2)	内面黒変している。	残存率 6% 反転復元
26	D	SB1004	古付甕		粗。6mm以下の灰・白・茶色砂粒を含む。	堅 硬	外) にぶい橙 (5 YR 6/4) 内) 暗灰(10 YR 4/1) 断) にぶい黄褐 (10 YR 4/3)		残存率 30%
27	D	SB1004	古付甕	底径 8.4	粗。3mm以下の白色砂粒を多数含む。	やや軟	外) 暗赤灰 (10 YR 8/1) 内) 灰黄褐 (10 YR 6/2) 断) 赤棕(10 R 6/8)	底部外面黒変している。	残存率 15% 反転復元
28	D	SB1004	甕(口部)	口径 17.6	粗。3mm以下の灰・白色砂粒を含む。	堅 硬	外) にぶい橙 (7.5 YR 6/2) 内) 灰黄 (2.5 Y 7/2)	外面スス付着。	残存率 3% 反転復元
29	D	SB1004	甕(口部)	口径 16.8	密。2mm以下の白色砂粒を含む。	堅 硬	外) 橙 (5 YR 7/6) 断) 灰白(10 YR 8/2)	外面に黒斑あり。	残存率 8% 反転復元
30	D	SB1004	甕(口部)	口径 16.0	密。3mm以下の石英・黑雲母を含む。	堅 硬	外) 内) 灰褐 (7.5 YR 4/2)	生駒西麓産の胎土。	残存率 8% 反転復元
31	D	SB1004	壺	口径 15.6	密。4mm以下の白色砂粒を含む。	堅 硬	外) にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 内) にぶい橙 (7.5 YR 7/8) 断) 灰白(7.5 Y 8/1)	肩部にヘラによる線刻がみられる。	残存率 8% 反転復元
32	D	SB1004	甕(底部)	底径 8.9	粗。4mm以下の白色砂粒を含む。	やや軟	外) 浅黄橙 (7.5 YR 8/8) 内) 浅黄橙 (7.5 YR 8/4) 断) 灰白(7.5 YR 8/2)		残存率 7% 反転復元
33	D	SB1004	甕(底部)	底径 5.8	密。2mm以下の白・黑色砂粒を含む。	やや軟	外) 浅黄橙 (10 YR 8/8) 内) にぶい黄橙 (10 YR 7/8) 断) 暗灰(10 YR 4/1)		残存率 8% 反転復元
34	D	SB1004	壺(口部)	口径 11.6	密。	やや軟	外) 内) にぶい橙 (5 YR 7/4)		残存率 10% 反転復元
35	D	SB1004	壺(底部)	底径 4.3	密。1mm以下の白・灰色砂粒を含む。	やや軟	外) 浅橙(5 YR 8/4) 内) 浅黄橙 (7.5 YR 8/6) 断) 灰白(10 YR 8/2)		残存率 10% 反転復元
36	D	SB1004	壺	底径 4.2	密。1.5mm以下の白色砂粒を含む。	堅 硬	外) 浅黄 (2.5 Y 7/3) 内) 灰白 (5 Y 8/2)		残存率 80% 反転復元
37	D	SB1004	壺	底径 5.2	密。4mm以下の白・灰色砂粒を含む。	やや軟	外) にぶい橙 (7.5 YR 7/8) 内) にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 断) 灰白色 (7.5 YR 8/2)		一部反転復元
38	D	SB1004	古付鉢	口径 13.7 器高 10.85 底径 7.7	粗。3.5~6.5mmの小石及び3.5mm以下の砂粒(灰・白・茶色)を含む。	やや軟	外) にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 内) 淡黄 (2.5 Y 8/8)		残存率 85% 一部反転復元
39	D	SB1004	高杯(杯部)	口径 30.6	密。1.5mm以下の白・茶色砂粒を含む。	堅 硬	外) にぶい黄橙 (10 YR 7/4) 内) 淡黄 (2.5 Y 8/3)		残存率 5% 反転復元

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	特徴	備考
40	D	SB1004	(口縁部)	口径 9.9 底径 8.1 高さ 4.2	密。2.5mm以下の白・灰・茶色砂粒を含む。	堅 細	外)褐灰 (10 YR 6/1) 内)灰黄(2.5 Y 7/2) 断)にぶい褐 (7.5 YR 6/3)	外面に黒斑あり。	残存率 10% 反転復元
41	D	SB1004	器台		密。	堅 細	外)灰白(5 Y 7/2) 内)灰黄(2.5 Y 7/2)	器部に6方向の円形スカシがみられる。(下半欠落) 外面一部黒斑あり。	一部反転復元
42	D	SB1004	高杯		密。8mm以下の白色砂粒を含む。	堅 細	外)にぶい黄橙 (10 YR 7/8) 内)橙(5 YR 6/6) 断)	脚柱部に円形スカシがみられる。(1めのみ既存、下半欠落)	杯部反転復元
43	D	SB1004	高杯 (脚部)		密。1mm以下の白・灰色砂粒を含む。	堅 細	外)にぶい橙 (7.5 YR 6/4) 内)にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 断)にぶい黄橙 (10 YR 7/2)	脚柱部に2段(上-3、下-5と思われる)の円形スカシを有する。 外面一部崩壊している。	残存率 20%
44	D	SB1004	器台		密。2mm以下の黒・白色砂粒を含む。	堅 細	外)灰黄 (2.5 Y 7/2) 内)にぶい黄橙 (10 YR 7/2) 断)灰黄(2.5 Y 6/2)	器部に8段(5・4・4本)の沈線文をめぐらし、それぞれの下位に竹管文1条、竹管文と波状文(2~3本)各1条づつ、刺突文1条を施す。	反転復元

SD 1016 (fig. 72)

1	D	SD1016	壺	口径 19.2 器高(推定) 42.8 体部最大径 30.0 底径 6.4	粗。長石・石英・角閃石・金雲母を含む。	堅 細	外)茶褐色 内)灰		残存率 60%
2	D	SD1016	(口縁部)	口径 19.6	粗。4mm以下の石英・長石・黒・茶色粒を含む。	堅 細	浅黄橙 (10 YR 8/4)		
3	D	SD1016	壺		密。3mm以下の石英・長石・クサリ隕石を含む。	堅 細	灰黄 (2.5 Y 7/2)	肩部にヘラによる捺刻がみられる。	

SD 1018 (fig. 74・76・79・81)

1	D	SD1018	壺	口径 18.8	密。4mm以下の石英・長石を含む。	堅 細	外)浅黄 (2.5 Y 8/3)		残存率 40%
2	D	SD1018	(口縁部)	口径 15.8	密。4mm以下の石英・長石を含む。	堅 細	外)にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 内)灰白 (2.5 Y 8/6)	外面上に黒斑がみられる。	残存率 5%
3	D	SD1018	壺	口径 12.1	粗。2.5mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外)灰白 (2.5 Y 8/2)		
4	D	SD1018	壺	口径 13.0	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外)橙(5 YR 7/6) 内)灰白(10 YR 8/8) 断)浅黄橙 (7.5 YR 8/3)		
5	D	SD1018	短頸壺	口径 11.2	粗。2mm以下の石英・長石を含む。	堅 細	外)橙(5 YR 7/6) 内)灰白 (2.5 YR 8/2) 断)灰(5 YR 5/1)	頸部に2ヶ所、円孔がみられる。	残存率 5%
6	D	SD1018	壺	底径 5.8	粗。2mm以下の石英・長石を含む。	堅 細	外)灰白(2.5 Y 8/2) 内)灰(7.5 Y 4/1) 断)灰(7.5 Y 5/1)		残存率 5%
7	D	SD1018	壺	口径 14.0 体部最大径 7.8	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外)にぶい橙 (5 YR 7/3) 内)にぶい黄橙 (10 YR 7/2)	口縁部及び体部外面にスス付着。	残存率 35%
8	D	SD1018	壺	口径 18.9	粗。4~7mm及び4mm以下の石英・長石を含む。	堅 細	外)にぶい橙 (5 YR 7/4)	頸部に格子状のタクキがみられる。	残存率 25%
9	D	SD1018	壺	口径 16.2	粗。4.5mm以下の石英・長石粒を多数含む。	堅 細	外)灰白 (10 YR 8/2)		残存率 10%
10	D	SD1018	(底部)	底径 3.85	粗。4~7mm及び3mm以下の石英・長石を多數含む。	やや軟	外)にぶい橙 (7.5 Y 6/4) 内)橙 (7.5 Y 6/4)	内・外面スス付着。	
11	D	SD1018	鉢	口径 10.4 器高 8.1 底径 4.2	密。4mm以下の石英・長石を多數含む。	堅 細	外)橙 (2.5 YR 6/6)		残存率 70%

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量(㎤)	胎土	焼成	色調	特徴	備考
12	D	SD1018	甕(底部)	底径 4.0	粗。2㎟以下の石英・長石・カサリ砾を含む。	軟	外) 淡黄(5Y8/8) 内) 灰白(2.5Y8/2) 断) 灰白(2.5Y8/2)		残存率 2%
13	D	SD1018	甕(底部)	底径 6.4	粗。3.5㎟以下の石英・長石・黑雲母を含む。	堅 硬	外) 灰黄 内) 灰黄(2.5Y6/2) 断) 灰黄(2.5Y6/2)		残存率 5%
14	D	SD1018	甕(底部)	底径 9.1	粗。1㎟以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 灰白(2.5Y8/2) 内) 黄灰(2.5Y4/1) 断) 黄灰(2.5Y5/1)	外面に黒斑がみられる。	残存率 2%
15	D	SD1018	器台		粗。2.5㎟以下の石英・長石を多数含む。	やや軟	外) 淡赤橙(2.5YR7/3) 内) にぶい橙(5YR7/4) 断) 黄灰(2.5Y5/1)	筒部下方に1条・2条の沈線がみられ、その間に各1条づつ刻み目を施す。筒部中央に円形スカシが残存している。	残存率 10%
16	D	SD1018	甕	口径 20.2	密。4㎟以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 橙(5YR7/6) 内) 橙(5YR7/6) 断) 橙(5YR7/6)		残存率 20%
17	D	SD1018	甕(口頭部)	口径 18.6		堅 硬	外) 灰白(2.5Y8/2) 内) ブラウン(10YR8/2) 断) 黄灰(2.5Y6/1)		
18	D	SD1018	甕(口頭部)	口径 18.6	粗。3㎟以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 灰白(2.5Y8/2) 内) ブラウン(10YR8/2) 断) 黄灰(2.5Y6/1)		残存率 5%
19	D	SD1018	甕	口径 14.6	密。1.5㎟以下の石英・長石粒を含む。	堅 硬	外) 淡黄橙(7.5YR8/3) 内) 灰白(2.5Y8/1) 断) 黄灰(2.5Y6/1)	口頭部に1ヶの円形浮文がみられる。	残存率 5%
20	D	SD1018	甕(口縁部)	口径 22.2	密。1㎟以下の石英・長石・金雲母を含む。	堅 硬	外) 暗灰黄(2.5Y5/2) 内) オリーブ墨(5Y8/1) 断) 暗灰黄(2.5Y5/2)	口縁部に柳枝及び点状の刺突文がみられる。	残存率 5%
21	D	SD1018	甕(底部)	底径 6.4	粗。3㎟以下の石英・長石を含む。	軟	外) 暗灰(7.5YR4/3) 内) 暗(7.5YR4/3) 断) 暗(7.5YR4/3)	底部に黒斑がみられる。	残存率 8%
22	D	SD1018	甕(口頭部)	口径 22.6	密。2.5㎟以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 黄灰(2.5Y5/1) 内) 黄灰(2.5Y5/1)	口縁部外面に4条のヘラ描き沈線文をめぐらす。	残存率 5%
23	D	SD1018	甕	口径 16.2	粗。2㎟以下の石英・長石を多く含む。	やや軟	外) 浅黄橙(10YR8/4) 内) 暗(5YR6/6) 断) 暗(5YR6/6)		残存率 30%
24	D	SD1018	有孔甕(底部)	底径 2.6	密。5.5㎟及び1㎟以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) 暗灰黄(10YR6/2) 内) 暗灰黄(10YR6/2)	底部外面にスス付着。	残存率 10%
25	D	SD1018	甕(底部)	底径 5.0	粗。3㎟以下の石英・長石を含む。	軟	外) 暗(2.5YR7/6) 内) にぶい暗(5YR7/4) 断) 暗(2.5YR7/6)		残存率 10%
26	D	SD1018	甕(底部)	底径 8.6	密。3㎟以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 暗(5YR7/4) 内) 暗(5YR7/4) 断) 暗(5YR7/4)	底部外面にスス付着。	
27	D	SD1018	高杯(脚部)		密。3㎟以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) にぶい黄(10YR7/8) 内) にぶい黄(10YR7/8) 断) にぶい黄(10YR7/8)	脚柱部外面に3段(9・10・18本)の沈線文を施す。	
28	D	SD1018	器台	底径 13.2	粗。6㎟及び4.5㎟以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) にぶい暗(7.5YR7/4) 内) 暗(7.5YR6/8) 断) 暗(7.5YR6/8)	裾部に2段4方向の円形スカシを穿つ。	残存率 50%
29	D	SD1018	甕(口縁部)	口径 20.0	粗。3㎟以下の石英・長石を多数含む。	軟	外) にぶい暗(5YR7/4) 内) にぶい暗(5YR7/4) 断) にぶい暗(5YR7/4)	口縁部外面に円形浮文がみられる。	残存率 5%
30	D	SD1018	甕(口縁部)	口径 12.2	粗。4.5㎟以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 暗(2.5YR6/6) 内) ブラウン(2.5YR6/8) 断) にぶい暗(7.5Y7/4) 断) 浅黄(10YR8/8)	口縁部外面に2ヶ1組の円形浮文を施す。 口縁部内面に黒斑がみられる。	残存率 5%
31	D	SD1018	甕	口径 18.2	粗。6㎟及び8㎟以下の石英・長石を含む。	堅 硬	外) にぶい暗(5YR7/4) 内) にぶい黄(10YR7/8) 断) 淡黄(2.5Y8/3)		残存率 30%
32	D	SD1018	甕	底径 4.2	密。4㎟以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) にぶい暗(5YR7/4) 内) 灰白(10Y8/2) 断) 灰白(10Y8/2)	体部上半に黒斑及び内面にススの付着がみられる。	残存率 60%
33	D	SD1018	甕(口頭部)	口径 14.2	粗。3㎟以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) にぶい黄(10YR7/8) 内) 暗(2.5YR7/6) 断) にぶい黄(10YR7/8)	口縁部外面に1条(8本)の波状文をめぐらす。	

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	特徴	備考
34	D	SD1018	壺(口縁部)	口径 15.8	密。3mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) 灰白 (10 YR 8/2) 内) にぶい黄橙 (10 YR 7/2)		
35	D	SD1018	壺(口縁部)	口径 15.2	密。4mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) にぶい橙 (7.5 YR 7/8) 内) 灰白 (7.5 YR 8/2)	内面スス付着。	
36	D	SD1018	高杯(杯部)	口径 28.9	密。8mmの石英・長石を含む。	堅 級	外) にぶい黄橙 (10 YR 7/2) 内) にぶい黄橙 (10 YR 7/2)	内・外面スス付着。	
37	D	SD1018	高杯		粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 棕(7.5 YR 7/6) 内) 棕(7.5 YR 7/6)	脚縁部に4方向の円形スカシを穿つ。	
38	D	SD1018	壺(口縁部)	口径 84.2	密。3mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) 褐灰 (10 YR 6/1) 内) 淡黄橙 (7.5 YR 8/4)	外面にスス付着。	
39	D	SD1018	壺	口径 16.2 器高 20.1 体部最大径 16.95 底径 5.0	密。3mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) にぶい橙 (5 YR 6/8) 内) にぶい褐 (7.5 YR 6/8)		残存率 90%
40	D	SD1018	壺	体部最大径 16.85 底径 5.1	粗。4~6mm、3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 棕(7.5 YR 6/6) 内) 棕(7.5 YR 6/6)		残存率 40%
41	D	SD1018	高杯(脚部)		密。4mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) 淡黄橙 (7.5 YR 8/4) 内) にぶい橙 (5 YR 7/4) 断) 褐(5 Y 5/1)	脚基部に2条の刻み目とそれぞれの直下に8条・2条の沈捺文をめぐらす。	残存率 20%
42	D	SD1018	壺(口縁部)	口径 20.4	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 浅黄橙 (10 YR 8/8) 内) 灰白 (2.5 Y 8/2)		
43	D	SD1018	壺	口径 14.2	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) にぶい黄橙 (10 YR 7/2)	体部にへら書き記号文の一部が残存している。 口縁部内面にスス付着。	
44	D	SD1018	壺	口径 16.2	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) にぶい橙 (7.5 YR 7/8) 内) 棕(7.5 YR 6/6)		
45	D	SD1018	器台?	底径 28.8	粗。4~6mm、3mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) にぶい黄橙 (10 YR 7/8)		
46	D	SD1018	有孔鉢	口径 17.2 器高 9.4 底径 3.5	密。8mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) にぶい赤橙 (10 R 6/4)	底部に穿孔がみられる。	残存率 70%
47	D	SD1018	壺(底部)	底径 5.0	密。2mm以下の砂粒を含む。	堅 級	外) にぶい黄橙 (10 YR 7/8) 内) 褐灰 (10 YR 4/1) 断) 黄灰(2.5 Y 6/1)	底部に円孔がみられる。 内・外ともにススが付着。	
48	D	SD1018	壺(底部)	底径 6.2	密。2~5mm、1mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) にぶい橙 (5 YR 7/8) 内) にぶい橙 (10 YR 7/2) 断) 褐灰(5 YR 5/1)		
49	D	SD1018	台付壺(台部)	底径 9.4	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 棕(2.5 YR 7/6) 内) 灰白 (2.5 Y 8/2)	裙部内面スス付着。	
50	D	SD1018	高杯	底径 12.8	粗。6.5mm、4.5mm以下の石英・長石・黑雲母を多く含む。	堅 級	外) にぶい橙 (7.5 YR 7/4) 内) にぶい黄橙 (10 YR 5/8) 断) にぶい橙 (5 YR 7/4)		残存率 50%
51	D	SD1018	高杯	底径 13.9	密。4mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) 棕(2.5 YR 7/6) 内) 黄灰(2.5 Y 5/1)	脚部中位に8方向の円形スカシを穿つ。	残存率 50%
52	D	SD1018	高杯	底径 10.6	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 灰白 (2.5 Y 8/2) 内) 棕(7.5 YR 6/6)	杯内面及び脚基部外間にスス付着。	
53	D	SD1018	高杯		密。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 灰白 (10 YR 8/2) 内) にぶい黄橙 (10 YR 7/2)		
54	D	SD1018	壺(底部)	底径 6.2	密。3~6mm、3mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	堅 級	外) にぶい褐 (7.5 YR 6/8)	底部外面にスス付着。	

土器番号	トレチ名	造形名	器種	法量(㎤)	胎 土	焼 成	色 調	特 微	備 考
5 5	D	SD1018	壺(口頸部)	口径 19.0	粗。4~5mm、3mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) 淡黄橙 (10 YR 8/3) 内) 淡黄橙 (10 YR 8/3)	口頸部外面中位に1ヶの円形浮文がみられる。	残存率 20%
5 6	D	SD1018	壺(口頸部)	口径 18.2	粗。2mm以下の石英・長石を多數含む。	堅 級	外) にぶい橙 (5 YR 7/4) 内) 黄灰 (2.5 Y 5/1) 断) 黄灰 (2.5 Y 5/1)	口縁部外面に1条の凹線文をめぐらす。	残存率 5%
5 7	D	SD1018	甕(底部)	底径 4.5	密。8mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) 橙(2.5 YR 6/8) 内) 橙(5 YR 6/6) 断) にぶい橙 (5 YR 7/4)	外面スス付着。	
5 8	D	SD1018	甕(底部)	底径 4.8	密。8mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	外) 赤橙(10 R 6/6) 内) 淡橙(5 YR 8/3) 断) 灰白(5 YR 8/2)	外面スス付着。	

SK 1001~SK 1003 (fig. 85)

1	D	SK1008	鉢	口径 27.8 器高 11.0 底径 6.0	密。0.5mm以下の角閃石・長石を含む。	堅 級	灰黄褐 (10 YR 5/2)	生駒西館窯の胎土。	反転復元
2	D	SK1002	甕	口径 18.4 器高 30.4 体部最大径 21.8 底径 5.4	密。3mm以下の砂粒を含む。	やや軟	外) 灰白色 (5 Y 8/2) 口縁部付近は橙色 (2.5 YR 7/8) 内) 淡黄色 (2.5 Y 7/8) 断) 灰白色 (2.5 Y 8/2)		残存率 75%
3	D	SK1002	甕	口径 18.4 器高(推定) 26.1 体部最大径 19.7 底径 6.1	密。3mm以下の砂粒を含む。	軟	外) 橙 (2.5 YR 6/8) 内) 橙色 (5 YR 7/6) 断) 淡黄橙 (10 YR 8/3)		
4	D	SK1001	高杯(脚部)		粗。4mm以下の角閃石・長石・石英を含む。	堅 級	にぶい黄褐 (10 YR 5/3)	生駒西館窯の胎土。	一部反転復元
5	D	SK1001	甕	口径 13.8 器高(推定) 24.0 底径 5.0	密。2mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	堅 級	浅黄 (2.5 Y 7/8)	口縁部外面に1条の凹線文、肩部下方に1条の刺突文を施す。 外面スス付着。	
6	D	SK1001	把手付鉢	口径 20.8 器高 不明	密。4mm以下の角閃石・長石を含む。	堅 級	暗褐 (10 YR 8/3)	口縁部から残存中位にかけて、6条のへう描き鉛線文を2条づつ継続的に配し、その下方に3条(9~15~18本)の櫻描き輪状文を施す。 把手は耳状を呈し、にりつけのちカデ化により仕上げる。 生駒西館窯の胎土。	反転復元

SX 1007 (fig. 86)

1	D	SX1007	甕	口径 15.1 器高 22.0 体部最大径 15.7 底径 5.8	粗。3mm以下の石英・長石粒を多數含む。	やや軟	外) にぶい黄橙 (10 YR 6/8) 内) 灰黄褐 (10 YR 6/2) 断) にぶい黄橙 (10 YR 7/2)		残存率 40%
2	D	SX1007	甕	口径 15.2	粗。3mm以下の石英・長石粒を含む。	軟	外) にぶい橙 (5 YR 7/4) 内) にぶい橙 (5 YR 7/4)		残存率 60%
3	D	SX1007	甕	口径 17.0	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) にぶい橙 (7.5 YR 6/8) 内) にぶい橙 (7.5 YR 6/8)		
4	D	SX1007	甕	口径 12.1 器高 15.0 体部最大径 12.3 底径 5.0	粗。5mm程度、3mm以下の石英・長石を含む。	軟	外) 淡黄 (2.5 Y 8/8) 内) 淡黄 (2.5 Y 8/8)	底体部内面に黒斑がみられる。	残存率 60%
5	D	SX1007	器台	口径 18.7 器高 15.8 底径 14.7	粗。3mm以下の白色砂粒を含む。	やや軟	外) 茶褐 内) 茶褐 断) 茶褐		残存率 80% 反転復元
6	D	SX1007	器台	口径 22.0	粗。3mm以下の白色砂粒を含む。	軟	外) 赤褐 内) 乳赤 断) 乳赤	全体的に火をうけている。	残存率 65% 反転復元

SX 1008 (fig. 87)

1	D	SX1008	壺(口頸部)	口径 18.6	粗。7mm程度、3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外) 淡黄橙 (10 YR 8/3)		残存率 25%
---	---	--------	--------	---------	-------------------------	-----	-----------------------	--	---------

土器番号	トレント名	遺構名	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	特徴	備考
2	D	SX 1008	短頸壺	口径 14.0 体部最大径 24.9	密。3.5mm以下の石英・長石を多量に含む。	堅 機	外 (内) 灰黄褐 断 (10 YR 5/2)		残存率 40%
8	D	SX 1008	鉢	口径 32.0	粗。4mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外 (内) にぶい黄 断 (7.5 YR 7/4)	底部に墨斑がみられる。	残存率 85%
4	D	SX 1008	甕	口径 17.2	密。7mmの小石・3.5mm以下の石英・長石・角閃石を含む。	堅 機	外 (内) 黄褐 断 (2.5 Y 5/8)		残存率 15%
5	D	SX 1008	蓋	口径 13.4 器高 4.2	粗。3mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外 (内) にぶい黄 断 (7.5 YR 6/4) 内 明褐 断 (7.5 YR 5/6)	内外面共にスス付着。	残存率 55%
6	D	SX 1008	高杯	底径 14.6	粗。4mm以下の石英・長石を含む。	やや軟	外 (内) (5 YR 6/6)	脚部に4方向の円形スカシを穿つ。	残存率 40%
7	D	SX 1008	高杯(脚部)	底径 15.8	粗。4mm以下の石英・長石を多量に含む。	やや軟	外 (内) 赤 (10 R 5/6) 断 淡赤褐 (2.5 YR 7/4)	脚部に5方向の円形スカシを穿つ。	残存率 40%

SX 1011 (fig. 90)

1	D	SX 1011	甕	口径 14.4 器高 19.4 体部最大径 15.8 底径 4.6	密。2mm以下の砂粒を少量含む。		外 口縁部・底部 粗 (2.5 YR 7/8) 根へ弱部 浅黄褐 (10 YR 8/8) 内 灰白 (2.5 Y 8/1)	体部外面スス付着。	残存率 90%
2	D	SX 1011	甕	体部最大径 14.2 底径 5.4	粗。8mm以下の砂粒を多く含む。	やや軟	外(肩上半部)・内・断 浅黄 (2.5 Y 8/8) 外(底部外面付近) 赤褐 (10 R 6/8)	底体部スス付着。	残存率 70%
3	D	SX 1011	甕	口径 17.0 器高 25.9 体部最大径 20.8 底径 5.2	粗。4mm以下の砂粒を含む。	やや軟	外 (内) 灰オリーブ 断 (7.5 Y 5/2)	体部外面スス付着。	残存率 50%
4	D	SX 1011	甕(口頸部)	口径 18.7	粗。4mm以下の砂粒を含む。	やや軟	外 (内) 灰白 (2.5 Y 8/2) 断	口縁部外面にヘラ状工具による櫛文を施し、内形浮文を貼付する。 頸部外面に2条の凹線文を施す。	残存率 15% 反転復元
5	D	SX 1011	長頸甕	口径 16.2 器高 22.9 体部最大径 19.0 底径 4.2	密。	軟	外 ① 黄褐 (7.5 YR 8/8) ② 深褐 (2.5 YR 8/8) 内 ③ 灰白 (2.5 Y 8/1) ④ 灰 (7.5 Y 4/1) 断 灰 (10 YR 8/1)		残存率 75%

SK 1104 (fig. 101-102)

1	D	SK 1104	甕	口径 12.6 器高 21.05 底径 5.5	密。8mm以下の石英・長石・黒色粒・赤色粒を含む。	堅 機	明黄褐 (10 YR 7/6) 黑褐 (10 YR 8/1)	器壁が薄い。 内・外ともにスス付着。	
2	D	SK 1104	甕	口径 10.9	密。2mm以下の石英・長石・黒雲母を含む。	堅 機	赤褐 (10 R 6/6)		反転復元
3	D	SK 1104	甕	口径 13.5	密。4mm以下の石英・長石・クリソリド・金雲母・黒色粒を含む。	堅 機		外面スス付着。	反転復元
4	D	SK 1104	甕	口径 12.8	密。0.5mm以下の長石・石英を含む。	堅 機	粗 (7.5 YR 6/6)	外面スス付着。	反転復元
5	D	SK 1104	甕	口径 16.6	密。2mm以下の石英・長石・金雲母・黒色粒を含む。	堅 機	粗 (7.5 YR 6/6)	口縁部外面に2条の凹線文をめぐらす。	反転復元
6	D	SK 1104	壺		粗。4mm以下の角閃石・長石・石英を含む。	堅 機	黑褐 (10 YR 2/2)	生駒西甕の胎土。	
7	D	SK 1104	壺		粗。4mm以下の石英・長石・金雲母・黒色粒を含む。	堅 機	にぶい黄褐 (10 YR 7/4)	口縁部内面に1条(9本)の樹脂状文を施す。 外面スス付着。	
8	D	SK 1104	高杯(脚部)	口径 13.9	密。3.5mm以下の石英・長石を含む。	堅 機	黑 (2.5 YR 2/1)	内外面ともに黒色物質を塗布している。	

土器番号	トレンチ名	遺構名	器種	法量(cm)	胎土	焼成	色調	特徴	備考
9	D	SK1104	高杯	口径 12.8	密。2mm以下の石英・長石・黒灰色粒を含む。	堅 級	燈 (7.5 YR 7/6)		
10	D	SK1104	高杯(杯部)	口径 13.4	粗。4mm以下の石英・長石・暗赤色粒・黑色粒を含む。	堅 級	黒褐 (7.5 YR 3/1)	口縁部外面に1条の浅い凹線文を施す。内外面ともに褐色物質を塗布している。	反転復元
11	D	SK1104	高杯(脚部)	底径 12.6	粗。3mm以下の角閃石・石英・長石を含む。	堅 級	に bei 橙 (5 YR 6/8)	脚部に4方向の円形スカシを有する。外面に一部スス付着。生駒西脇塗の胎土。	
12	D	SK1104	器台	底径 17.1	密。3mm以下の石英・長石・黒色粒を含む。	堅 級	赤燈 (10 R 6/6)	脚部に4方向の円形スカシを有する。脚部外面に11条、底端部外面に1条の凹線文を施す。	反転復元
13	D	SK1104	器台	底径 17.2	密。2mm以下の石英・長石を含む。	堅 級	灰白 (10 YR 8/2)	外面に8条の凹線文を有す。内・外面向ともに黒斑がみられる。	反転復元
14	D	SK1104	高杯(杯部)	口径 22.2	密。1.5mm以下の石英・長石・金雲母・黒・暗赤色粒を含む。	堅 級	に bei 橙 (7.5 YR 7/4)	口縁部外面に4条の凹線文をめぐらす。	反転復元
15	D	SK1104	壺(底部)	底径 7.5	粗。8×4mmの閃綠岩・並角隕及び3mm以下の角閃石・長石・石英を含む。	堅 級	に bei 黄褐 (10 YR 6/4)	生駒西脇塗の胎土。	反転復元
16	D	SK1104	壺(底部)	底径 8.5	粗。4mm以下の角閃石・長石・石英を含む。	堅 級	黒褐 (10 YR 2/2)	生駒西脇塗の胎土。	反転復元
17	D	SK1104	壺(体部)	体部最大径	密。1.5mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	堅 級	外) 棕 (7.5 YR 7/8) 内) 灰白 (2.5 Y 8/2)	体部(狭窄の上位)に8条の沈線文、その下方にヘラ描き網格子文、直下に波状文(5~6本)を施す。	反転復元
18	D	SK1104	壺(口縁部)	口径 29.8	密。2mm以下の石英・長石・金雲母を含む。	堅 級	燈 (7.5 YR 7/6)	口縁部外端面にスス付着。	反転復元
19	D	SK1104	壺	口径 29.8 器高(推定) 42.1 底径 8.2	粗。3mm以下の砂粒を多量に含む。	軟	外) 明赤褐 (2.5 YR 5/8) 内) に bei 黄 (2.5 Y 6/8)		残存率 80%

(谷口文字作成)

第6章 Eトレーニチの調査

調査に当たっては、現在の表土層を第1層とし、その下面を第1面として調査することにし、順次土層番号と面番号を付けていった。ただし、同一条件のもとで形成されたと考えられる土層は一縦めにしたものもある。遺構の略号は、土を盛り上げた遺構をS A (Ex.畔)、細長く掘り込んだ遺構をS D (Ex.溝)、方形または円形に掘り込んだ遺構をS K (Ex.土坑)、小さな穴状に掘り込んだ遺構をPit (Ex.ピット)、その他をS X、特に、建物だけをS Bとし、その前に地区記号を付けた。遺構番号は前の2桁が面番号、後の2桁がその面での同一遺構の番号となるようにした。

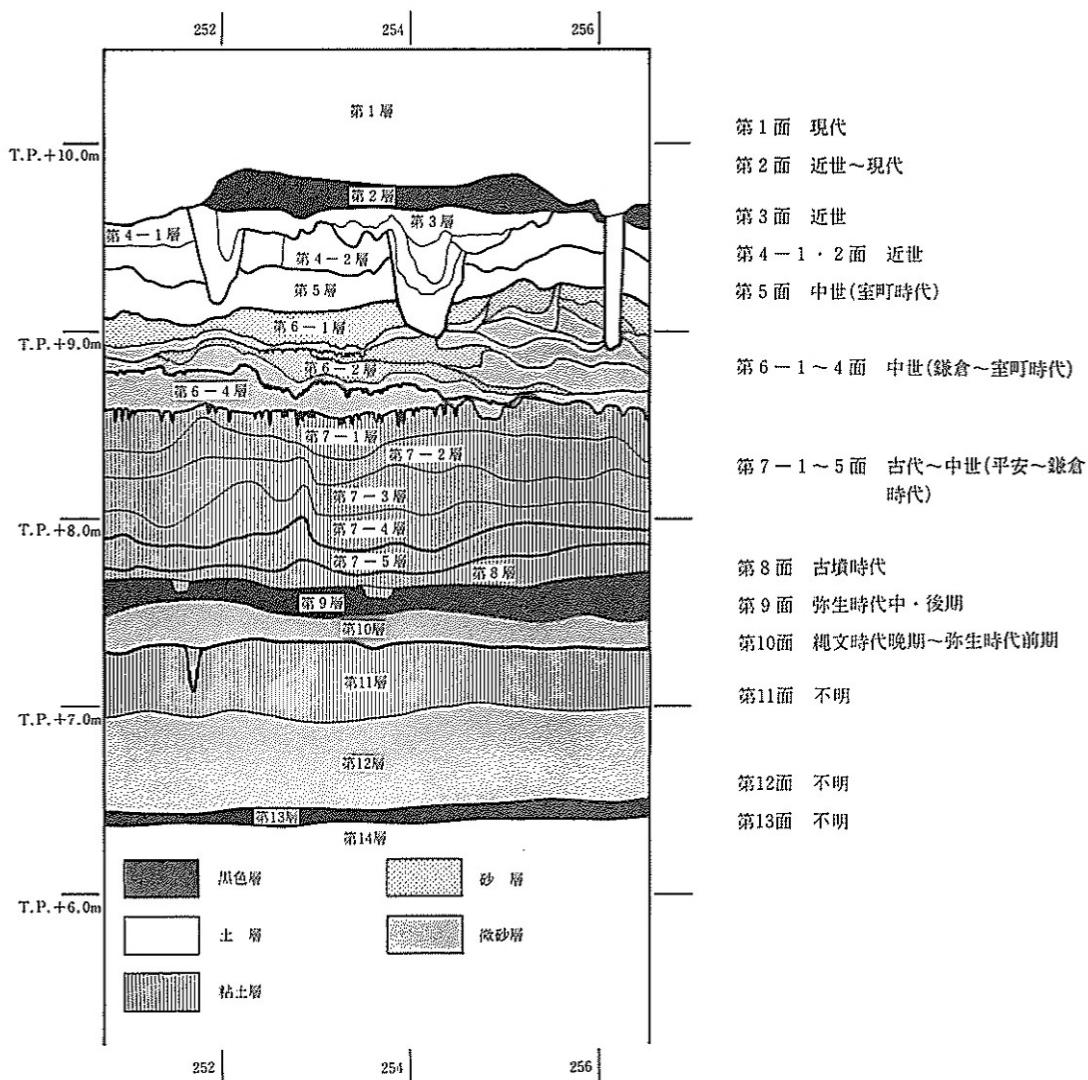


fig.108 Eトレーニチ 土層断面模式図

現地表面

現地表面はT.P.+10.5mを測る。トレント内部の東寄りに長軸に平行して中央環状線の雨水排水用の溝がある。幅は約1.5m、深さは、ヘドロが溜まっていてよくは解からないが約1m位と思われた。

第1層（現代遺物包含層）

バックホーにより掘削したが、ほとんどが盛り土である。これは府道中央環状線建設時のものと考えられる。厚さは0.6m～0.9mを測る。一部道路に近い部分には山土があり、道路建設時の路床の入れ替えが行われている。E地区とF地区の間には地下鉄の谷町線が走っており、この時の盛土もあると考えられる。

第1面（現代遺構面）

北端でT.P.+9.6m、252ライン付近でT.P.+9.85mと高くなり、255ライン付近まで続き、南端では再びT.P.+9.65mと低くなっている。北端の低い部分は黄色土であり、その他は黒色土である。北端部は黒色土が削り取られており、下層の黄色土が露出している。この面では現地表面から掘り込まれた排水用の溝の底部とこの面から掘り込まれている溝状の落ち込みを検出した。両方共深さ0.6m～0.7mを測り、最も深い部分でT.P.+8.9mを測る。ただ、排水用の溝は北では僅かに浅くなっている。

第2層（近世～現代遺物包含層）

第1面を主に形成している黒色土であり、中央環状線建設以前の水田耕作土である。厚さは0.05m～0.2mを測る。近世～現代までの遺物を主に含んでいるが、希に須恵器や瓦器の破片もある。

第2面（近世～現代遺構面）

北端でT.P.+9.6m、南端でT.P.+9.55mを測る。252ラインから256ラインはT.P.+9.65mと僅かに高くなっている。北・南端部は共に黄色土であるが、252～256ライン間は淡褐色砂であった。この面では、東西方向の細い溝を数条検出した。幅は0.1～0.15m、深さは0.05mを測る。埋土は灰色土であり、遺物はほとんど検出し得なかった。一般的に鋤溝と呼んでいる類いの溝である。

第3層（近世遺物包含層）

第2面の中央部に溜まった淡褐色粗砂である。厚さは0.05～0.25mを測る。大きくは2層に分けられる。上層はほぼ全面を覆っている粗砂であり、下層は窪んだ部分や遺構内に溜まった僅かに灰色を呈する粘質土のまじった粗砂である。遺物は近世の染め付けや中世の瓦器片等を僅かに含んでいる。

第3面（近世遺構面、fig.109）

北・南端部は第2面と全く同じである。252~256ラインがT.P.+9.5mを測る。遺構としては東西方向の溝を3条検出した。

E S D 0301は2 C 250から2 E 250までの間で検出した。東西両端は中央環状線の建設時に路床の入れ替えすでに掘削されており、面自体が残っていなかった。幅は3.0m、深さは0.25mを測る。埋土は灰色粘質土のまじった淡褐色粗砂であった。遺物は近世の染め付けや中世の瓦器片等を出土した。

E S D 0302は2 E 252~2 F 252で検出した。東西両端は調査区域外へ続いている。幅は2.0m~2.2m、深さは0.4~0.5mを測る。埋土は灰色粘質土のまじった淡褐色粗砂であった。遺物は近世の染め付けや中世の瓦器片等を出土した。E S D 0301に平行している。

E S D 0303は2 E 254~2 F 255で検出した。東西両端は調査区域外へ続いている。幅は3.0~3.6m、深さは0.3mを測る。埋土は灰色粘質土のまじった淡褐色粗砂であった。遺物は近世の染め付けや中世の瓦器片等を出土した。E S D 0302に平行している。

第4-1層（中世～近世遺物包含層）

北端から252地区まで存在していた黄灰色土であるが、他では確認し得なかった。厚さは0.1~0.2mを測る。遺物は中世の瓦器の破片と共に近世の染め付けが出土している。

第4-1面（近世遺構面）

第4層の上層を除去した面であり、第3面で検出した溝の底部を除いては全面が黄灰色土である。北端でT.P.+9.45m、中央部から南は第3面と全く同じであり、中央部でT.P.+9.5mの前後、南端でT.P.+9.55mを測る。明確な遺構は検出し得なかった。

第4-2層（中世～近世遺物包含層）

全域にみとめられた黄灰色土であるが、253地区から北の部分では僅かに粘質を帶びている。厚さは0.15~0.25mを測る。遺物は中世の瓦器の破片と近世の染め付けが出土している。第3層や上層よりも染め付けの破片が少ない。

第4-2面（近世遺構面）

第4層の下層を除去した黄褐色土の上面である。北端でT.P.+9.35m、南端でT.P.+9.35mを測る。明確な遺構は検出し得なかった。

以上が近世の堆積層と検出面である。第3層の砂は、旧東除川の氾濫による堆積の可能性が考えられることから、宝永元年（1704）の大和川の付替え以前の堆積と考えられる。第3面で検出した溝の用途は明らかにし得ないが、灌漑用であろう。ただし、土質等から観ると、この時期には水田よりも畠地と考える方が良いようである。

第5層（中世遺物包含層）

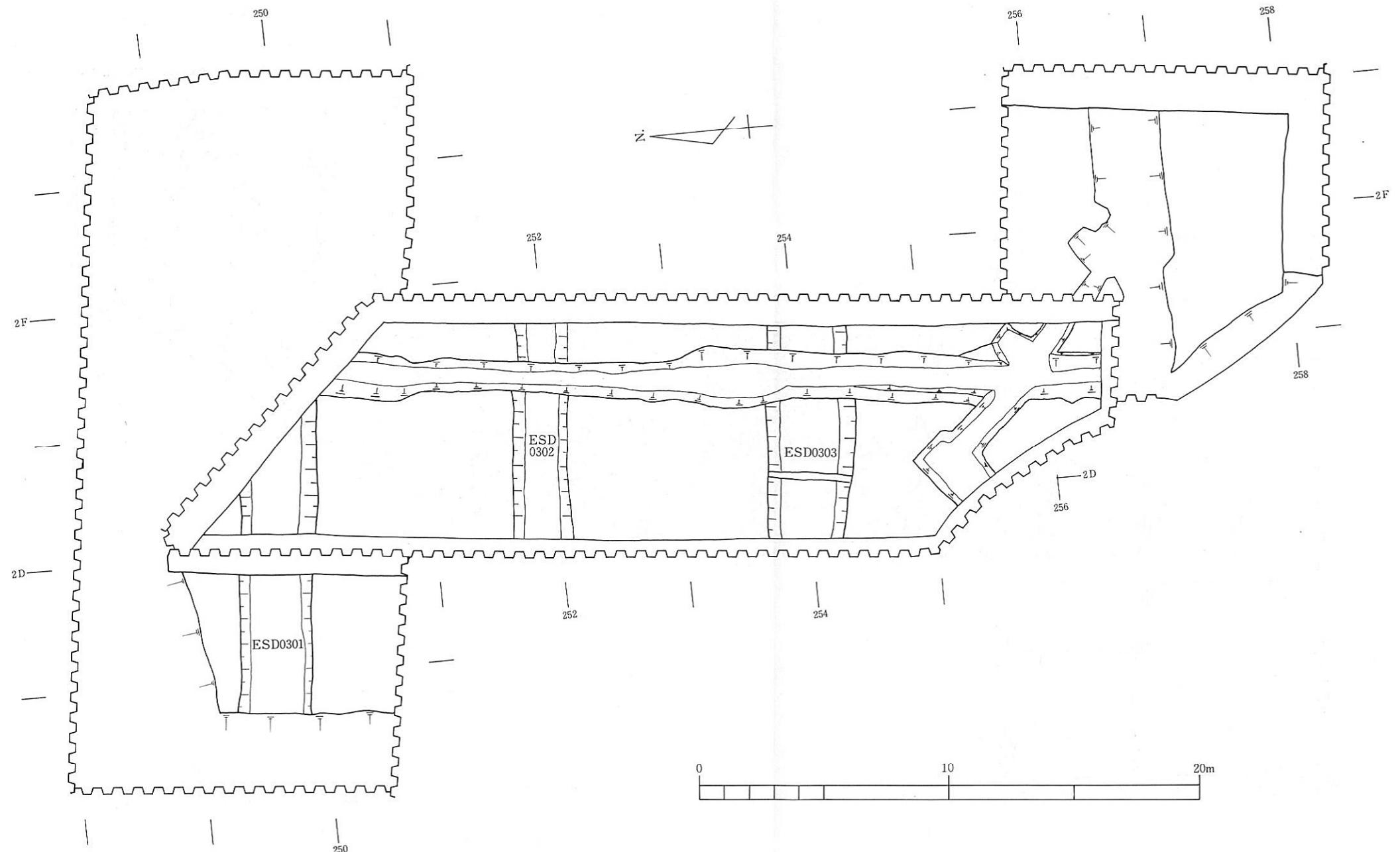


fig.109 E トレンチ 第3面 (近世遺構面)

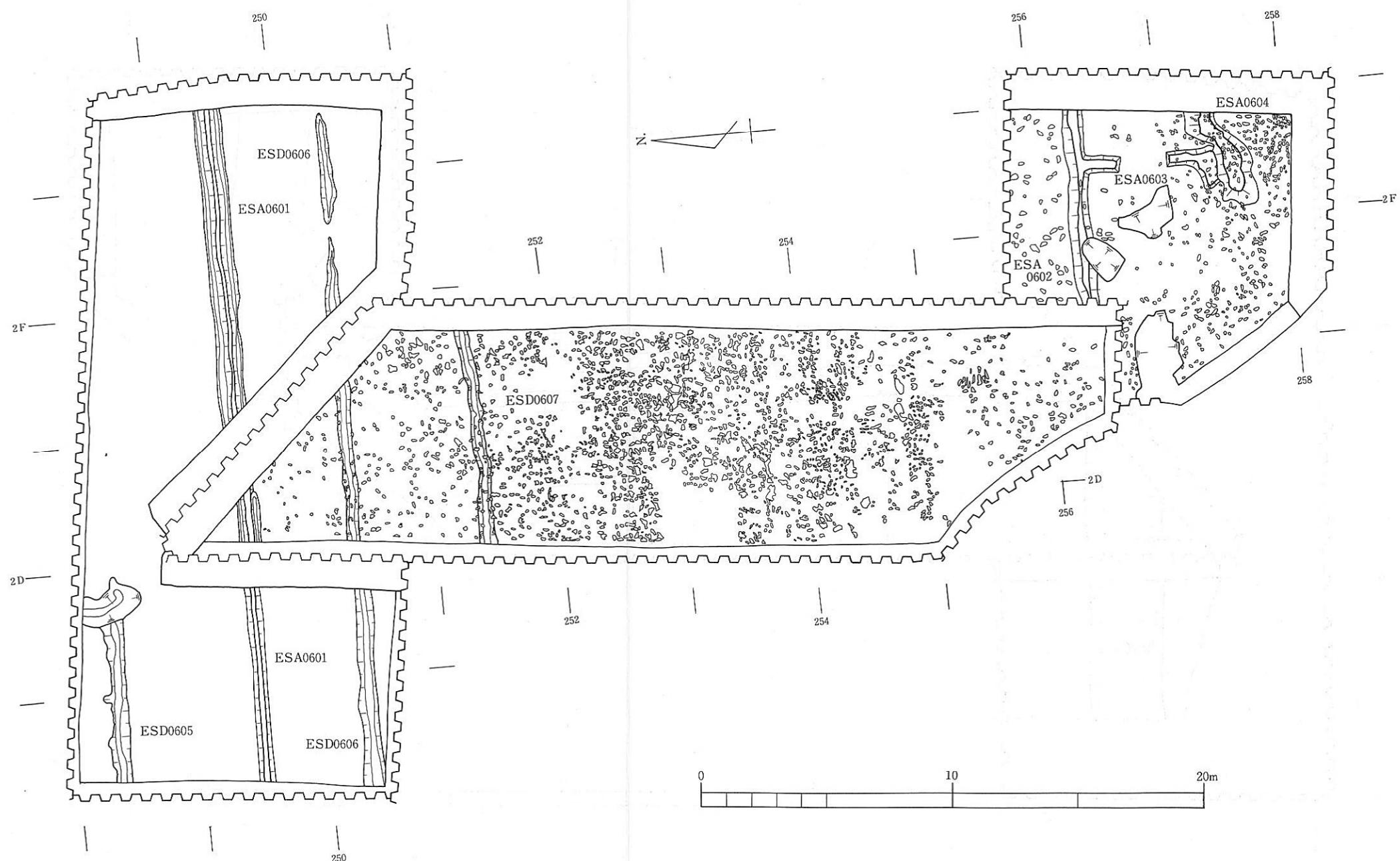


fig.110 Eトレンチ 第6-4面 (中世遺構面)

全面に存在する黄褐色土である。厚さは0.1~0.25mを測る。遺物は中世の瓦器の破片が主で、近世の遺物は含んでいない。中世以前の遺物は確認されているが、この層で初めて縄文時代晩期の長原式土器の破片を確認した。

第5面（中世遺構面）

第5層を除去した褐灰色砂の上面である。北端でT.P.+9.05m、南端でT.P.+9.15mを測る。全体に緩やかに北に傾斜しているが南端でも僅かに低くなっている。明確な遺構は検出し得なかった。

第6層（中世遺物包含層）

この層は単純な層ではなく、何層もが複雑に堆積している。主として砂、微砂で構成されているが、最上層は砂質土である。厚さは0.5~0.65mを測る。北よりも南のほうが厚く堆積している。この層の上面は緩やかに北へ傾斜している。遺物は少ないが、最下層から中世の瓦器碗の完形品（fig.112E-01~04）が出土している。

第6-1面（足跡面1、中世遺構面）

第6層の砂や微砂を0.2~0.3m除去した段階で確認した面で、北端はT.P.+8.85m、南端はT.P.+8.75mを測る。面自体は一様ではなく、トレンチ中央部が灰白色砂で北・南端は青灰色微砂である。ここでは全面に足跡があった訳ではなく、トレンチ中央部にのみ北西から南東に向かって僅かに確認されただけである。或る程度歩行の状況を伺わせるものもないではないが、道として往復歩行が確認されるような状況ではない。なんとなくウロウロしている様である。足跡の埋土は青灰色微砂である。

第6-2面（足跡面2、中世遺構面）

第6-1面の中央部を形成している灰白色砂を除去した段階で確認した面で、北端は第6-1面と同じであり、T.P.+8.85m、南端はT.P.+8.7mを測り、僅かに南へ傾斜している。面は青灰色微砂である。足跡はトレンチの北方で僅かに確認しただけで、歩行の状況等については全く不明である。足跡の埋土は灰白色の砂である。

第6-3面（足跡面3、中世遺構面）

第6-2面を形成している青灰色微砂を0.1~0.2m除去した段階で確認した面で、北端はT.P.+8.7m、南端はT.P.+8.55mを測る。252ライン付近から僅かに南へ傾斜している。中央部から北方は上層とほとんど同様の青灰色微砂であるが、南端は青灰色粘土である。この面では足跡だけではなく、252ラインより北の僅かに高くなったところで4条の溝等を検出した。

E S D 0601は2 E 250で東西に伸びる溝である。幅は0.3m、深さは0.1mを測る。埋土は白色砂の混じった青灰色微砂である。遺物は出土しなかった。

E S D 0602はE S D 0601の南0.3mの位置で平行して東西に伸びる溝である。幅は0.3m、深さは0.1mを測る。埋土は白色砂の混じった青灰色微砂である。遺物は出土しなかった。

E S D0603はE S D0602の南約3mの位置で平行して東西に伸びる溝である。幅は0.6~0.8m、深さは0.1mを測る。埋土は白色砂の混じった青灰色微砂である。遺物は出土しなかった。

E S D0604はE S D0603の南約5mの位置で平行して東西に伸びる溝である。この溝は長さ2.5mと4mの2条が0.3mの間隔を置いて直列しており、2条の溝であるが、1条として扱った。幅は0.5~0.9m、深さは0.1mを測る。埋土は白色砂の混じった青灰色微砂である。遺物は出土しなかった。

E S K0601はE S D0604の東に位置する深い不整円形の土坑である。直径は1.6m、深さは0.1~0.15mを測る。埋土は白色砂の混じった青灰色微砂である。遺物は出土しなかった。

足跡は、溝のある北側は非常に少ないが、南では割合密集している。或る程度歩行の状況を確認できるが、明確な方向性を持つ訳ではなく、単に歩き回っているようである。埋土は白色砂の混じった青灰色微砂である。

第6-4面(足跡面4、中世水田面、fig.110)

第6-3面の中央部から北を形成している青灰色微砂を除去し、南端の青灰色粘土層で揃えた面であり、北端はT.P.+8.55m、南端はT.P.+8.55mを測る。ほぼ水平な面である。この面では畔、溝と足跡を検出した。

E S A0601は2 C250から2 H250まで東西に伸びる畔である。検出長は約28mであり、調査区域外に続いている。幅は、下端で0.4~0.5m、上端で0.1~0.2m、高さは0.1~0.15mを測る。断面の形状は蒲鉾型である。畔は削り出して造っているのではなく、下層の粘土と同色・質の粘土を盛っている。2 E250から東では畔の両裾に幅0.2m、深さ0.05mの溝が平行して伸びている。正確に東西に伸びている。

E S A0602は2 F257から2 H257まで東西に伸びる畔である。検出長は約9mで、トレンチ部では検出に失敗したようである。2 G257で直角に南へ派生する畔があり、約1.5m伸びている。幅は下端で0.7~0.9m、上端で0.05m~0.4m、高さは0.1~0.15mを測る。断面の形状は蒲鉾型である。畔は削り出して造っているのではなく、下層の粘土と同色・質の粘土を盛っている。E S A0601に平行している。

E S A0603は、2 G258で北から南へ約2m伸び、西へ直角に曲がって約1m伸びる畔である。幅は下端で0.7~0.9m、上端で0.05~0.4m、高さは0.1~0.15mを測る。断面の形状は蒲鉾型である。畔は削り出して造っているのではなく、下層の粘土と同色・質の粘土を盛っている。東西部分はS A0601・2に平行している。北は途切れているが、E S A0602の南へ派生している畔と方向的には一致する。西は途切れていって不明である。

E S A0604 2 G258から東に伸び、北に鍵型に曲がって2 H258まで東西に伸びる畔状の高まりである。検出長は約5mで、2 F258から西では途切れていた。2 G258でE S A0603と接している。幅は下端で0.7~0.9m、上端で0.05~0.4m、高さは0.05~0.1mを測る。断面の形状は蒲鉾型であるが、E S A0601・2・3に比べると不整形である。この畔状の高まりは削り出して造っ

ているのではなく、下層の粘土と同色・質の土を盛っている。

E S D 0605は2 C 249から2 D 249まで伸びる溝である。西は調査区域外に続くが、東は攪乱孔によって切られており、終わっている。検出長は約5mである。幅は0.6~0.9m、深さは0.15~0.2mを測る。埋土は灰色粘土の混じった青灰色微砂である。方向的にはE S A 0601と平行している。遺物は瓦器碗の破片を出土した。

E S D 0606は2 C 251から、2 G 251で途切れていますが、2 H 251まで伸びる溝である。2 H 251で再び途切れています。西は調査地域外へ続いている。検出長は約27mである。幅は0.4~0.8m、深さは0.1~0.15mを測る。埋土は白色砂の混じった青灰色微砂である。遺物は出土しなかった。

E S D 0607は2 E 252から2 F 252まで伸びる溝である。東西は共に調査区域外に続いている。検出長は約10mである。幅は0.4~0.5m、深さ0.1mを測る。埋土は白色砂の混じった青灰色微砂である。遺物は出土しなかった。

足跡は、1・2 E グリッドでは図示しなかったが、全域で多数確認した。密集の度合いは多少異なっている。埋土は白色砂の混じった青灰色微砂である。

以上が第5・6層で検出した面である。特に、第6層では、微砂や砂や粘土をそれぞれ面としており、丁寧に数えれば7~10面になる。しかし、調査ではすべての面を独立した面としては捕らえられなかった。そこで、足跡を確認した4面のみに番号を付した。それから、第6-3面で検出した遺構はすべて第6-4面の遺構の影響でできた落ち込みであり、独自に造られたものではない。第6-4面では畔が検出されており、水田であったことが明らかになった。水田の時期は上層出土の瓦器碗（fig.112 E-01~04）の前後であろう。

第7層（中世遺物包含層）

全面に厚く存在する青灰色粘土である。厚さは0.8~1.0mを測る。ほぼ同色、同質の粘土であるが、僅かな色や質の違いから5層に細分した。遺物は、中世の瓦器の破片、土釜の破片にまじって古墳時代の須恵器も僅かに出土した。この層で確認した須恵器は上層で出土したものほどは磨滅していない。下層の遺物と一緒に取り上げたのかとも考えられるが、最下層からの出土だけではない。最下層からは平安時代に遡るかと考えられる遺物も僅かにある。

第7-1面

明確な層の違いはないが、僅かに青色が強くなったところで面として捉えた。北端でT.P.+8.35m、南端でT.P.+8.3mを測る。部分的には起伏があるが、面として全体的に観ると水平に近い。遺構は全く確認できなかった。

第7-2面（中世面）

僅かに黒ずんだところを面として捉えた。北端でT.P.+8.2m、南端でT.P.+8.2mを測る。面は第7-1面と同様に若干の起伏はあるが、水平に近い。遺構は全く確認できなかった。

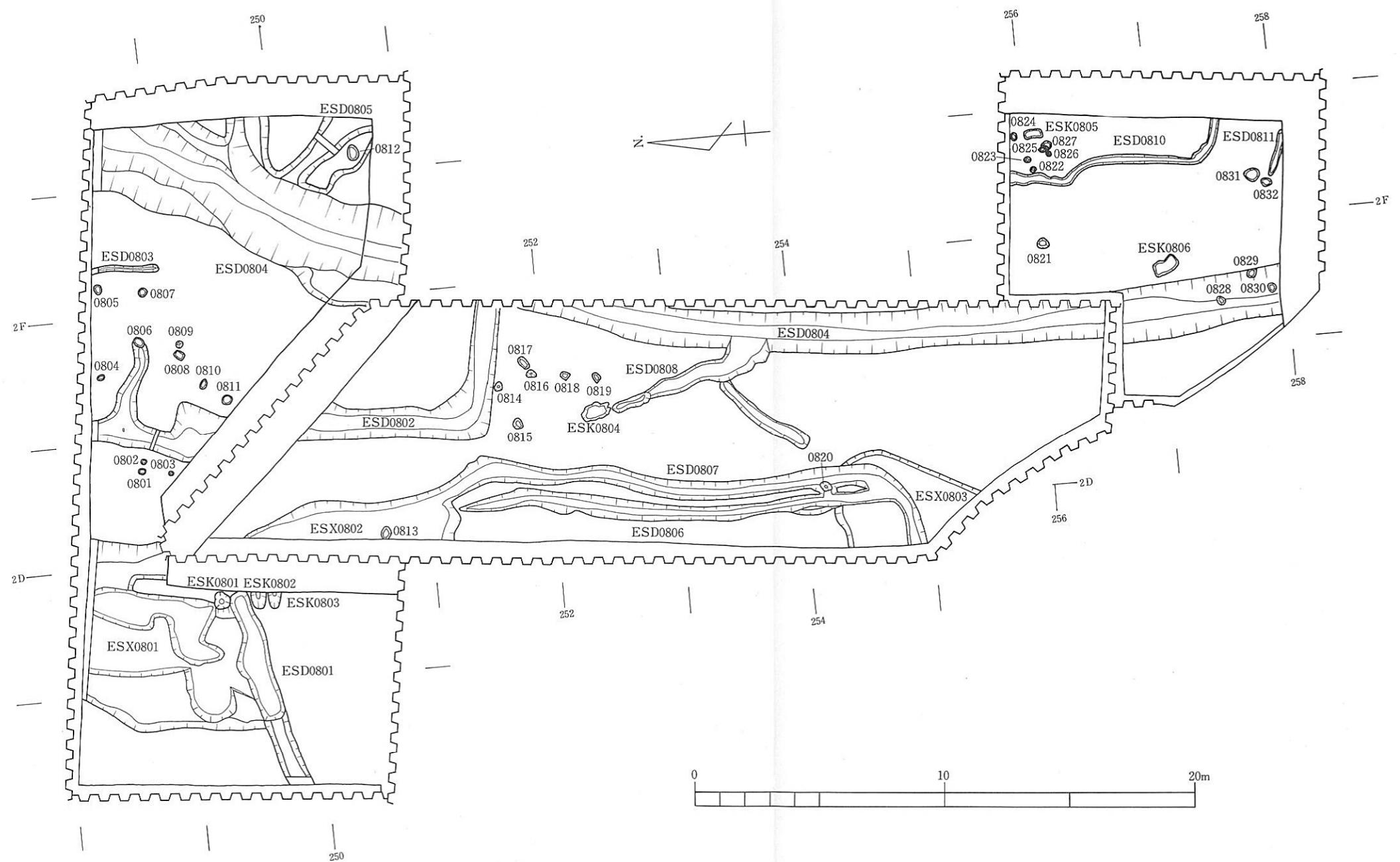


fig.111 E トレンチ 第8面 (古墳時代遺構面)

第7-3面(中世面)

第7-2面と同様に僅かに黒ずんだところを面として捉えた。北端でT.P.+8.05m、南端でT.P.+8.05mを測る。面は第7-1・2面と同様に若干の起伏はあるが、水平に近い。遺構は全く確認できなかった。

第7-4面(中世面)

青灰色粘土の中に白色粒の混じるところを面として捉えた。北端でT.P.+7.9m、南端でT.P.+7.95mを測る。面は第7-1・2面と同様に若干の起伏はあるが、水平に近い。遺構は全く確認できなかった。

第7-5面(古代～中世面)

緑灰色粘土の上面である。北端でT.P.+7.75m、南端でT.P.+7.85mを測る。ほぼ水平である。遺構は確認できなかった。

古代から中世にかけての時期には、土器の出土を除くと、ほとんど人間の生活の痕跡はなかった。

第8層(古墳時代遺物包含層)

緑灰色の粘土層である。第7層ほど均質ではないことと色が全く異なるということで分けた。厚さは0.05～0.15mを測り、南から北へ次第に薄くなっている。遺物は、上の7層に比較すると多いが、遺物包含層としては少ない方である。5世紀後半から6世紀前半の須恵器が含まれている。

第8面(古墳時代遺構面)

緑灰色粘土層を除去した黒色粘土層の上面である。北端でT.P.+7.7m、南端でT.P.+7.75mを測る。ほぼ水平な面である。遺構は溝・土坑・ピット等を多数検出した。

E S D0801は2 C250から2 D250まで伸びる溝である。検出長は約8mであり、東端は2 D250で終わっているが、西は調査区域外に続いている。東半部約5mはE S X0801と重なっており、僅かに深くなっている。切り合いは明確にはし得なかった。幅は0.75～1.4m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は緑灰色の粘土である。遺物は須恵器と土師器の破片を僅かに出土した。

E S D0802は2 F252から西へ約5.0m伸び、そこで直角に北へ向きを変えほぼ真っ直ぐに約16m伸びる。幅は1.0～1.4m、深さは0.1～0.15mを測る。2 F249で東へ派生する部分があり、長さは約3m、幅は0.5～0.8m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は須恵器の破片を少量出土しただけである。

E S D0803は2 G249から始まり、北へ伸びる溝である。検出長は約3m、北は調査区域外に続く。幅は0.2～0.25m、深さは0.1mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

E S D0804は2 F259から北へ向かって僅かに東へ湾曲しながら2 H249まで伸びる溝である。検出長は約50mを測り、南北両端は調査区域外に続く。幅は2.0m～4.0m、深さは0.4mを測る。

埋土は2層あり、上層が緑灰色粘土、下層が灰黒色粘土である。上層から出土した遺物は5~6世紀の須恵器の破片が主であるが、土師器・弥生式土器等の破片も多数混じっている。下層から出土した遺物は土師器の破片が主であるが、溝の底部に完形の土器数点 (fig.112E-10・11、fig.113E-12~18) が点在していた。

E S D 0805は2 H251で南東から北西に伸びる溝である。検出長は約6mであり、南東は調査区域外に続くが、北西はE S D 0804につながっている。埋土は緑灰色粘土である。遺物は須恵器の杯蓋 (fig.112 E-05) を出土した。

E S D 0806・7は2 D255から東へ約2m伸び、そこで北へ直角に屈曲し、2条に分かれて約18m伸びる溝である。北端が251ラインで終わっている西側の溝を0806、北端がE S X0802に繋がっている東側の溝を0807とした。それぞれ、幅は0.4~0.8m、深さは0.1~0.15mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は須恵器・土師器の破片を少量出土した。

E S D 0808は2 E253から南へ伸び、2 F254でE S D 0804に繋がる溝である。検出長は約7mを測る。幅は北で0.4m、南で1.8m、深さは0.1~0.15mを測る。北端約1.5mは土坑状になっており、幅は0.4m、深さは0.2~0.25mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は少量の須恵器・土師器の破片を出土した。

E S D 0809は2 E254から北東へ伸び、2 F254でE S D 0808に繋がる溝である。検出長は約4mを測る。幅は0.4~0.6m、深さは0.1~0.15mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物は少量の須恵器・土師器の破片を出土した。

E S D 0810は2 G256から南へ伸び、2 G257で南東へ向きを変え、すぐにまた、南へ向きを変え、2 G258で直角に東へ向きを変える溝である。検出長は約11mを測る。幅は0.3~0.5m、深さは0.05~0.1mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は少量の須恵器・土師器の破片を出土した。

E S D 0811は2 G258で北西から南東へ伸びる溝である。検出長は約2mを測る。幅は0.3m、深さは0.05~0.1mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

E S K 0801は、2 D250でE S D 0801の東端北側に位置する、円形の土坑である。直径は0.6m、深さは0.2mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

E S K 0802・3は、2 D250でE S D 0801の東端南側に、南北に並んで位置する、楕円形の土坑である。それぞれの長径は1m、短径は0.6m、深さは0.25を測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

E S K 0804は、2 E253で、南北を長軸とする不定形の土坑である。E S D 0808の北に0.1mの間隔をおいて繋がる様に位置している。長軸は約1.1m、幅は0.6m、深さは0.15~0.2mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

E S K 0805は、2 G257で、南北を長軸とする長方形の土坑である。長軸は0.75m、短軸は0.35m、深さは0.15mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は土師器の小破片を出土した。

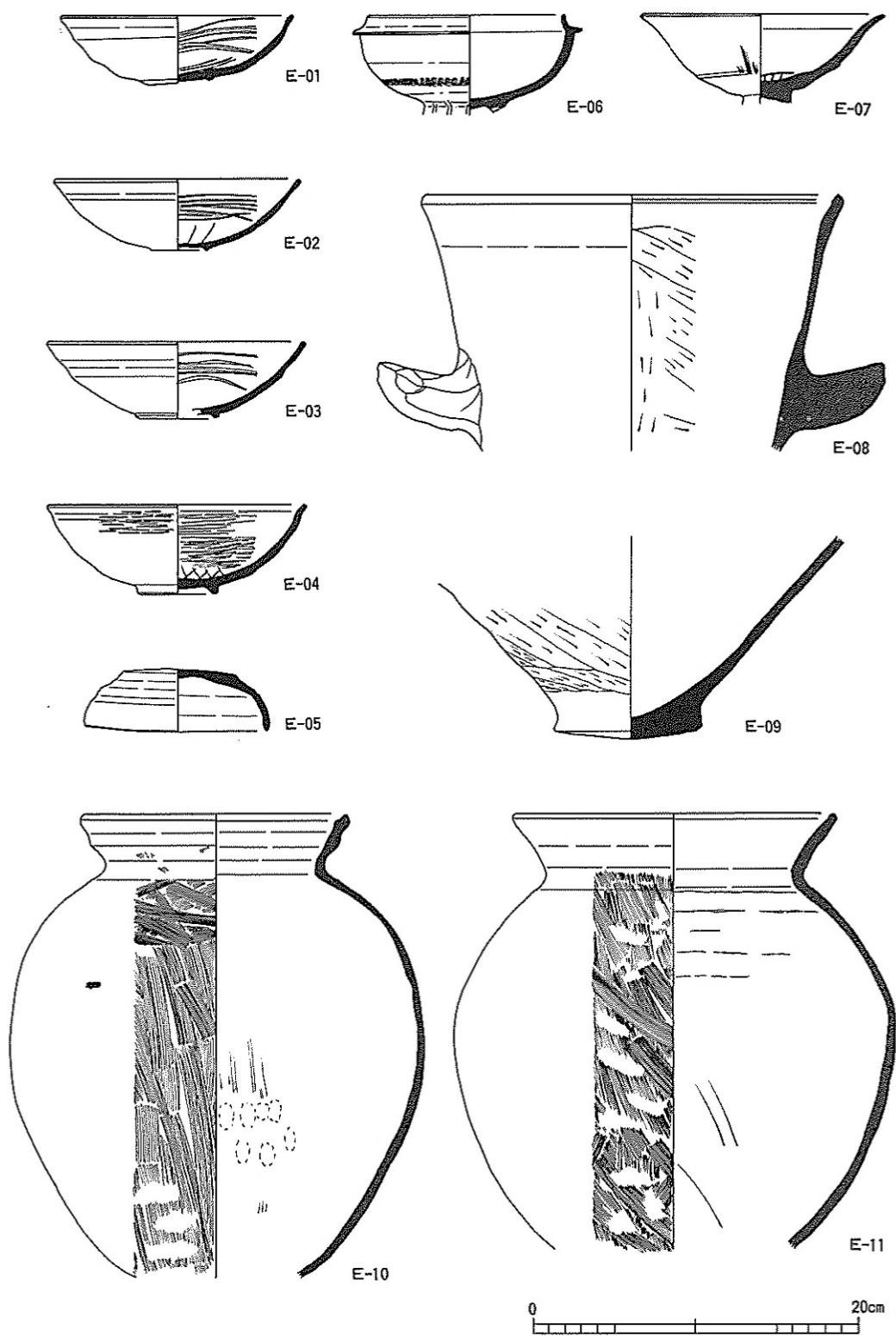


fig.112 Eトレーニチ 第6層最下層・E S D0804・0805・E S B0901出土遺物

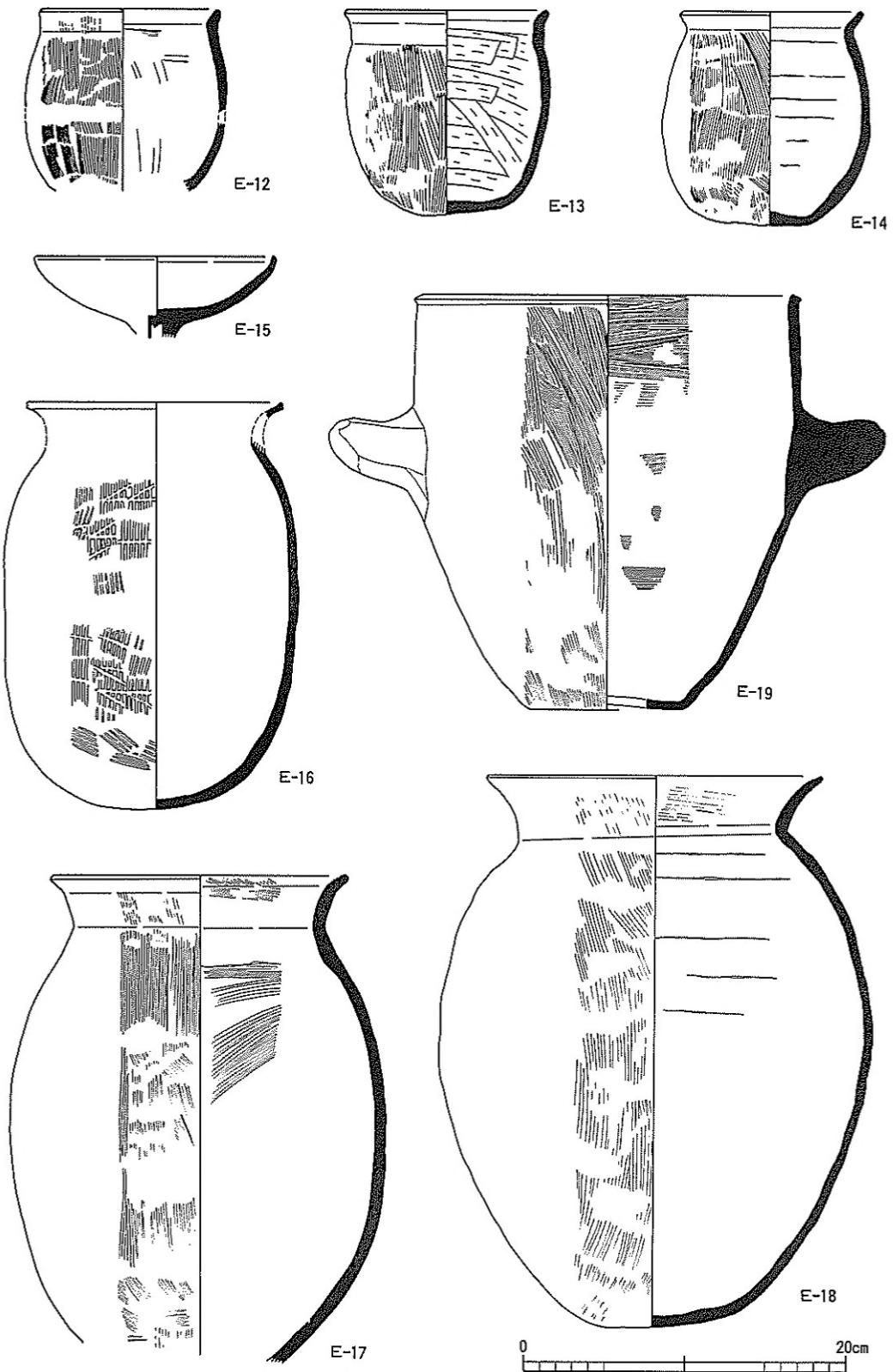


fig.113 E トレンチ E S D0804出土遺物

E SK0806は2F257・8にまたがって位置し、南北を長軸とする長方形の土坑である。長軸は約1.1m、幅は0.6m、深さは0.15mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

EPit0801～0803は、2E249で検出したピットであり、ESD0802の西に点在している。直径は0.15～0.25m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

EPit0804～0807は、2F249で検出したピットであり、ESD0802とESD0803の間に点在している。0806はESD0802の東端で溝を掘削した後で確認した。直径は0.25～0.45m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

EPit0808～0811は、2F250で検出したピットであり、ESD0802の東に点在している。直径は0.25～0.45m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は、0809が灰色粘土で、その他は緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

EPit0812は、2H251で検出した楕円形のピットであり、ESD0805の南西に位置している。径は0.5～0.6m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

EPit0813は、2E251でESX0802の掘削後検出した楕円形のピットであり、ESX0802の底部に位置している。径は0.4～0.6m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

EPit0814～0819は、2E・F252・2F253で検出した円形・楕円形のピットであり、ESD0802の南に点在している。直径は0.3～0.55m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は、0814・16が緑灰色粘土で、その他は灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

EPit0820は、2E255でESD0806・7の掘削後検出した円形のピットであり、ESD0806・7が繋がっている部分の底部に位置している。径は0.45m、深さは0.1mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

EPit0821は、2F257で検出した円形ピットであり、ESD0804の東に位置している。径は0.4m、深さは0.15mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物は出土しなかった。

EPit0822～0827は、2G256・7で検出した円形・楕円形のピットであり、ESD0810の東に点在している。直径は0.2～0.5m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

EPit0828～0830は、2F258でESD0804の掘削後検出した円形・楕円形のピットであり、ESD0804の底部や肩部に点在している。直径は0.3～0.4m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

EPit0831・2は、2G258で検出した楕円形のピットであり、ESD0811の西に点在している。直径は0.3～0.6m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

ESX0801は2C・D249・2C・D250で検出した落ち込みであり、ESD0801の北に位置している。検出長は、東西が6.5～7.5m、南北が5.5～7.5mを測る。北は調査区域外に続いている。

東からは二段に落ち込み、西からは三段に落ち込んでおり、深さは0.1～0.25mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E S X 0802は、2 D 250～252・2 E 250～252で検出した南北に長い溝状の落ち込みであり、E S X 0801とE S D 0807の間に位置している。E S D 0807の北端とは南東端で繋がっており、E S X 0801の東側の溝状部とは北で繋がっている。幅は1.5～2.5m、長さは8.5m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は緑灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E S X 0803は、2 D 255・6・2 E 255・6で検出した落ち込みであり、E S D 0806・7に切られて下に位置している。検出長は東西4.5m、南北5.5m、深さは0.2mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

以上が第8面で検出した遺構である。埋土は大きく2種類に分けられる。一つは緑灰色粘土であり、もう一つは灰色粘土である。ほとんどの遺構が浅いためにほぼ1層で埋まっていたが、E S D 0804だけが2層で埋まっていた。その下層が灰黒色粘土であり、上層が緑灰色粘土であること、また第8層が緑灰色粘土であることからも埋土の違いは時間的な差として捉えられる。出土遺物も古墳時代の中期から後期のものがあり、灰色粘土を埋土とする遺構が古く、緑灰色粘土を埋土とする遺構が新しいと考えられる。新しいであろう遺構には、溝、土坑、ピット等があり、居住域に近いことを想定させる。また、古いであろう遺構には、完形の土器を並べた溝があり、何かの祭祀の跡と考えられる。これも、祭祀の内容によっては居住域に近いとも考えられる。

第9層（弥生時代中・後期遺物包含層）

黒色の粘土層であるが、第7・8層に比較すると僅かに砂混じりである。厚さは0.1～0.25mを測る。弥生時代中・後期の遺物を大量に含んでいる。

第9面（弥生時代中・後期遺構面、fig.114）

黒色粘土層を除去した青灰色微砂の上面であるが、1面だけではない。2・3 E グリッドでは青灰色微砂層の内の上半部の僅かに黒ずんだ部分を除去した段階でも遺構が確認される。北端でT.P.+7.5m、南端でT.P.+7.5mを測る。ほぼ水平な面であるが、北端で僅かに低くなり始める。遺構は竪穴住居跡、溝、土坑、ピット等を多数検出した。

E S B 0901は、2 D・E 253・4で検出した、方形の竪穴住居である。各辺はほぼ東西南北を指すが、厳密にいうと、南北軸はN90Eを指す。ほとんどの部分を検出したが、西辺を側溝の掘削時に損壊してしまった。検出長は東西・南北共に4.2mを測る。竪穴の掘り形を確認した時点ですでに遺物がほとんど露出していた。埋土は灰黒色粘土であり、これを除去すると出土遺物が底まで現われ、それと共に柱穴が4ヵ所で検出された。肩部から床面までの深さは0.05mを測る。柱痕の直径は0.1～0.15m、深さは0.35～0.45mを測る。埋土は黒色粘土である。柱痕間の距離は2.2～2.6mを測る。柱穴の径は0.4～0.6m、深さは0.4～0.5mを測る。柱穴の埋土は青灰色微砂と青

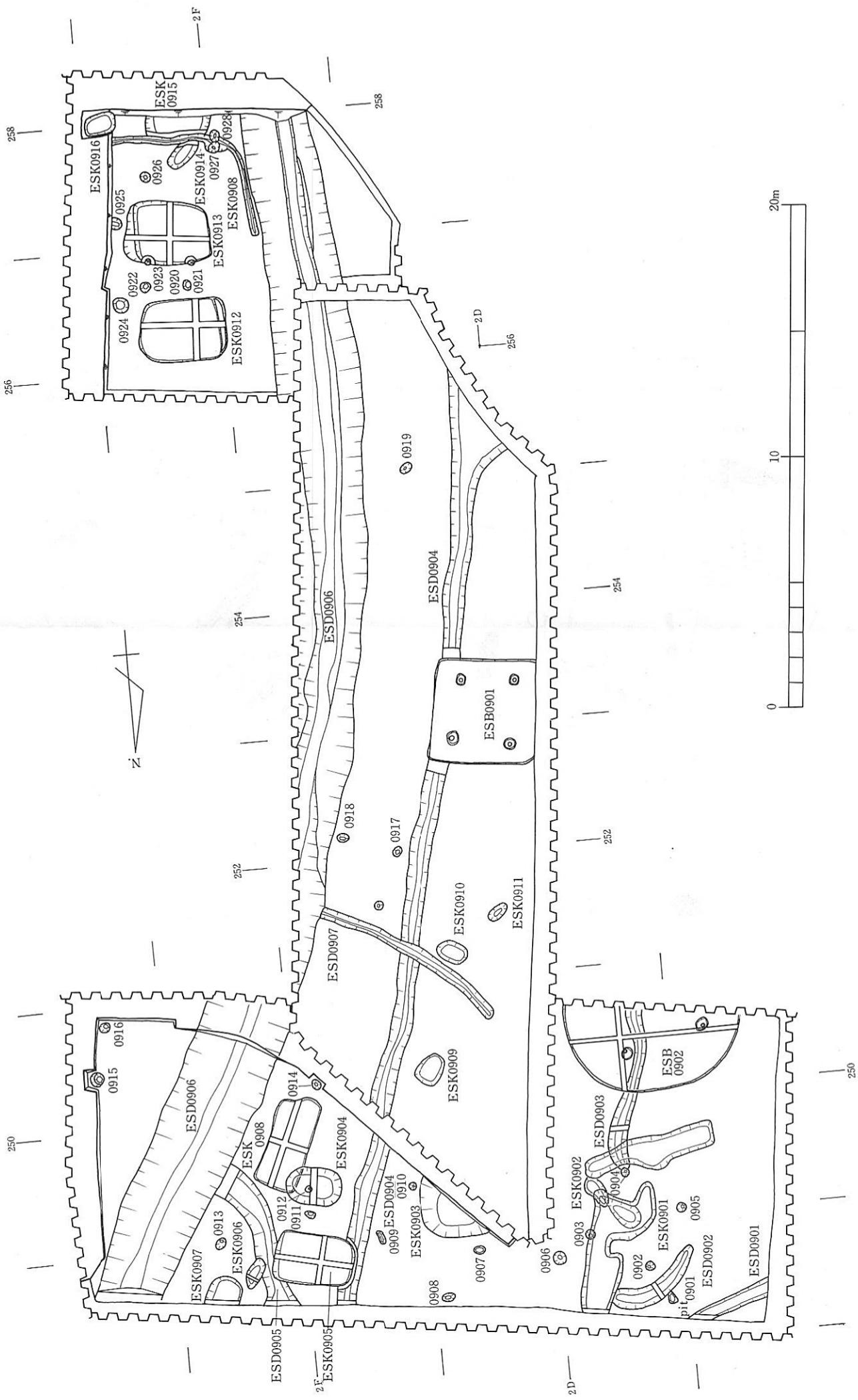


fig.114 Eトレンチ 第9面（弥生時代中・後期遺構面）

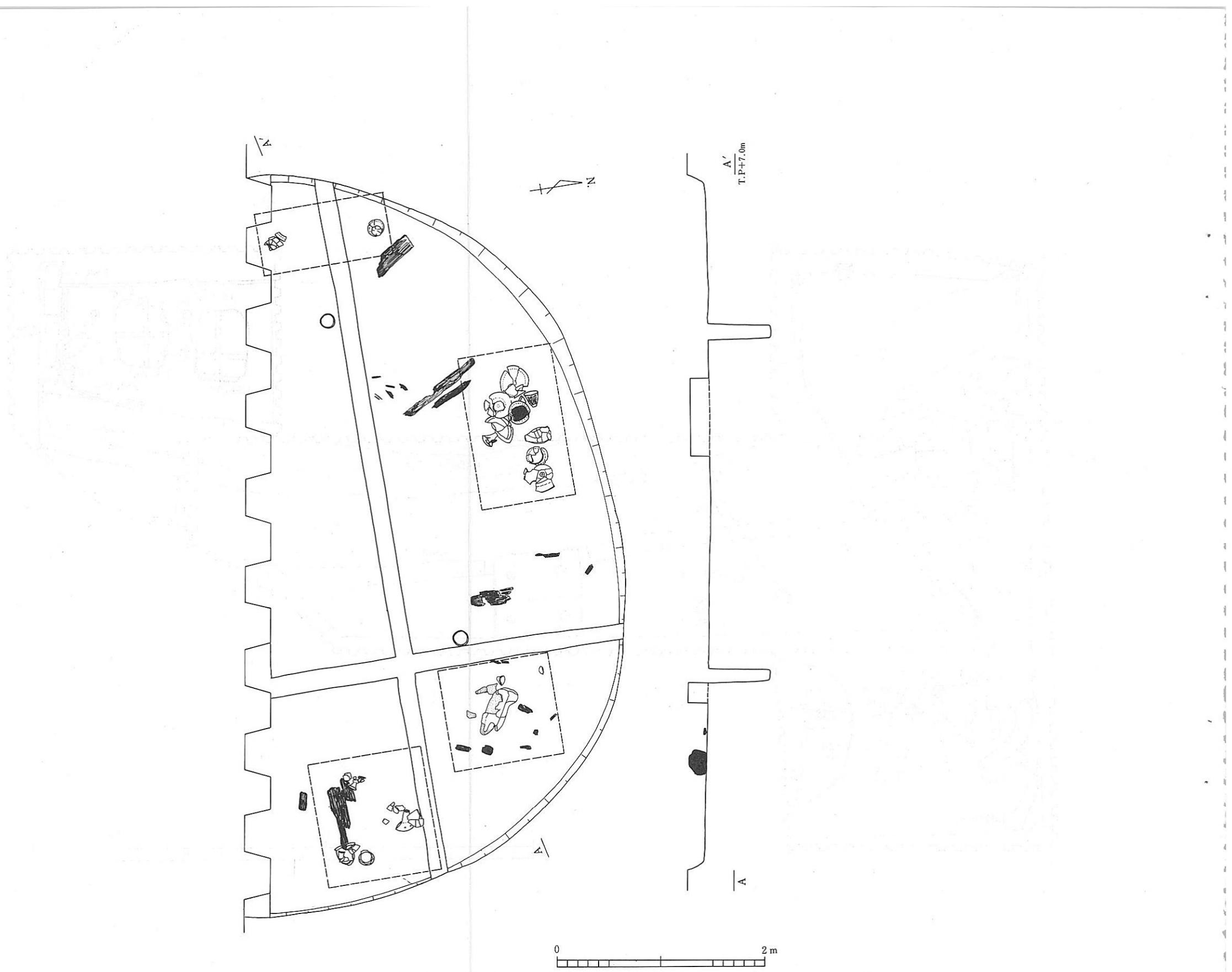


fig.115 E トレンチ E S 0902遺物出土状況

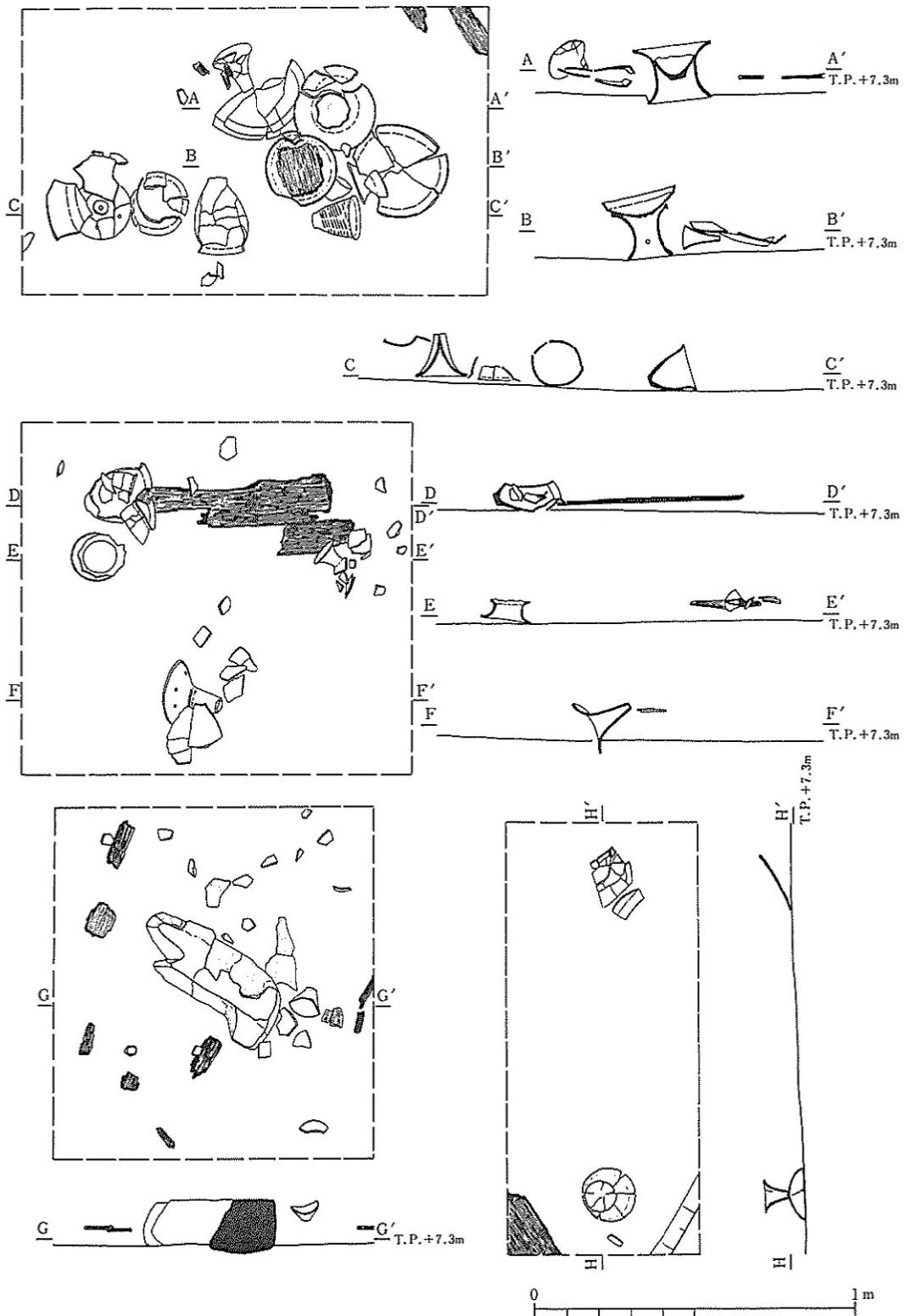


fig.116 Eトレンチ ES B0902遺物出土状況

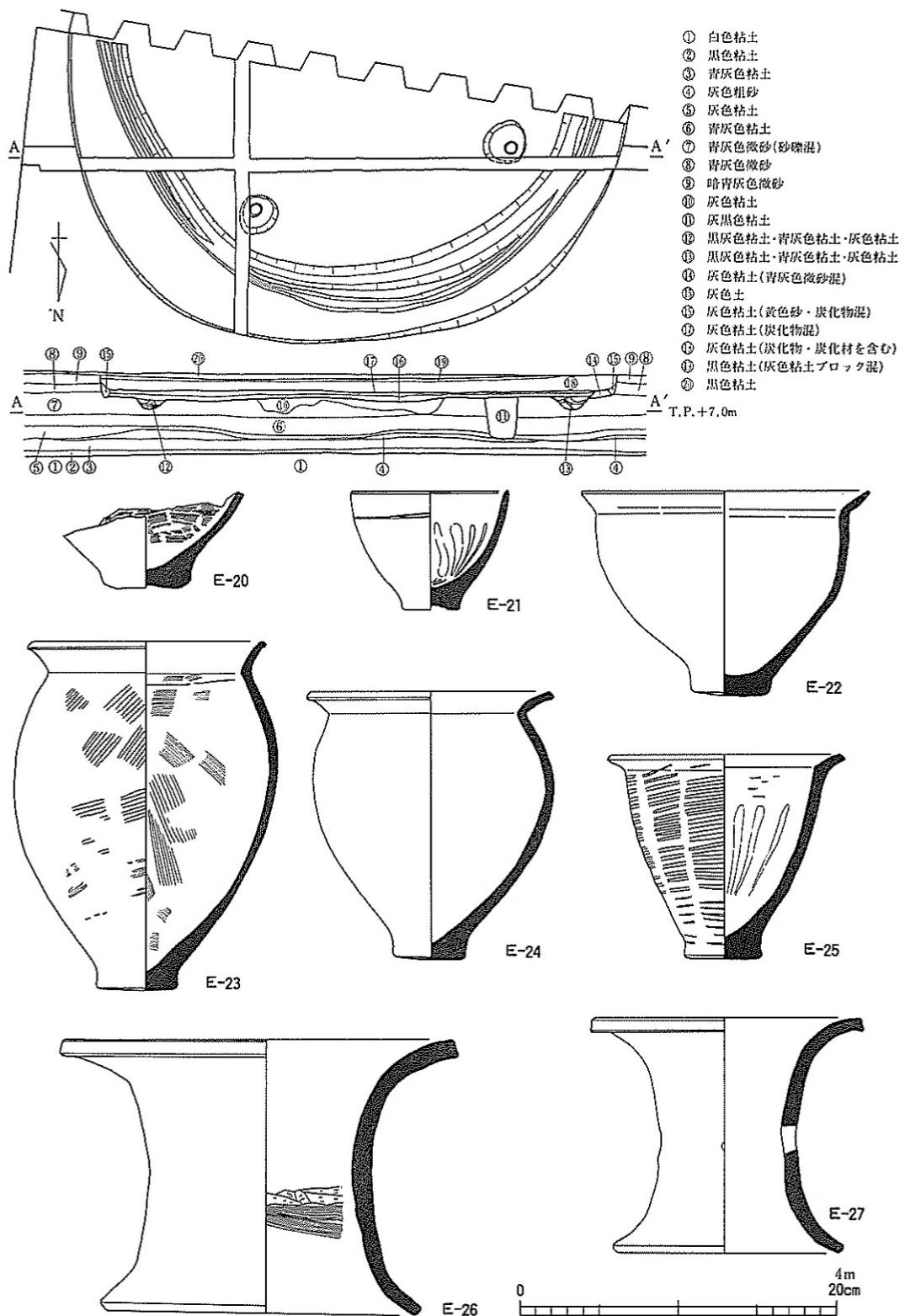


fig.117 E トレンチ E S B0902柱穴掘削状況、最終断面・出土遺物

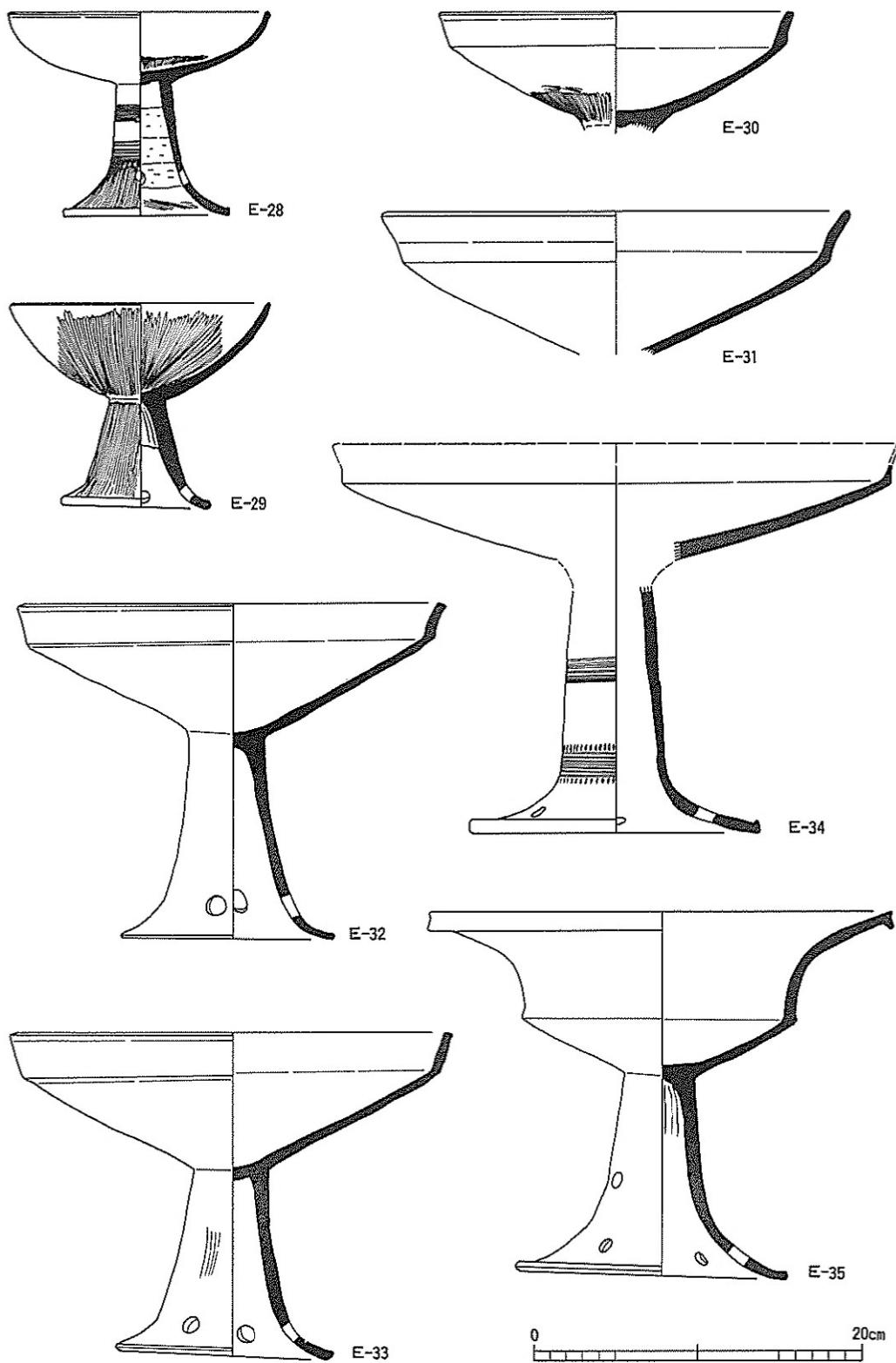


fig.118 Eトレソチ ES B0902出土遺物

灰色粘土と黒色粘土のブロックである。出土遺物は、脚を欠失した須恵器の高杯 (fig.112E-06)、脚を欠失した土師器の高杯 (fig.112E-07)、下半部の欠失した土師器の甌 (fig.112E-08)、一見縄文時代の土器の様な甌 (fig.112E-09) の底部と、その中に入っていた擦り石である。須恵器は南端中央部で出土したが、残りの遺物は北東の柱穴の付近で出土した。

E S B 0902は2 C・D251で検出した円形の竪穴式住居 (fig.115) であり、1 E グリッドの南端に位置している。検出長は東西7m、南北3.5mを測る。埋土は黒色粘土が最上層にあった。黒色粘土を端で0.05m、中央部で0.1m掘り下げると、炭化物を多量に含む灰黒色土に変わる。黒色粘土の中に弥生式土器の破片が大量に含まれている。灰黒色土を下げるに青黒色微砂に変わる。この上面が住居跡の床面であり、密着した状態の遺物 (fig.115・116) と共に直径0.1mの柱痕を2ヵ所で確認した。柱痕の位置は検出部西端から1.5m東と検出部東端から2.5mで北端部から1.5mの位置である。柱間の距離は3.3mを測る。柱痕の深さは床面から0.4~0.5mあり、西側が浅く、柱根と礎板のような割り材を確認した。埋土は灰色粘土であり、非常に柔らかい。肩部から床面までの深さは0.25mを測る。床面は張り床であり、これを除去すると、柱穴と3条の溝を検出した。柱穴は柱痕を中心近くに置くように位置している。直径は0.45~0.6m、深さは0.5~0.55mを測る。埋土は灰黒色土であり、粘土っぽい。柱痕部の埋土とは異なり非常に堅い。3条の溝は2条が竪穴壁の内側を同心円状に回るもので、もう1条は住居跡によって切られた溝の底部であり、北では継ぎが検出されている。2条の溝は、幅が0.15~0.25m、深さが0.1~0.15mを測る。位置的には竪穴壁に添ってあるのではなく、0.25~0.45m内側を回っている。(fig.117) この溝は最終的にはさらに深くなつて1条の溝になっていた。出土遺物は、ほぼ完形の土器が18点 (fig.117E-20~27、fig.118E-28~35)、長さ0.5mの石が1点、磁石が1点である。この他にも多数の土器片、サヌカイト剝片、と共に石鏃が1点出土しているが、ほとんどは床面より浮いた状態で出土している。

E S D 0901は2 C249で西南西から東北東に真っ直ぐに伸びる溝である。検出長は3.5mを測る。幅は0.5~0.7m、深さは0.15~0.2mを測る。埋土は黒色粘土である。

E S D 0902は2 D249で西南から北東に弯曲しながら伸びる溝である。検出長は4.0mを測る。幅は0.5~0.8m、深さは0.15~0.2mを測る。埋土は黒色粘土である。

E S D 0903は2 D251から2 D250まで蛇行しながら北に伸びる溝である。検出長は5.5mを測る。幅は0.4~0.8m、深さは0.1~0.25mを測る。埋土は黒色粘土である。南は調査区域外に続くが、北はE Pit0904に切られたところで終わっている。南半分はE S B 0902によって切られており、底部しか検出されていない。遺物はほとんど出土しなかった。

E S D 0904は2 D・E256から2 F249まで真っ直ぐ北北東に伸びる溝である。検出長は37.5mを測る。幅は0.6~1.0m、深さは0.1~0.15mを測る。埋土は黒色粘土である。南北は調査区域外に続く。南端は西側の肩が西へ屈曲しており、ラッパ状に広がっている。E S K0905、E S D 0907、E S B 0901によって切られている。遺物は弥生時代中期の甌を出土した。

E S D 0905は2 G250から2 G249まで弯曲しながら北に伸びる溝である。検出長は5.5mを測る。幅は0.8~1.4m、深さは0.15~0.2mを測る。埋土は黒色粘土である。北は調査区域外に続く。南端は東側のE S D 0 9 0 5に切られている。この他にE S K0905によって切られている。遺物は弥生時代中期の土器片を出土した。

E S D 0906は2 F259から2 H249まで弯曲しながら北に伸びる溝である。第8面のE S D 0804はこの溝の上部堆積である。検出長は49.0mを測る。南北両端は調査区域外に続く。幅は2.5~3.5m、深さは0.8~1.2mを測る。底部での幅は0.4~0.8mを測り、部分的に底部がさらに1段深く溝状になっている部分がある。幅は0.4m、深さは0.1mを測る。埋土は、両方の肩から青灰色微砂が流れ込み、その中央部に下から灰色粘土、灰黒色粘土、黒色粘土が堆積している。遺物は多量の弥生時代後期の土器（fig.119）に混じって中期の土器も多数出土した。

E S D 0907は2 E251から始まり2 F252まで弯曲しながら北西に伸びる溝である。検出長は8.0mを測る。幅は0.4~0.6m、深さは0.1~0.15mを測る。埋土は黒灰色粘土である。東南端は東側のE S D 0906に切られている。E S D 0904を切っている。遺物はほとんど出土しなかった。

E S D 0908は2 F257から始まりE S D 0906に沿って南に伸び、2 G258で東に屈曲して、2 H258で調査区域外に続く溝である。検出長は10.0mを測る。幅は0.2~0.3m、深さは0.05~0.1mを測る。埋土は黒灰色粘土である。E S K0914・15、E Pit0927・28を切っている。遺物はほとんど出土しなかった。

E S K0901は2 D249・250で検出した楕円形の土坑である。長径は1.5m、短径は0.8m、深さは0.15を測り、浅い皿状を呈する、埋土は灰褐色粘土であり、炭化物を含む。遺物はほとんど出土しなかった。

E S K0902は2 D250で検出した楕円形の土坑である。長径は1.4m、短径は0.65m、深さは0.15mを測り、浅い皿状を呈する。埋土は灰褐色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E S K0903は2 E250で検出した不整円形の土坑である。一部調査区域外に出ている。直径は約3.2m、深さは0.3mを測り、皿状を呈する。埋土は黒灰色粘土である。遺物は弥生時代中期の土器を出土した。

E S K0904は2 F250で検出した楕円形の土坑である。長径は2.2m、短径は1.5m、深さは0.25mを測り、皿状を呈する。埋土は青黒色土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E S K0905（fig.120）は2 F・G249で検出した長方形の土坑である。幅は2.0m、長さは3.3m、深さは0.4mを測る。形状は、壁面がほぼ垂直であり、底部が平坦であることから箱形を呈する。埋土は、大きく3層に分けられ、上層が厚さ0.15mの黒色粘土であり、中層が厚さ0.15mの黒灰色土であり、下層が厚さ0.1mの黒灰色土と青灰色微砂のブロックである。遺物は弥生時代中期の土器（fig.120 E-47）の下半部を出土した。

E S K0906（fig.120）は2 G249で検出した楕円形の土坑である。長径は1.3m、短径は0.6m、深さは0.2mを測り、浅い皿状を呈する。埋土は黒色土である。遺物は弥生時代中期の土器（fig.

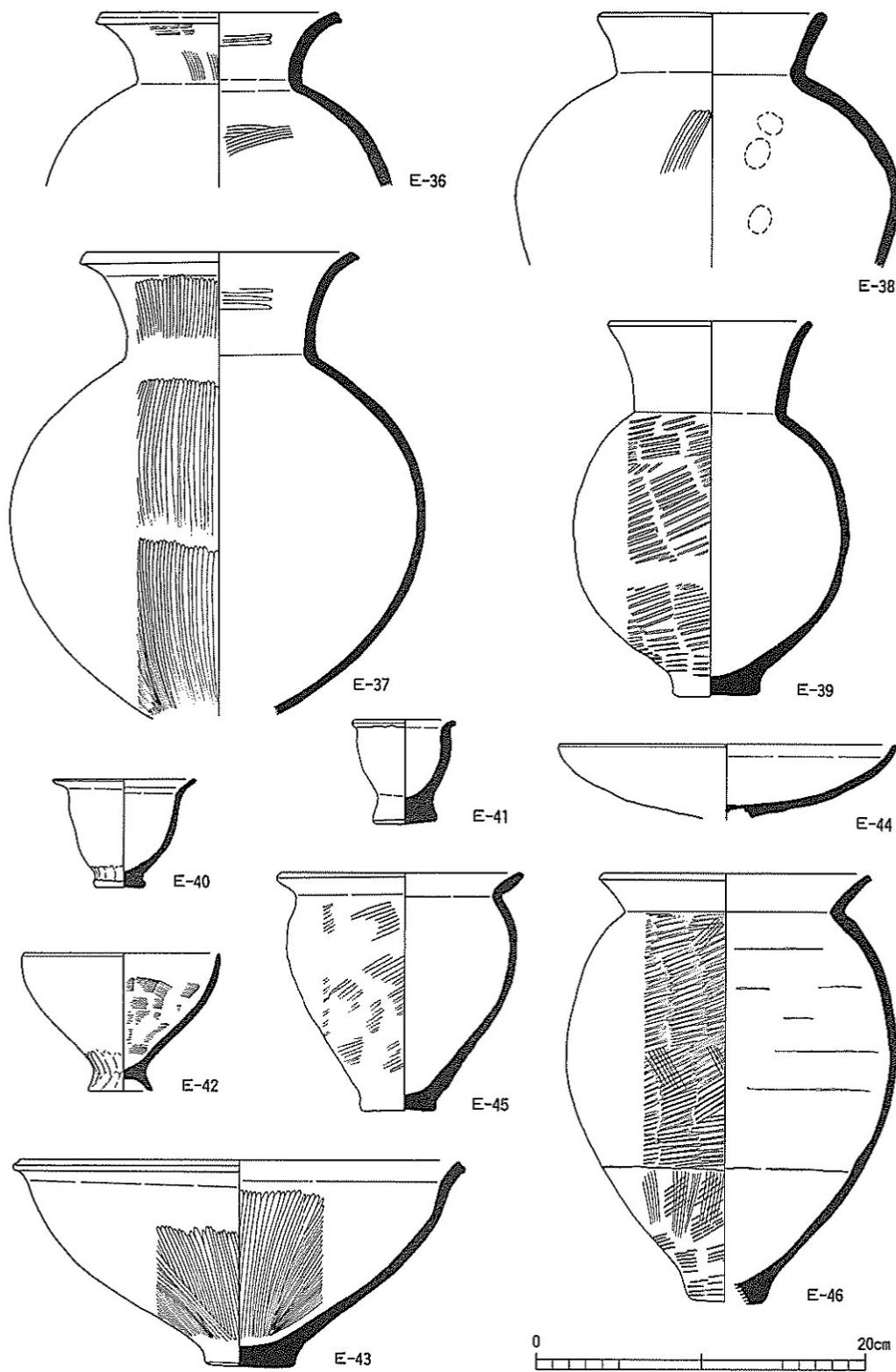


fig.119 E トレンチ E SD0906出土遺物

120 E-48) を出土した。

E S K0907 (fig.120) は 2 G249で検出した楕円形の土坑である。北半部は調査区域外に続く。幅は1.35m、検出長は1.2m、深さは0.4mを測る。壁面はほぼ垂直であり、底部は平坦である。埋土は、大きく2層に分けられ、上層が黒色粘土であり、下層が黒灰色土と黒灰砂のブロックである。遺物は弥生時代中期の土器 (fig.120 E-49) を出土した。

E S K0908 (fig.120) は 2 F・G250・251で検出した長方形の土坑である。幅は1.6~1.8m、長さは3.9m、深さは0.35mを測る。形状は、壁面がほぼ垂直であり、底部が平坦であることから箱形を呈する。埋土は、大きく3層に分けられ、上層が厚さ0.1mの黒色粘土であり、中層が厚さ0.15mの黒灰色土であり、下層が厚さ0.1mの黒灰色土と青灰色微砂のブロックである。遺物は弥生時代中期の土器 (fig.120 E-47) の上半部を出土した。

E S K0909は 2 E251で検出した楕円形の土坑である。長径は1.3m、短径は1.0m、深さは0.2mを測り、浅い皿状を呈する。埋土は黒色粘土である。遺物は弥生時代中期と後期の土器片を出土した。

E S K0910は 2 E252で検出した楕円形の土坑である。長径は1.3m、短径は0.8m、深さは0.2mを測り、浅い皿状を呈する。埋土は黒色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E S K0911は 2 E252で検出した楕円形の土坑である。長径は0.9m、短径は0.5m、深さは0.2mを測り、浅い皿状を呈する。埋土は黒色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E S K0912 (fig.121) は 2 G257で検出した長方形の土坑である。幅は2.5m、長さは3.1m、深さは0.55mを測る。形状は、壁面がほぼ垂直であり、底部が平坦であることから箱形を呈する。埋土は、大きく3層に分けられ、上層西半が厚さ0.2mの黒色粘土と厚さ0.15mの暗灰色粘土であり、上層東端が厚さ0.1mの暗青灰色土と厚さ0.25mの黒灰色粘土であり、下層が厚さ0.2mの灰色粘土である。西端部は掘りすぎである。遺物は弥生土器の破片を出土した。

E S K0913 (fig.121) は 2 G257・258で検出した長方形の土坑である。E S K0912の南に平行して並んでいる。幅は2.5m、長さは2.9m、深さは0.5mを測る。形状は、壁面がほぼ垂直であり、底部が平坦であることから箱形を呈する。埋土は、4層に分けられ、上層が厚さ0.2mの黒色粘土であり、以下、厚さ0.1mの暗灰色土、厚さ0.15mの暗灰色土、厚さ0.05~0.15mの灰色粘土である。第2層目は西半部にしかない。遺物は弥生土器の破片を僅かに出土しただけである。

E S K0914 (fig.121) は 2 G258で検出した楕円形の土坑である。長径は1.5m、短径は0.7m、深さは0.2mを測り、浅い皿状を呈する。埋土は黒色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E S K0915は 2 G258・259で検出した楕円形の土坑である。長径は北東から南西方向を指している。E S K0912・13とは方向が異なっている。E S K0914・15に切られている。長径は2.6m、短径は2.0m、深さは0.4mを測る。壁面はほぼ垂直であり、底部は平坦である。埋土は、大きく2層に分けられ、上層が厚さ0.2mの黒色粘土であり、下層が厚さ0.2mの黒灰色土と青灰色微砂のブロックである。遺物は弥生時代中期の土器を出土した。

E S K0916は 2 G258・259で検出した長方形の土坑である。幅は0.8m、検出長は1.4m、深さ

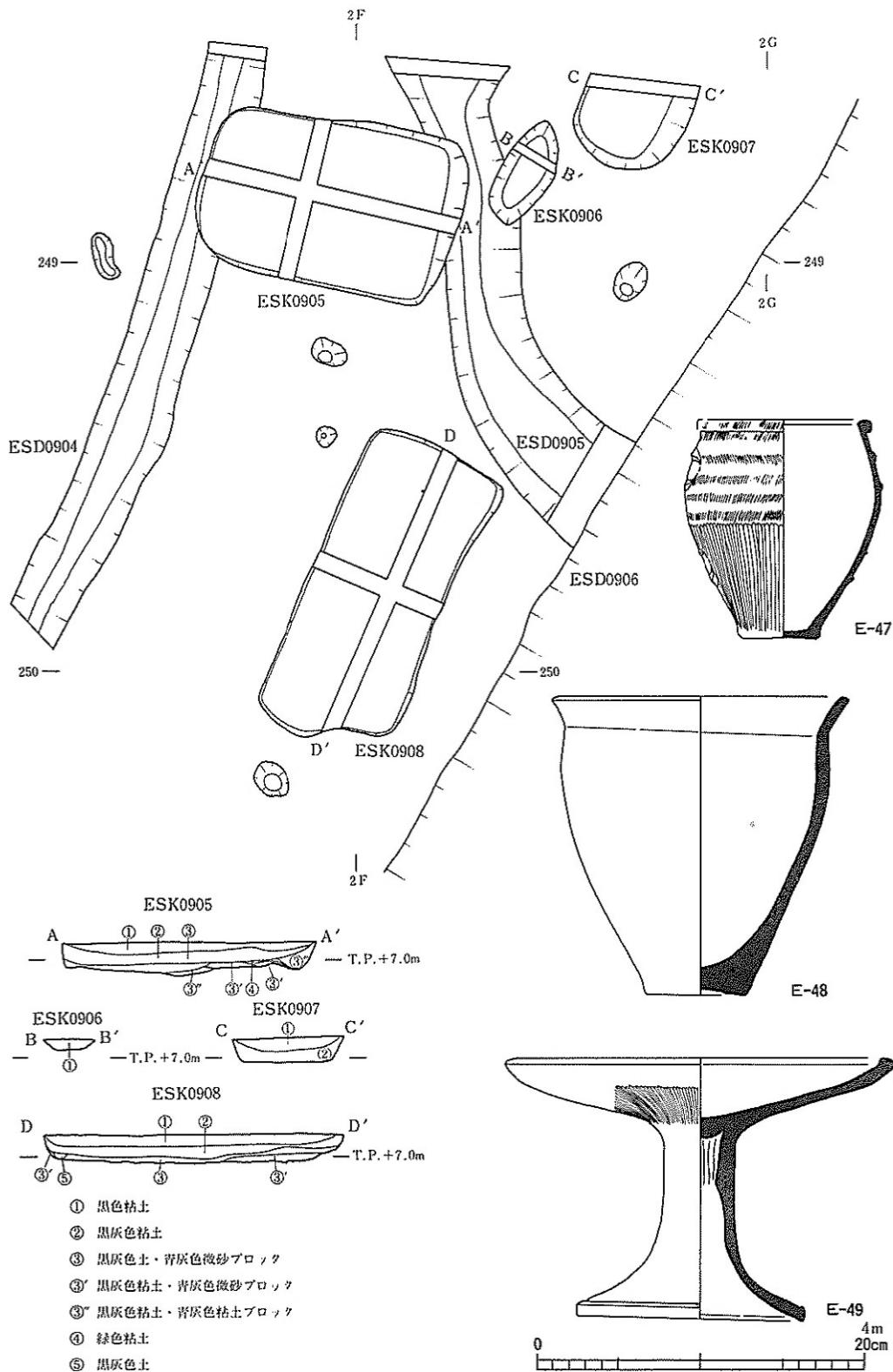


fig.120 E トレンチ E SK0905・0906・0907・0908埋土断面・出土遺物

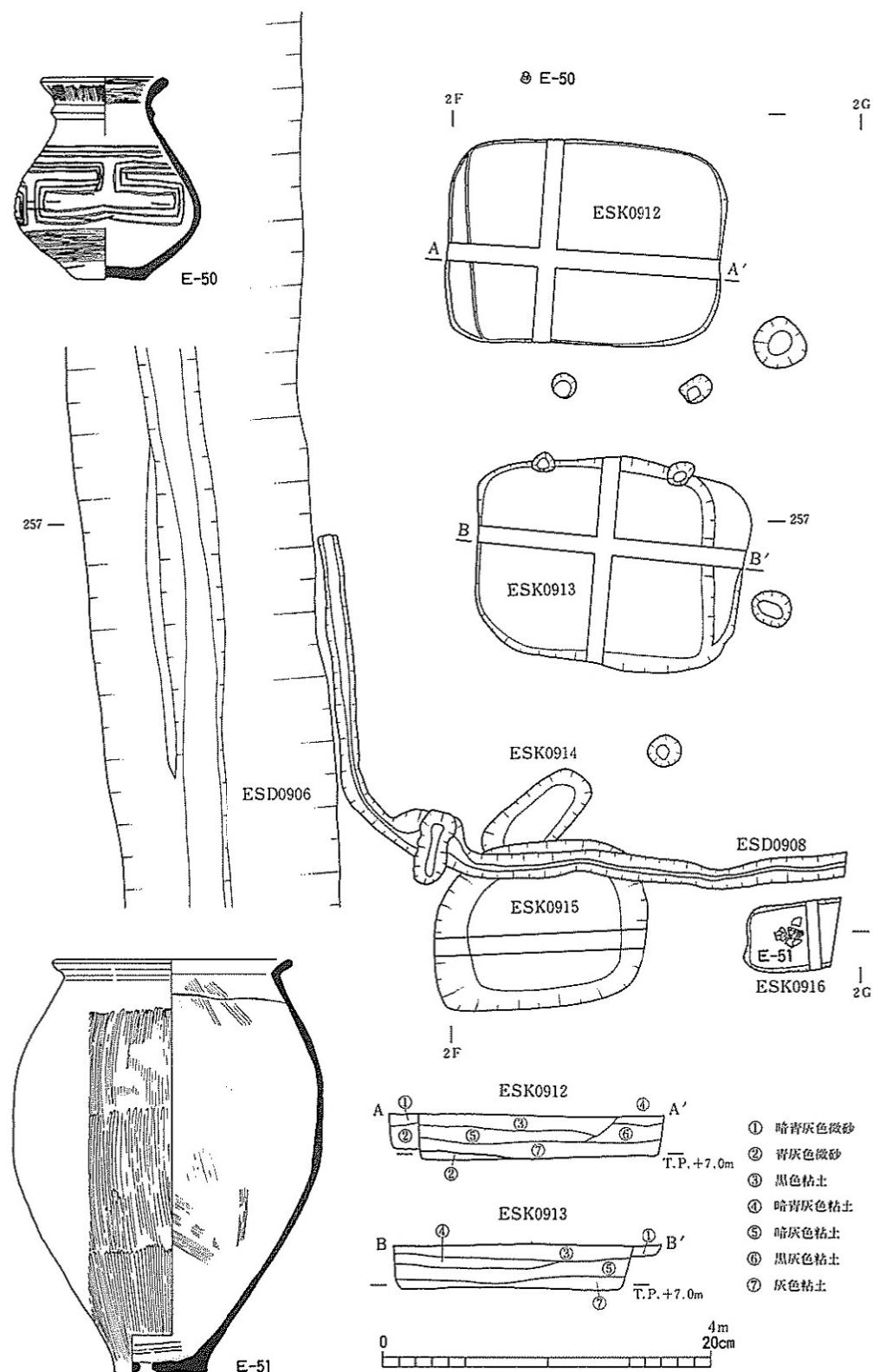


fig.121 Eトレーニチ E S K0912~16平面・断面、E S K0916暗青灰色微砂出土遺物

は0.2mを測り、浅い皿状を呈する。埋土は黒色粘土である。遺物は弥生時代中期の土器（fig.121 E-51）を出土した。

E Pit0901は2D249で検出した不整円形のピットである。径は0.35～0.5m、深さは0.15mを測る。埋土は黒灰色土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E Pit0902～5は2D249・250で検出した不整円形のピットであり、E SK0901の周りに約2.8mの間隔で四角く並んでいる。径は0.3～0.4m、深さは0.3mを測る。埋土は黒色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E Pit0906は2D249で検出した円形のピットである。径は0.5m、深さは0.2mを測る。埋土は黒灰色土である。遺物は弥生時代中期～後期の土器の底部が倒立して出土した（PL.143下）。

E Pit0907～10は2E・F249・250で検出した不整円形のピットであり、E SK0903の周りに点在している。径は0.25～0.6m、深さは0.15mを測る。埋土は黒灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E Pit0911～14は2F250・251・2G251で検出した不整円形のピットであり、E SK0908の周りに点在している。径は0.25～0.6m、深さは0.1～0.5mを測る。埋土は黒灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E Pit0915・6は2H251で検出した円形のピットであり、E SD0906の東に位置している。径は0.4～0.5m、深さは0.2mを測る。埋土は黒灰色土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E Pit0917・8は2F253で検出した円形のピットであり、E SD0906の西に位置している。径は0.3～0.4m、深さは0.2mを測る。埋土は黒灰色土である。遺物はほとんど出土しなかった。

E Pit0919は2E256で検出した橢円形のピットであり、E SK0906の西に位置している。径は0.35～0.5m、深さは0.1mを測る。埋土は黒灰色土である。この上には弥生時代後期の土器が一面に散乱していた。

E Pit0920～28は2F258・2G257・258で検出した不整円形のピットであり、E SK0913の周りに点在している。径は0.25～0.6m、深さは0.1～0.25mを測る。埋土は黒灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

以上が弥生時代中・後期に遺構である。ただ、E SB0901は遺物を観ても古墳時代であり、この面で検出することは不自然である。どうも、埋土が黒っぽかったので、第8面で見落とした遺構のようである。このことは第9層を掘削していく途中で土器が出土したことからも十分に考えられる。また、E Pit0902～05は方形に並んでおり、孤状になった溝E SD0902、炭化物の入ったE SK0901、中・後期の土器を出土したE SK0902と組み合わせて竪穴住居になるのかも知れない。土坑の大部分は中期の遺構である。E SD0905は後期の土器を大量に出土するが、中期の土器もあり、中期に掘削された可能性は十分にある。この溝から出土した土器片がE SB0902やE SK0906で出土した土器片と接合されるものがある。土坑と土坑で接合される破片を出土してい

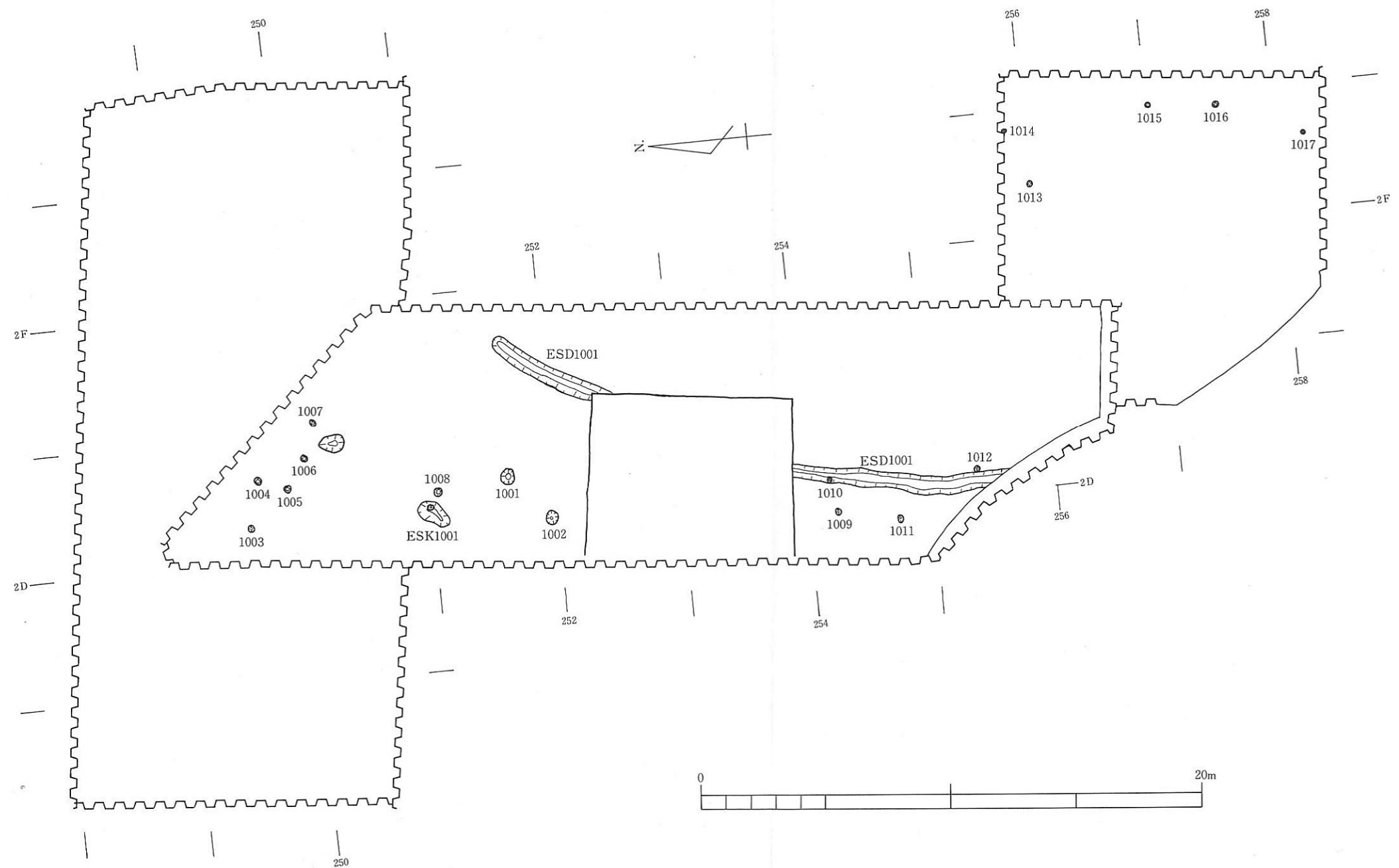


fig.122 E トレンチ 第10面(縄文時代晩期・弥生時代前期遺構面)

る例もある。方形の土坑は、E S D0906に近い場所に造られており、溝と関係の深い用途が考えられる。

第10層（縄文時代晚期・弥生時代前期遺物包含層）

灰青色の微砂層である。厚さは0.15~0.25mを測る。この層の上半部は第9層の影響を受けて僅かに黒味がかっている。遺物は縄文時代晚期と共に弥生時代前期の土器を僅かに含んでいるが、完形品（fig.121 E-50）も出土している。

第10面（縄文時代晚期遺構面、fig.122）

弥生時代の遺構面であった第10層の青灰色微砂を除去すると、北端でT.P.+7.3m南端でも同じくT.P.+7.3mのほぼ水平な灰青色粘土層が現れた。ただ、第7層の粘土層よりも僅かに砂まじりであった。この面では、溝、土坑、小穴を確認した。

E S D1001は2 F 252から始まり南南西に伸び、弯曲しながら南へと向きを変え、2 E 258で調査区域外へ続く溝である。幅は0.5~0.8m、深さは0.15~0.2mを測り、埋土は黒灰色粘土であった。遺物は縄文時代の土器片を検出した。E S K1001は2 E 252・3にまたがる土坑である。幅は0.8m、長さは1.4m、深さは0.3mを測り、ほぼ橢円形を呈する。埋土は黒灰色粘土であったが、E S D9001よりも僅かに砂が混じっている。遺物は検出し得なかった。

E Pit1001・2は2 E 253で検出したほぼ円形のピットである。直径は0.4~0.6m、深さは0.15~0.2mを測る。埋土は黒灰色粘土であった。遺物は検出し得なかった。

E Pit1003~1017はトレンチ部のE S D1001の西側と3 E グリッドの東側を中心に点在する円形のピットである。直径は0.15~0.25m、深さは0.15~0.2mを測る。埋土は青灰色粘質土であり、砂っぽい。遺物は検出し得なかった。

この面を縄文時代晚期遺構面としたのは、E S D1001で検出した土器から決めた。しかし、2 G 258で検出した壺（E-50）は遺構からではなく、第10層の中に単独で埋もれていたものである。第10層がこの面に対する遺物包含層であるというになると、第10面は縄文時代晚期に限定されず、弥生時代前期にまたがる面の可能性がある。

第11層

灰青色の粘土である。厚さは0.3~0.4mを測る。第7層に比べると、あまり均質ではない。遺物は全く出土しなかった。

第11面

第11層を除去すると青灰色微砂層が現れた。北端でT.P.+6.95m、南端でT.P.+7.0mを測る。緩やかに北に向かって傾斜しているが、比較的平坦な面である。遺構は確認し得なかった。

第12層

青灰色の微砂層である。厚さは0.45～0.55mを測る。第9層とよく似ている。遺物は全く出土しなかった。

第12面

第12層を除去すると紫黒色粘土層が現れた。北端でT.P.+6.455m、南端でT.P.+6.5mを測る。第11面と同じように緩やかに北に向かって傾斜しているが、比較的平坦な面である。遺構は確認し得なかった。

第13層

黒褐色の粘土層である。厚さは0.05～0.1mを測る。遺物は全く出土しなかった。

第13面

第13層を除去すると黄白色粘土層が現れた。北端でT.P.+6.35m、南端でT.P.+6.4mを測る。第11・12面と同じように、緩やかに北に向かって傾斜しているが、比較的平坦な面である。遺構は確認し得なかった。

基本的にはこの面までを調査するということになっていた。しかし、過去の調査や（その3）調査区で旧石器時代の遺物がこの層から出土しているようなので、部分的に調査を行うことにした。

第14層

白色の粘土層である。厚さは0.2m前後で次第に砂れきやシルト層に変化していく。この層までを調査の対象としたが、遺物は全く出土しなかった。

以上が縄文時代晚期以前の層と面であるが、人間の生活の痕跡は何も見出せなかった。（藤沢）

第7章 Fトレンチの調査

調査に当たっては、Eトレンチと同じように、現在の表土層を第1層とし、その下面を第1面として調査することにし、順次土層番号と面番号をつけていった。ただし、同一条件のもとで形成されたと考えられる土層は一纏めにしたものもある。遺構の略号、番号もEトレンチと全く同じである。

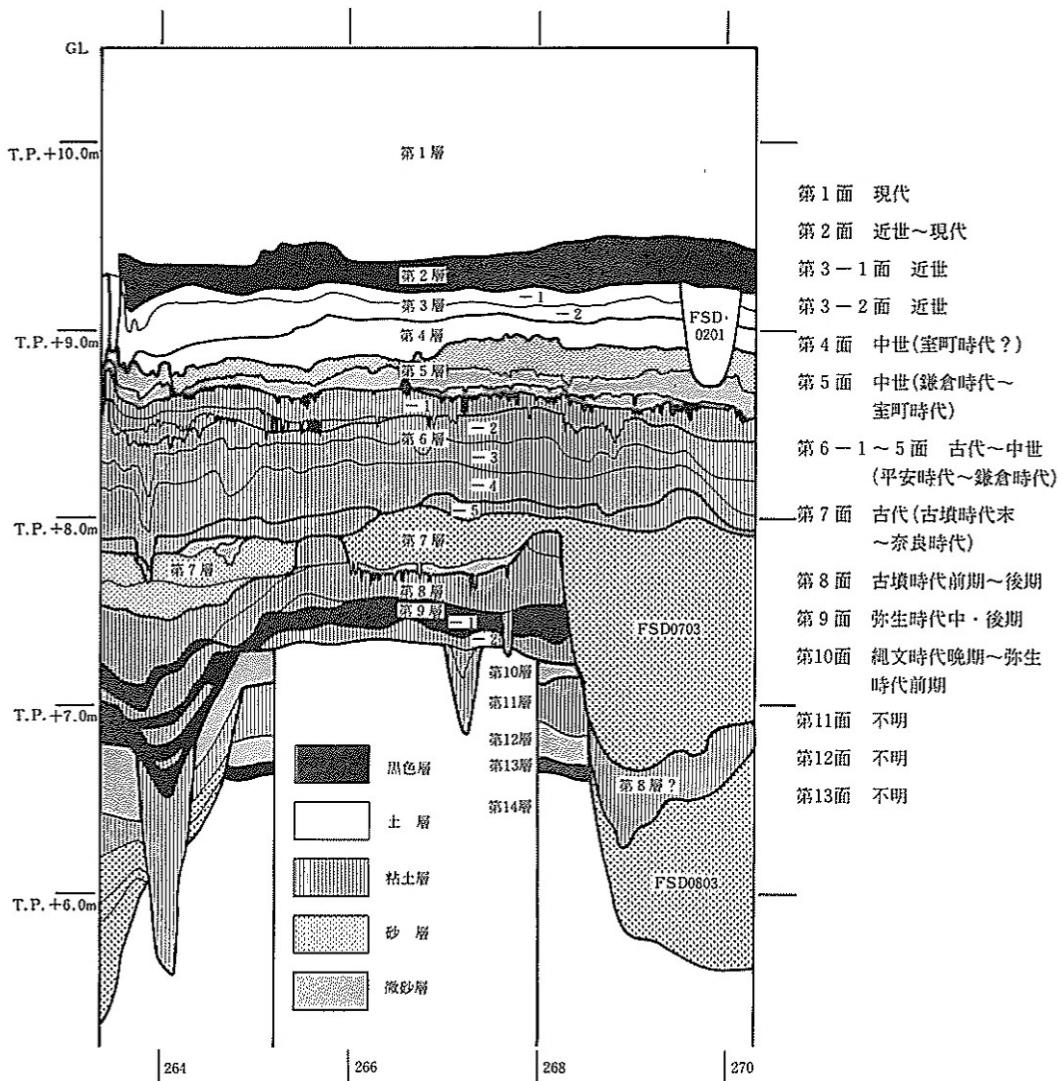


fig.123 Fトレンチ 土層断面模式図

現地表面

現地表面はT.P.+0.5mを測る。トレンチ内部の東寄りに長軸に平行して中央環状線の雨水排水用の溝がある。幅は約1.5m、深さは、ヘドロが溜まっていてよくは解からないが約1m位と思われた。

第1層（現代遺物包含層）

バックホーにより掘削したが、ほとんどが盛り土である。これは府道中央環状線建設時のものと考えられる。厚さは1.0~1.15mを測る。各グリッドの道路に近い部分には山土があり、道路建設時の路床の入れ替えが行われている。E地区とF地区の間には地下鉄の谷町線が走っており、この時の盛土もあると考えられる。

第1面（現代遺構面）

北端でT.P.+9.4m、南端ではT.P.+9.45mとなっている。ほぼ全面が灰黒色土である。この面での遺構は無い。現地表面から掘り込まれた排水用の溝の底部を検出した。深さ0.6~0.7mを測り、最も深い部分でT.P.+8.9mを測る。ただ、排水用の溝は北では僅かに浅くなっている。

第2層（近世～現代遺物包含層）

第1面を形成している灰黒色土であり、中央環状線建設以前の水田耕作土である。厚さは0.1~0.25mを測る。近世から現代までの遺物を主に含んでいるが、希に須恵器や瓦器の破片もある。

第2面（近世～現代遺構面）

北端でT.P.+9.3m、南端でT.P.+9.2mを測る。263ラインから北が高くなっている。全面が黄色土である。この面では、溝を1条と落ち込みを検出した。

F S D0201は2 G270・271から2 A270・271で検出した真っ直ぐ東西に伸びる溝である。幅は3.0~3.2m、深さは0.5mを測る。断面は逆半円形をしている。埋土は、下から灰色粘土、青灰色粘土、こぶし大の礫、青灰色粘土、灰色粘土と青灰色粘土と黒色粘土ブロックである。

第3-1層（中世～近世遺物包含層、Eトレンチ第4-1層）

黄灰色土である。厚さは0.05~0.1mを測る。遺物は中世の瓦器の破片と共に近世の染め付けが出土している。Eトレンチで確認した第3層は当トレンチでは確認できなかった。

第3-1面（近世遺構面）

北端でT.P.+9.2m、南端でT.P.+9.15mを測る。ほぼ水平な面であり、全面が灰色土である。遺構は溝と落ち込み等を検出した。

第3-2層（近世遺物包含層、Eトレンチ第4-1層）

灰色土である。厚さは0.05~0.25mを測る。遺物は中世の瓦器の破片と近世の染め付けが出土している。

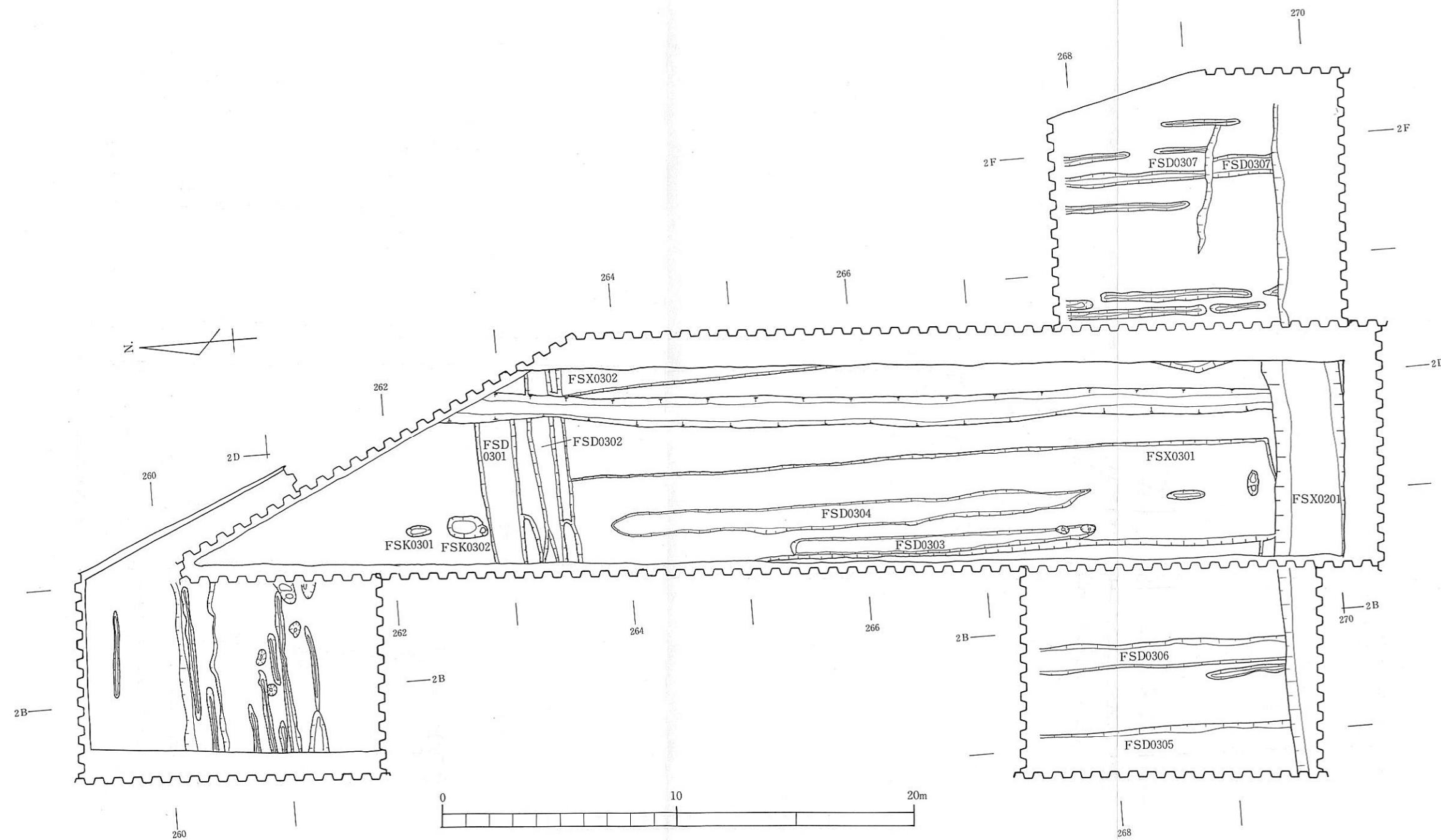


fig.124 F トレンチ 第3-2面 (近世遺構面)

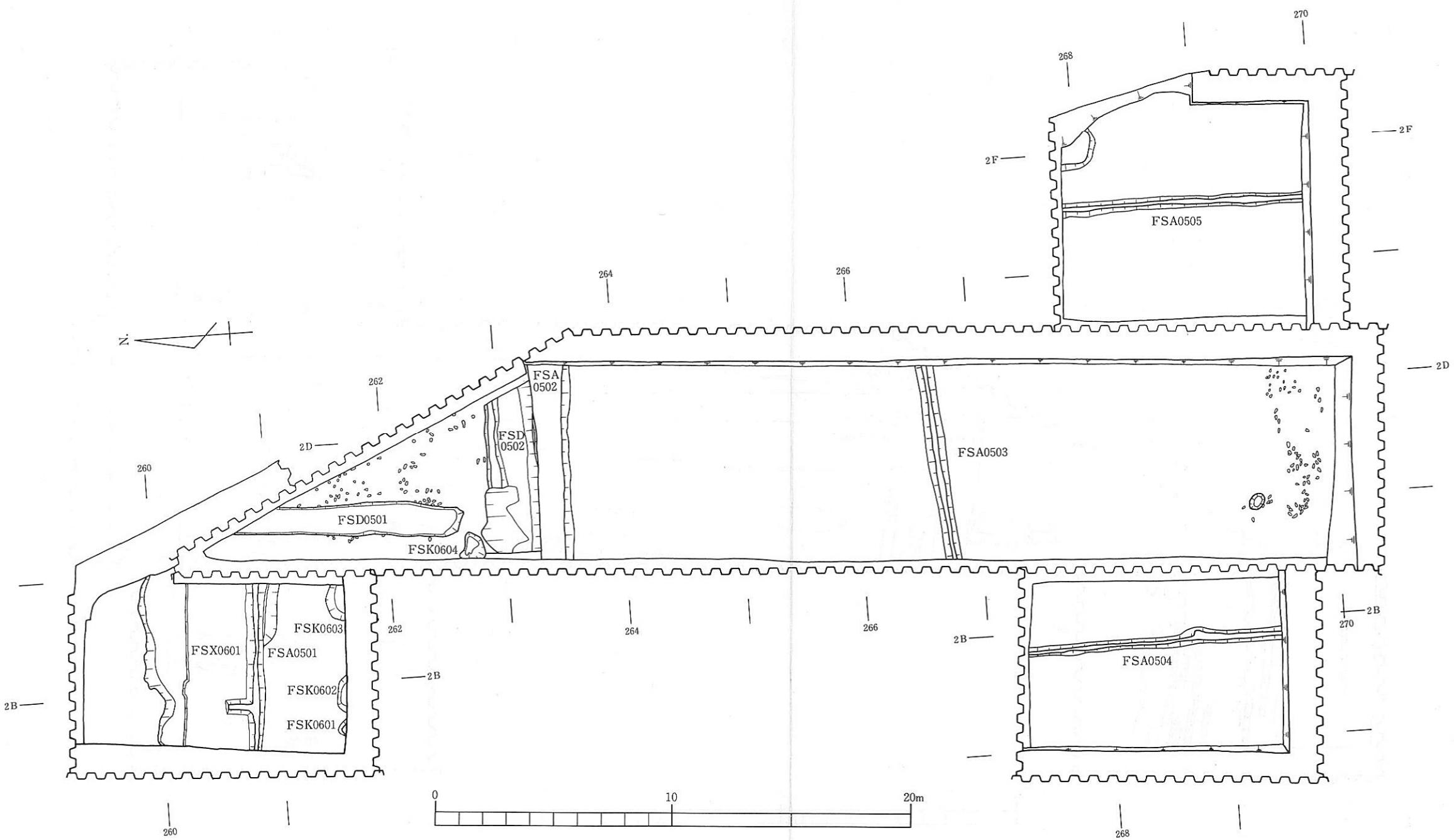


fig.125 F トレンチ 第5面 (中世遺構面)

第3－2面（近世遺構面、fig.124）

北端でT.P.+9.0m、南端でT.P.+9.0mを測る。ほぼ水平な面であり、全面が黄灰色土である。遺構は溝、土坑、落ち込み等を検出した。

F S D0301は263ライン上を東西にトレンチを横断する溝である。幅は1.4～2.2m、深さ0.1～0.2mを測る。底部は平坦ではなく、数条の溝状になっており、中央部が最も深い。埋土は淡褐色粗砂である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S D0302はF S D0301のすぐ南を畔状の高まりを挟んで平行して東西に伸びる溝である。畔状の高まり上部での溝幅は0.8～1.1m、深さ0.3～0.4mを測る。断面の形状はU字型である。埋土は淡褐色粗砂と褐色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。畔状の高まりの幅は下端で0.6～1.3m、上端で0.3～0.5m、高さは0.15mを測る。高まりは地山を削り出している。

F S D0303は2 C 268から2 C 266まで南北に真っ直ぐ伸びる溝である。F S X0301の西辺に沿っている。幅は0.5～0.8m、深さは0.1mを測る。埋土は灰色土である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S D0304は2 D 268から2 D 264まで南北に真っ直ぐ伸びる溝である。F S D0303の東で、約0.5mの間隔をあけて平行している。幅は0.6～1.1m、深さは0.1mを測る。埋土は灰色土である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S D0305は2 A 270から2 A 268まで南北に真っ直ぐ伸びる溝である。F S D0303・4の西で平行している。幅は0.8～1.0m、深さは0.25mを測る。埋土は、上層が灰色土で、下層が灰褐色土である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S D0306は2 B 270から2 B 268まで南北に真っ直ぐ伸びる溝である。F S D0305の東で平行している。幅は0.8～1.0m、深さは0.1mを測る。埋土は灰色土である。遺物はほとんど出土しなかった。

この他に、2 B 261から2 C 261に東西方向、2 E～2 G 268から2 E～G 271に南北方向の小規模な溝を多数検出した。幅は0.1～0.2m、深さは0.05～0.1mを測る。埋土は灰色土である。一般的に鋤跡と呼ばれている類いの溝である。

F S K0301～0305は調査区域内に点在する土坑である。規模は、小さなもので幅は0.5m、長さは1.1m、深さは0.1m、大きなもので幅は1.0m、長さは1.5m、深さは0.2mを測る。埋土は、灰色土、茶褐色土の混じった灰色土である。

F S X0301は2 C・D 270から2 C・D 264で真っ直ぐ南北に伸びる長方形の落ち込みである。南端では南西角をF S D0201に切られており、北端はF S D0302の南側にある畔状の高まりになっている。幅は4.4m、長さは29.8m、深さは0.1mを測る。埋土は灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S X0302はF S X0301と同様の落ち込みであり、約4.0mの間隔をあけて東側に平行している。

近世から現代にかけては水田か畠としてずっと利用されてきたようである。それ以外の利用は明らかではない。

第4層（中世遺物包含層、Eトレンチ第5層）

黄褐色土・灰黄褐色土である。トレンチの東壁では北端で途切れているが、西側では更に北へ続いている。厚さは0.1m～0.25mを測る。遺物は中世の瓦器の破片が主で、近世の遺物は含んでいない。

第4面（中世面、Eトレンチ第5面）

北端でT.P.+8.8m、南端でT.P.+8.9mを測る。ほぼ水平な面である。この面にはF S D0201の痕跡がまだ残っているが、現地表面からの排水用の溝の痕跡はなくなった。遺構は全く無い。

第5層（中世遺物包含層、Eトレンチ第6層）

この層は単純な層ではなく、何層もが複雑に堆積している。主として砂、微砂で構成されている。厚さは0.15～0.35mを測る。北よりも南のほうが僅かに厚く堆積している。最上層は灰白色砂であり、下層は青灰色微砂である。遺物は中世の瓦器碗破片を出土している。

第5面（中世遺構面、Eトレンチ第6～4面、fig.125）

北端でT.P.+8.55m、南端でT.P.+8.55mを測る。ほぼ水平な灰白色シルト面である。遺構は畔、溝、土坑等を検出した。

F S A 0501は2 C 261から2 B 261まで伸びる東西方向の畔である。検出長は7.5m、幅は、下端が0.5～0.9m、上端が0.15～0.3m、高さは0.05～0.1mを測る。2 B ライン付近で北に直角に派生する畔があるが、約1.0m伸びて途切れている。畔は、地山を削り出しているのではなく、下層の土を盛って造っている。西端は調査区域外に続くが、東端はトレンチ部では検出していない。トレンチ部では検出に失敗したようである。

F S A 0502は、2 E 264から2 C 264まで伸び、F S A 0501に平行東西方向の畔である。検出長は9.0m、幅は、下端が1.7～2.1m、上端が0.9～1.5m、高さは0.15～0.2mを測る。畔は、地山を削り出しているのではなく、下層の土を盛って造っている。この畔は他の畔に比べると相当大きい。両端は調査区域外に続く。

F S A 0503は、2 E 267から2 E 267まで伸び、F S A 0501・2にほぼ平行する東西方向の畔である。検出長は9.5m、幅は、下端が0.6～0.85m、上端が0.1～0.3m、高さは0.05～0.1mを測る。畔は、地山を削り出しているのではなく、下層の土を盛って造っている。両端は調査区域外に続く。

F S A 0504は、2 B 268から2 B 270まで伸び、F S A 0503に直交する南北方向の畔である。検出長は11.5m、幅は、下端が0.4～0.7m、上端が0.1～0.35m、高さは0.05～0.1mを測る。畔は、地山を削り出しているのではなく、下層の土を盛って造っている。両端は調査区域外に続く。

F S A 0505は、2 F 268から2 F 271まで伸び、F S A 0504に平行する南北方向の畔である。検出長は11.5m、幅は、下端が0.45～0.7m、上端が0.1～0.3m、高さは0.05～0.1mを測る。畔は、地山を削り出しているのではなく、下層の土を盛って造っている。両端は調査区域外に続く。

F S D 0501は2 D 261から2 D 263まで伸びる南北方向の溝である。北端は調査区域外に続くが、南端はF S D 0502の北1.0mで終わっている。検出長は9.5m、幅は1.1～1.3m、深さは0.1mを測る。埋土は茶灰色微砂である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S D 0502は、2 E 2623・4から2 C 263・4まで伸び、F S A 0502の北裾に沿っている。両端は調査区域外に続く。検出長は7.5m、幅は2.0～2.4m、深さは0.1～0.2mを測る。北側の東半部は2段に落ち込んでいる。埋土は茶灰色微砂である。遺物はほとんど出土しなかった。

足跡は2 D 262・263付近と2 C・D 270で集中しているがその他では間ばらである。F S A 0503の南から畔の上を通って北へ歩いている状況がわかるものもある。

第6－1層（中世遺物包含層、Eトレンチ第7－1層）

第5面を形成している灰白色シルトである。北で部分的に青灰色微砂を挟んでいる。厚さは0.1～0.25mを測る。遺物はほとんど出土しなかった。

第6－1面（中世遺構面、Eトレンチ第7－1面）

第5面の水田耕作土である第6－1層を除去した面である。北端で8.5m、南端で8.4mを測る。ほぼ水平な面である。この面では農耕具の痕跡と土坑を検出した。

F S K 0601～04は2 B 262・2 C 262・263に点在する不整円形の土坑である。規模は、小さいもので直径が1.0m、深さが0.15m、大きいもので直径0.7m、深さが0.25mを測る。埋土は茶灰色微砂である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S X 0601はF S A 0501の北約2.5mで確認した畔にはほぼ平行する農耕具の痕跡である。幅は0.2mで深さは0.05～0.1mであった。土を掘り起こしたのではなく、切っただけで農耕具を抜いている。そのため地面に筋だけが認められた。農耕具の先端の形状は方形である。この北1.0～2.0mには高さ0.1mの段があった。

F S A 0502の真下は、下層が0.15m削り残されており、高く台状になっていた。

足跡は全域で多数検出された。

第6－2～4層（中世遺物包含層、Eトレンチ第7－2～4層）

全面に厚く存在するほぼ同色、同質の青灰色粘土であり、僅かな色や質の違いから3層に細分した。厚さは、それぞれ0.1～0.25mを測り、全体では0.5～0.55mをはかる。遺物は中世の瓦器の破片や土釜の破片にまじって古墳時代の須恵器も僅かに出土した。

第6－2～4面（中世面、Eトレンチ第7－2～4面）

中央部が北・南端よりも0.25m前後高くなってしまい、南北に僅かに低くなっていく青灰色粘土面である。遺構は全く検出しなかった。

第6－5層（古代遺物包含層、Eトレンチ第7－5層）

ほぼ全面に堆積している暗灰色粘土である。厚さは0.1～0.2mを測る。遺物は平安時代に遡る黒色土器の破片と共に古墳時代の須恵器も出土した。この層で確認した須恵器は上の層で出土したものほどは磨滅していない。下層の遺物を一緒に取り上げたのかとも考えられる。

第6－5面（古代面、Eトレンチ第7－5面）

ほぼ全面に堆積している砂の面である。北半部が青灰色・灰色であり、南半部が黄灰色・黄褐色である。北端部でT.P.+7.8m、南端部でT.P.+7.9mを測る。遺構はトレンチ中央部で南東か北西に伸びる溝を検出しただけである。

以上が古代から中世にかけてである。明確な遺構は第5面で検出した水田面であり、他にはほとんどない。人間が積極的に生活を営めるような条件になかったことは、厚い粘土層の堆積から十分に考えられる。粘土の堆積が終わった頃に水田として再び利用された。

第7層（奈良時代遺物包含層？、Eトレンチ未確認層）

大きく2層に分けられる。上層は青灰色・灰色・黄灰色・黄褐色砂で、厚さ0.2～0.3mを測る。下層は青灰色微砂で、厚さ0.05～0.2mを測る。遺物は出土しなかった。

第7面（古代遺構面、Eトレンチ第7面、fig.126）

北端でT.P.+7.65m、南でT.P.+7.75mを測る。ほぼ水平な面である。遺構は畔と溝を検出した。

F S A 0701は、2 E 263から2 C 263で検出した、東南東から西北西へ真っ直ぐ伸びる畔である。F S D 0701と平行している。両端は調査区域外に続く。検出長は7.0m、幅は、下端が0.45～0.8m、上端が0.15～0.45m、高さは0.1mを測る。下層の粘土を盛って造っている。

F S A 0702は、2 E 266から2 C 265で検出した、南東から西北へ真っ直ぐ伸びる畔である。両端は調査区域外に続く。検出長は13.0m、幅は、下端が1.5～2.9m、上端が0.85～2.5m、高さは0.1～0.15mを測る。下層の粘土を盛って造っている。幅は広いが、高さがなく、上面は平坦である。2 D 265でこの畔から北東へ直角に派生する畔があり、F S A 0703とした。

F S A 0703は、2 D 265でF S A 0702から直角に北東に派生し2 E 264まで検出した、南西から北東へ真っ直ぐ伸びる畔である。北東端は調査区域外に続く。検出長は6.5m、幅は、下端が0.5～0.6m、上端が0.15～0.3m、高さは0.1mを測る。下層の粘土を盛って造っている。

F S A 0704は、2 E 268から2 C 267で検出した、南東から北西へ真っ直ぐ伸びる畔である。F S A 0702とは僅かに方向が異なっている。両端は調査区域外に続く。検出長は10.5m、幅は、下端が0.6～1.1m、上端が0.15～0.35m、高さは0.1mを測る。下層の粘土を盛って造っている。

F S A 0705は、2 F 268から2 C 270で検出した、北東から南西へ真っ直ぐ伸びる畔である。F S D 0703の北岸肩部に位置している。北東端は調査区域外に続くが南西端はトレンチ部でも少し

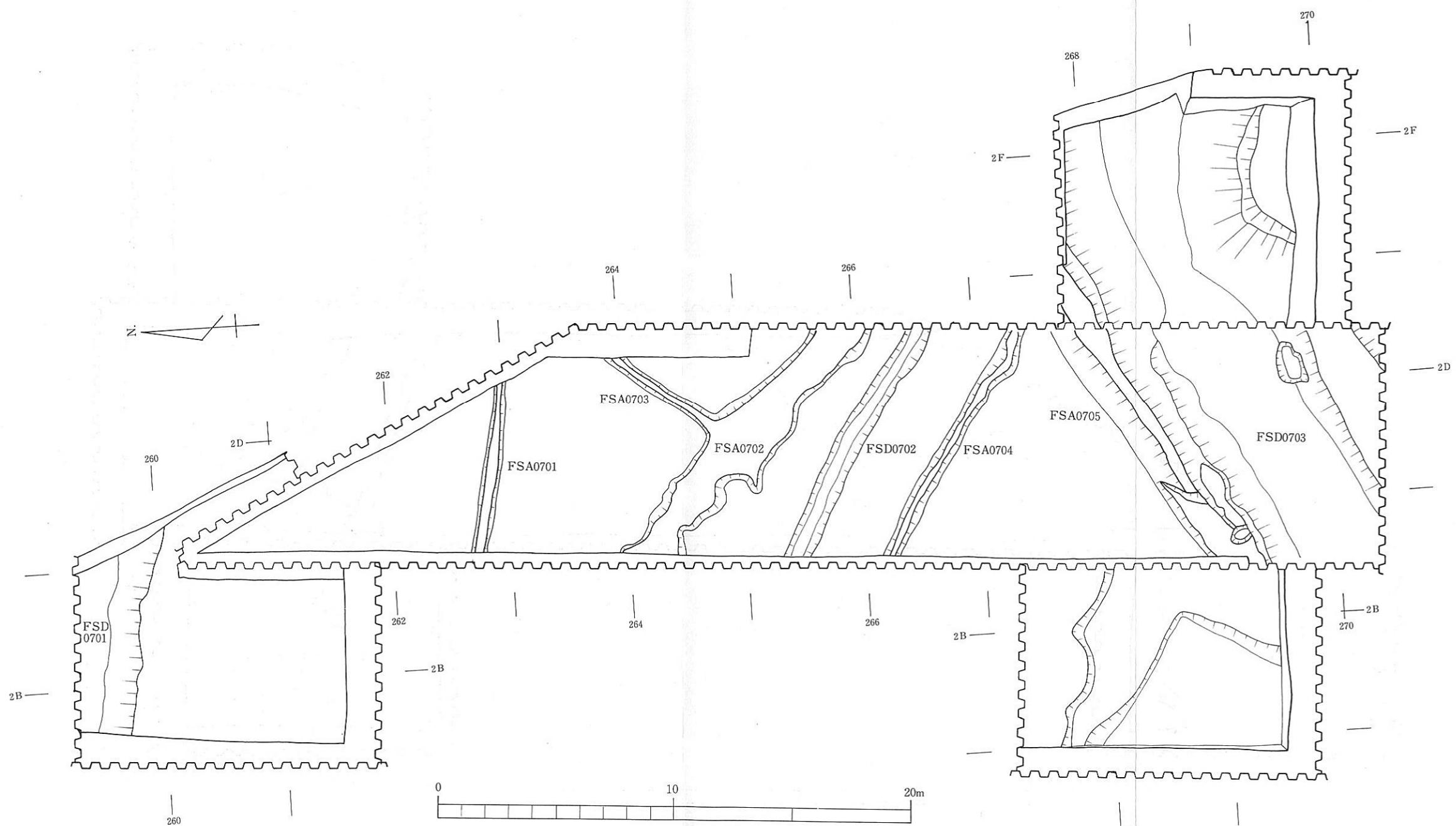


fig.126 Fトレンチ 第7面（古代遺構面）

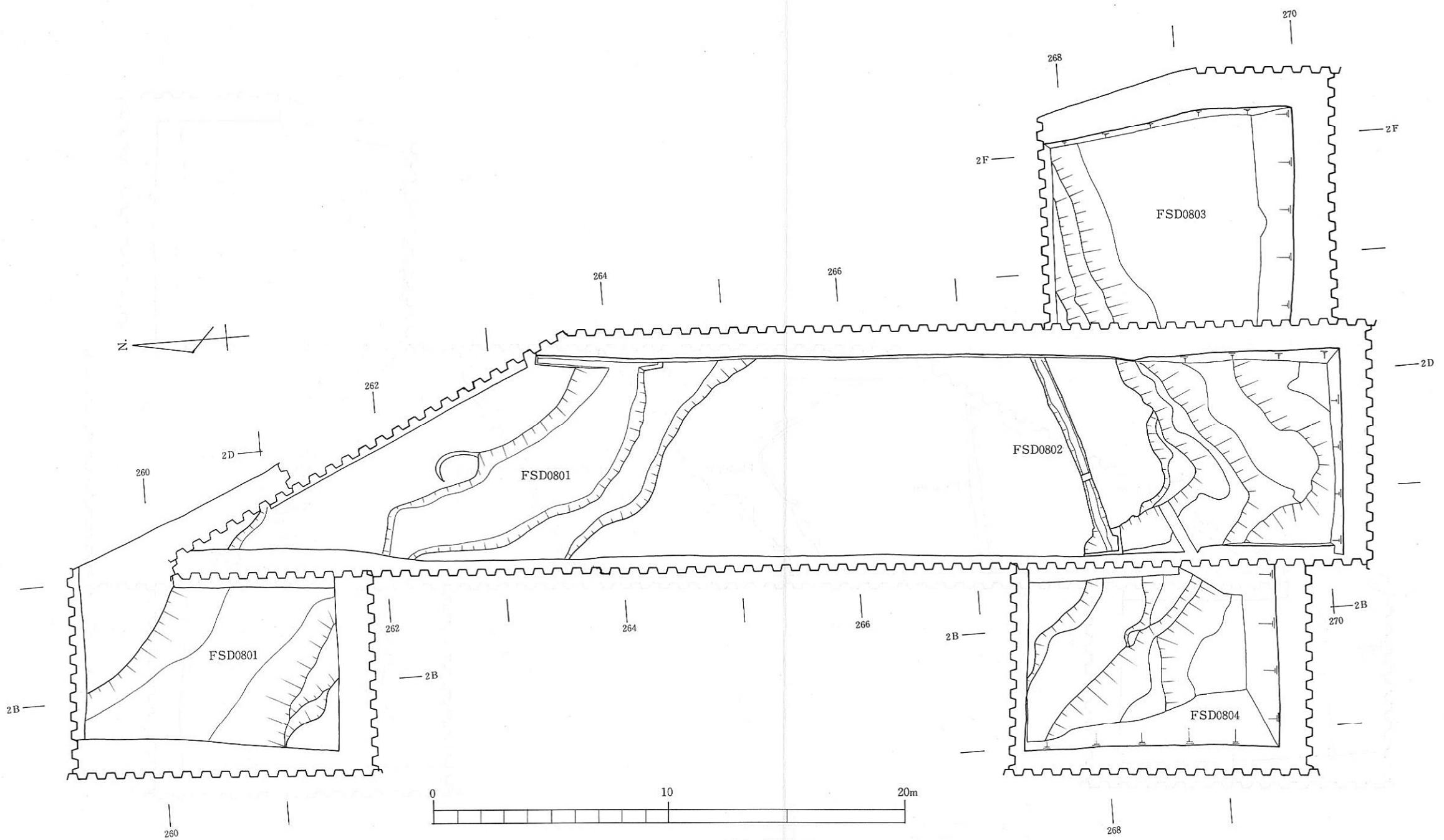


fig.127 F トレンチ 第8面 (古墳時代遺構面)

ずつ低くなっていたため、グリッド部では検出できなかった。検出長は15.0m、幅は、下端が1.5～2.0m、上端が0.5～0.9m、高さは0.1～0.25mを測る。下層の粘土を盛って造っている。

F S D0701は、2 D260から2 B260で検出した、真っ直ぐ東南東から西北西に伸びる溝である。F S A0701と平行している。検出長は8.5m、検出幅は3.0m、深さは0.3mを測る。埋土は灰色砂である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S D0702は、2 E267から2 C266で検出した、真っ直ぐ南東から北西に伸びる溝である。F S A0702・04の間に位置し、F S A0704と平行している。検出長11.0m、幅は0.85～1.2m、深さは0.15～0.2mをはかる。埋土は黄灰色砂である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S D0703は、2 G268～271から2 C270・271で検出した、北東から南西に伸びる川である。検出長は21.5m、検出幅は12.5m、深さは1.2mを測る。埋土は黄灰色・黄色・黄白色・褐色砂礫である。遺物はほとんど出土しなかった。川底は灰色・暗青灰色粘土であり、若干の遺物（fig. 128 F01～03）が出土した。

古墳時代から古代にかけては、水田を営んでおり、生産域である。水田は、長原遺跡から続いてくるもので、この付近が北限のようである。第6～5面で検出した溝は、F S D0702の影響で溝状に窪んでいるのであり、独自の溝ではない。

第8層（古墳時代遺物包含層、Eトレンチ第8層）

茶灰色粘土である。厚さは0.1～0.35mを測る。南端は川によりきられており、北では下がっており、層が厚くなっている。遺物は5世紀後半から6世紀前半の須恵器を出土した。

第8面（古墳時代遺構面、Eトレンチ第8層、fig.127）

黒色粘土層上面で、北端はT.P.+7.4m、南端はT.P.+7.5mを測る。2 E264・265から2 B260・261にかけては、約10.0mの幅で溝状に落ち込んでいるが、全体的には北に向かって緩やかに低くなっている。遺構は溝、川、落ち込みを検出した。

F S D0801は先に説明した溝状の落ち込みである。

F S D0802は、2 E268から2 C269で検出した、東北東から西南西に真っ直ぐ伸びる溝である。検出長は10.0m、幅は0.4～0.6m、深さは0.1～0.15mを測る。埋土は灰黒色粘土である。遺物は土師器の高杯（fig.128 F-04）が出土した。

F S D0803は、2 G268～271から2 C270・271で検出した、北東から南西に伸びる川である。南西端でF S D0804を切っている。検出長は21.5m、検出幅は12.5m、深さは1.9mを測る。埋土は黄白色・淡褐色・褐色砂礫である。遺物は須恵器の壺等（fig.128 F-06～12）が出土した。川底は淡緑白色粘土である。

F S D0804は、2 C271から2 A268～270で検出した、南東から北西に伸びる川である。南東端でF S D0803に切られているが、深いため川底は残っている。検出長は17.0m、検出幅は9.0

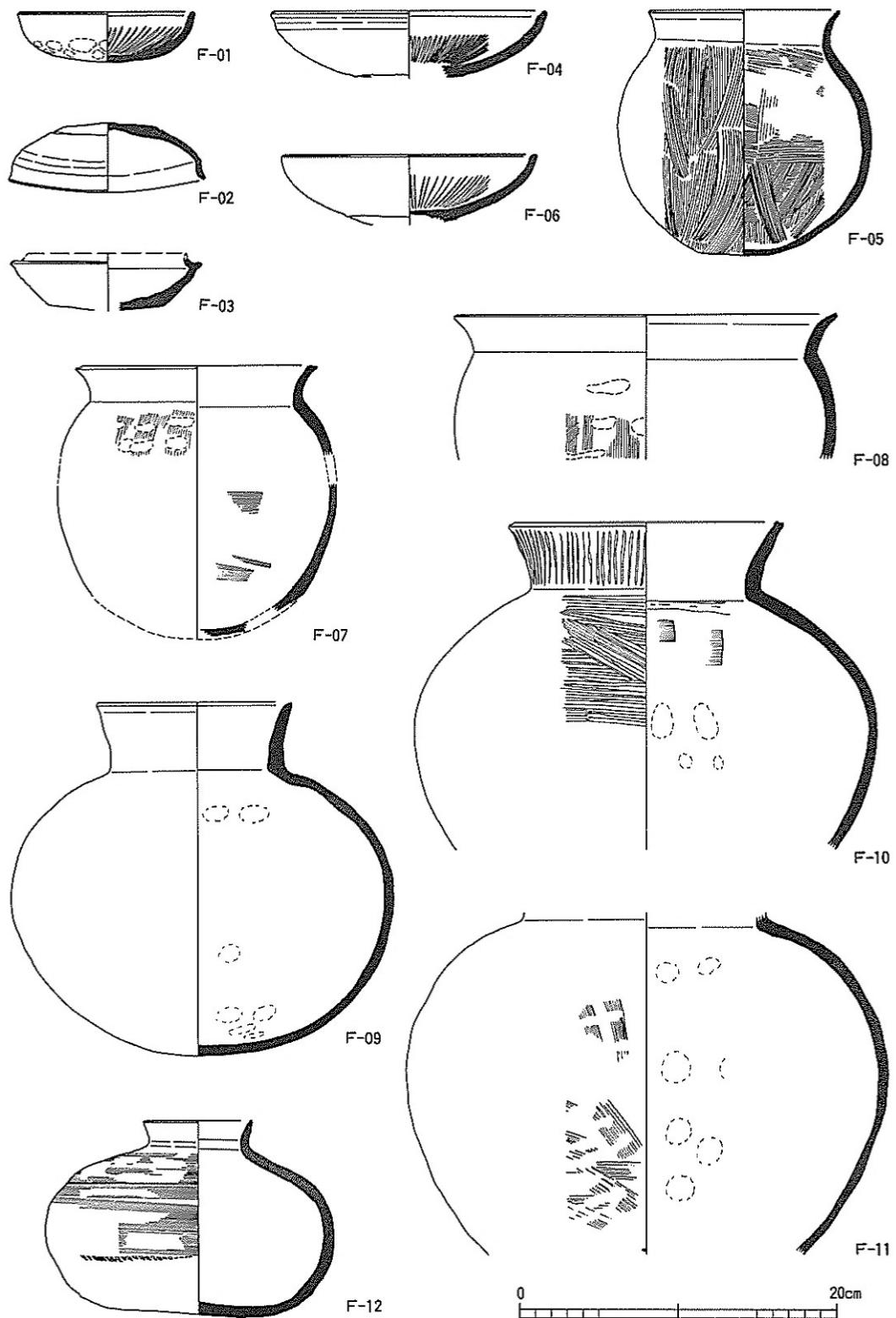


fig.128 F トレンチ F S D0802・0803出土遺物

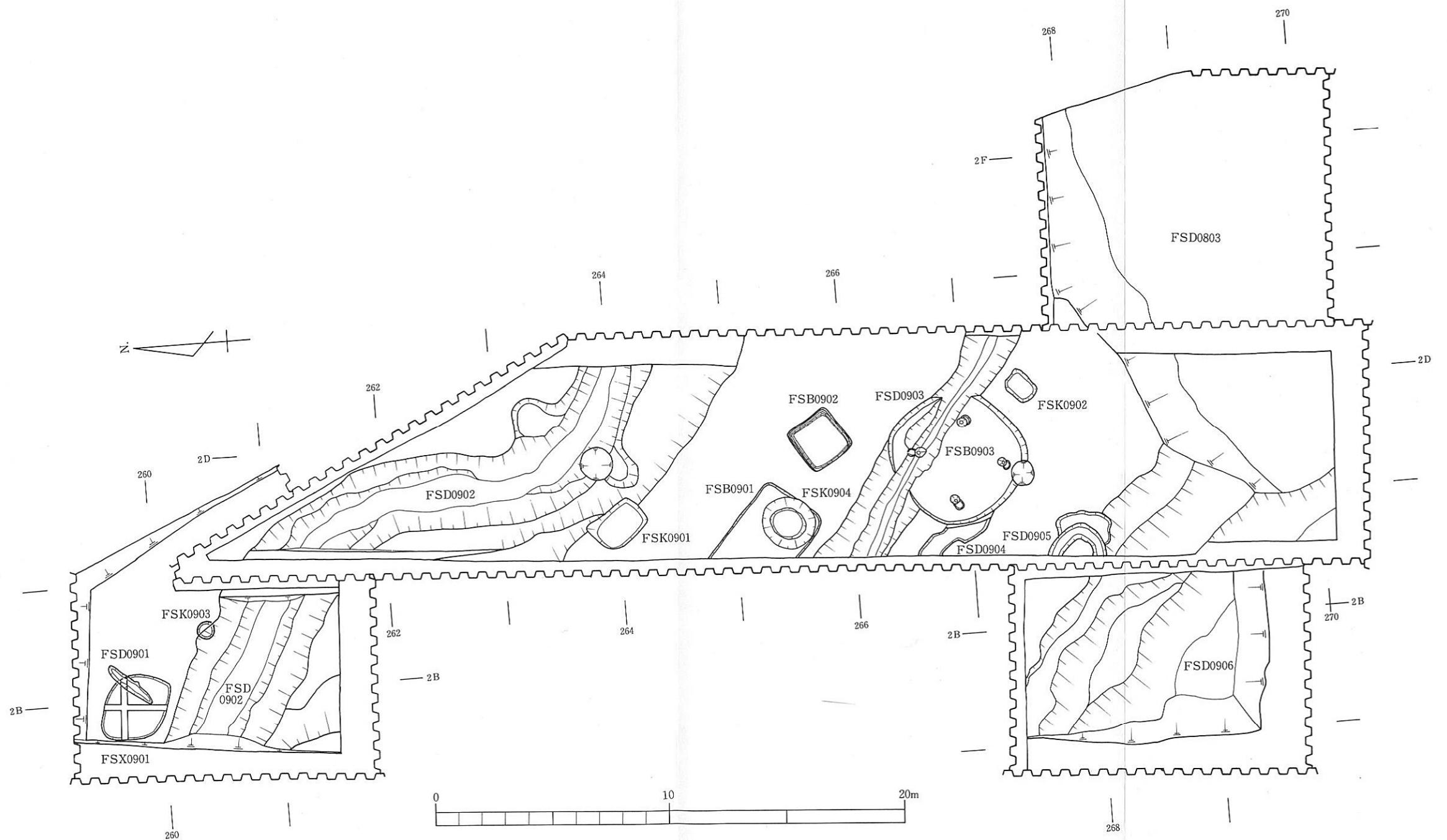


fig.129 F トレンチ 第9面 (弥生時代中・後期遺構面)

m、深さは2.5mを測る。埋土は灰色・青灰色砂礫である。遺物はほとんど出土しなかった。川底は淡緑白色粘土である。

F S X 0801は、2 E 267でバラバラに割れた土師器 (fig.128 F-05) が1個体出土したもので、遺構ではない。

この面には明確な遺構は溝が1条あっただけであり、他は自然の遺構である。人間の生活に直接密着したような場ではなかったのであろう。

第9層（弥生時代中・後期の遺物包含層）

黒色の粘土層であるが、僅かに砂まじりである。南端は川によって切られている。北端では下層が極端に低くなっているため、何層かに分かれてその間に青灰色や灰色の粘土が堆積している。厚さは0.1~0.25mを測るが北端部では間層を含めると0.7mになるところもある。弥生時代中・後期の遺物を大量に含んでいる。

第9面（弥生時代中・後期遺構面、Eトレチ第9面、fig.129）

青灰色微砂・灰色粘土・黄色粗砂から成る面で、北端でT.P.+7.25m、南端でT.P.+7.25mを測る。2 E 264・265から2 B 260・261までは溝状に落ち込んでいる。遺構は竪穴住居、溝・土坑等を検出した。

F S B 0901 (fig.130) は、2 C 265・266・2 D 266で検出した、南東から北西に長い方形の竪穴住居である。検出長は4.0m、幅は3.0m、深さは0.1mを測る。柱穴は検出しなかった。炉跡も検出しなかった。埋土は黒色粘土である。遺物は弥生時代の土器破片を出土しただけである。この遺構は、F S K 0904の土坑の上に掘り込まれていたため、間違って土坑と一緒に掘削してしまった。土坑を掘削中に焼土面を確認した。

F S B 0902 (fig.130) は、2 D 266で検出した、方形の竪穴建物である。軸はF S B 0901とは異なっており、最も東向きの辺が東南東に向いている。各辺の長さは2.0~2.1m、深さは0.05mを測る。壁の裾には幅0.05~0.1m、深さ0.05mの溝が巡っている。埋土は黒色粘土である。柱穴、炉跡は検出しなかった。遺物はほとんど出土しなかった。

F S B 0903 (fig.130) は、2 D 267・268で検出した、円形の竪穴住居である。直径は5.0~5.5m、深さは0.2~0.3mを測る。埋土は黒色砂と黒色粘土である。炉跡は検出しなかったが、柱穴は4ヵ所で各2個を検出した。直径は0.4~0.5m、深さ0.45~0.55mを測る。柱穴の埋土は2種類あり、黒色粘土、青灰色微砂と黄白粘土粘土のブロックである。柱穴は必ず重なっており、黒色粘土を埋土とする柱穴が上になっている。黒色粘土を埋土とする柱穴の断面はV字形であり、もう一方の柱穴は断面がU字形である。この遺構は、明らかに、F S D 0903埋没後その上に造られており、溝内埋土が住居の下だけ青灰色微砂と黄色粗砂ブロックで埋まっていた。これも調査の失敗例であり、溝を掘削中に確認・検出したものである。

F S D 0901は、2 C 260で検出した、北東から南西に伸びる溝である。長さは2.4m、幅は0.5m、深さは0.1mを測る。埋土は黒色粘土で、遺物はほとんど出土しなかった。

F S D 0902 (fig.131) は、2 E 264・265から2 B・C 261で検出した、東南東から西北西に蛇行しながら伸びる溝である。両端は調査区域外に続く。検出長は27.0m、幅は2.7~4.8m、深さは1.0~1.3mを測る。2 D 264で溝の両肩に、幅1.5~2.0m、奥行き1.5mの半円形のテラスがある。埋土は最下層に灰色砂が0.1m堆積しているが、その他は灰色・灰褐色・黒色粘土である。遺物は最下層の灰色砂面に木材や木製品 (fig.131、P L. 189) が多数出土し、土器 (fig.132 F-13・14) は出土しているが量的には少ない。

F S D 0903は、2 E 268から2 C 266・267で検出した、南東から北西に真っ直ぐ伸びる溝である。両端は調査区域外に続く。検出長は11.0m、幅は1.5~2.3m、深さは0.4~0.5mを測る。埋土はF S B 0903の東と真下と西でそれぞれ異なっている。東では3層で、上層が灰色粘土、中層が黒色粘土、下層が青灰色粘土である。真下では2層で、上層が砂混じりの灰色粘土、下層が青灰色粘土と微砂のブロックである。西では大きく2層に分けると、上層が黒色・灰色粗砂、下層が黒色・灰色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S D 0904は、2 C 267で検出した、南東から北西に伸びる溝である。南東端はF S B 0903により切られている。北西端は調査区域外に続く。検出長は2.0m、幅は0.7~0.8m、深さは0.1~0.15mを測る。埋土は黒色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S D 0905は、2 C 268・269で検出した、半環状の溝である。両端は3 F グリッドでは検出していない。検出長は3.0m、幅は0.5~0.6m、深さは0.1mを測る。埋土は黒色粗砂混じり粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S D 0906は、2 C 271から2 A 268・270で検出した、南東から北西に伸びる川である。両端と南岸は調査区域外に続く。検出長は17.0m、幅は9.0~12.0m、深さは2.0~2.5mを測る。埋土は灰色・黒色・灰黒色粘土とほぼ同色砂である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S K 0901は、2 D 264・265で検出した、南東から北西に長い方形の土坑である。長さは2.2m、幅は1.5m、深さは0.4mを測る。埋土は青灰色・青黒色微砂と灰黒色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。

F S K 0902は、2 E 268で検出した、北東から南西に長い方形の土坑である。長さは1.3m、幅は1.0m、深さは0.3mを測る。埋土は灰黒色粘土である。遺物はほとんど出土しなかった。この遺構は、第9面の青灰色微砂がF S D 0902に向かって北から低くなっていく斜面に再堆積した暗青灰色微砂を除去した面で検出した。これと同様の遺構にはS X 0901がある。

F S K 0904 (fig.130・132) は、2 C 266・2 D 266で検出した、円形の土坑である。径は2.1~2.3m、深さは0.4mを測る。2段に掘り込まれており、2段目の径は1.2~1.5mを測る。埋土

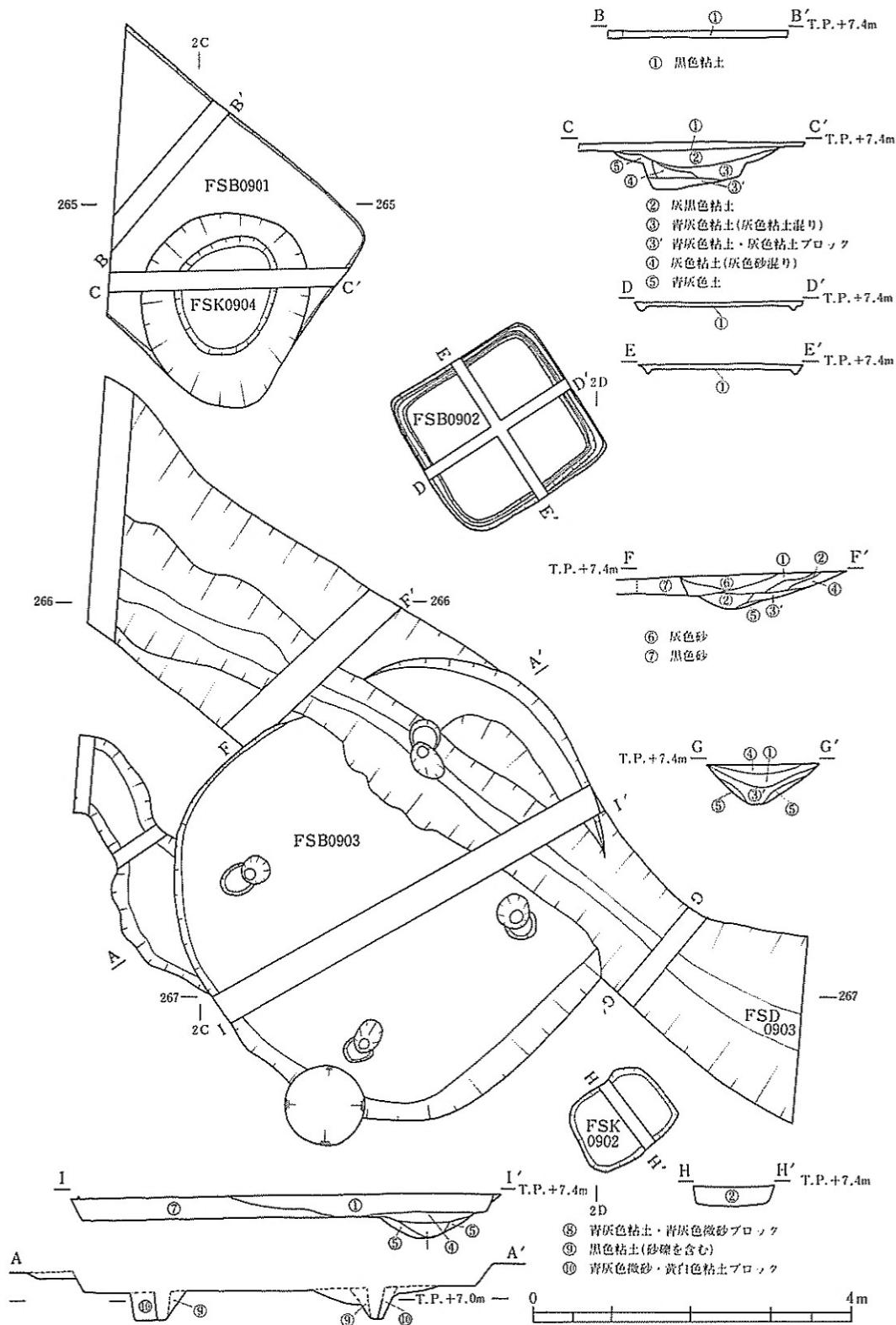


fig.130 Fトレント FSB0901・0902・0903、FSD0903、FSK0902・0904平面及び埋土断面図

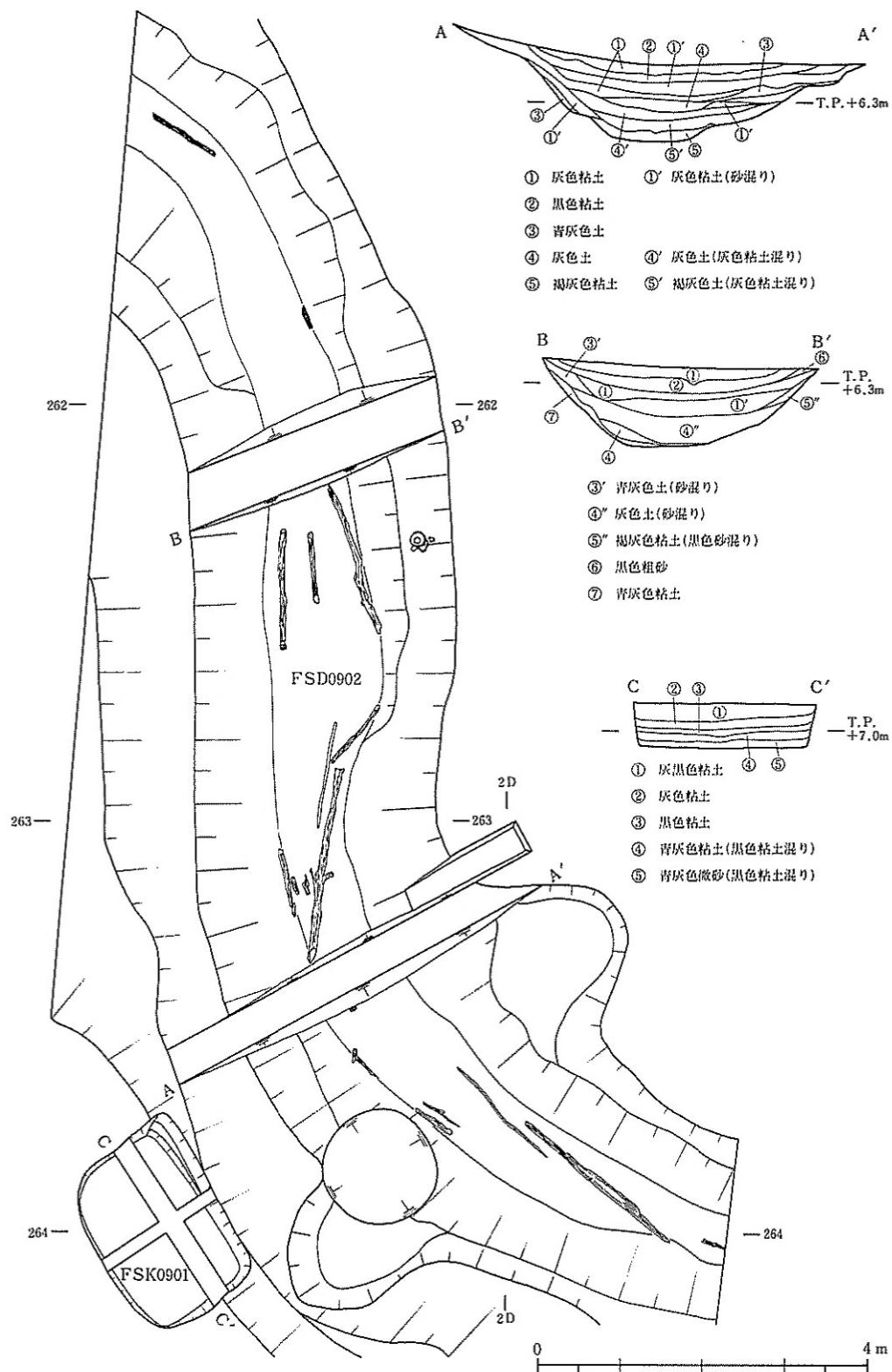


fig.131 Fトレチ F S D0902木材・木製品出土状況、埋土断面、F S K0901埋土断面

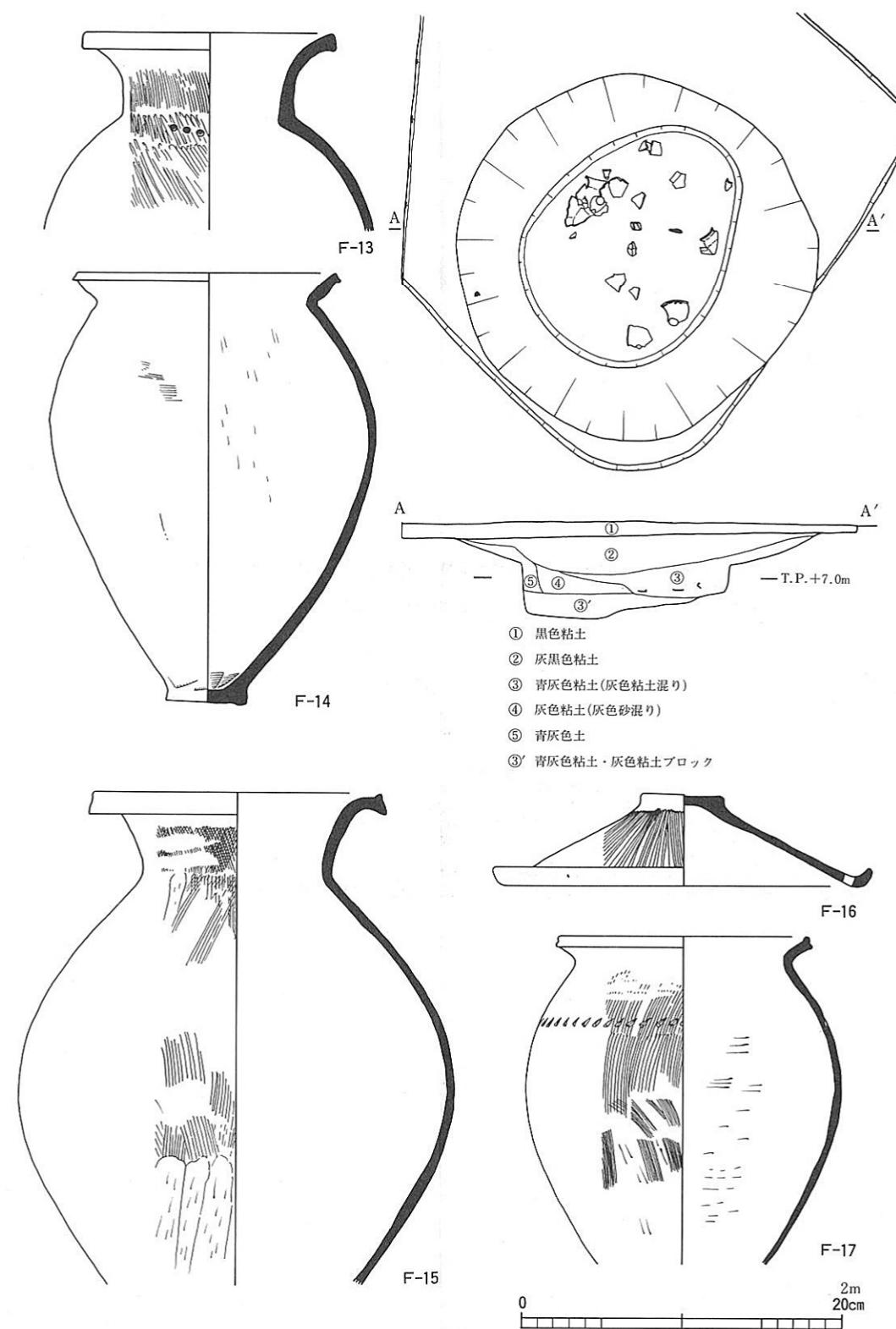


fig.132 F トレンチ F S K0902出土遺物、F S K0904遺物出土状況・出土遺物

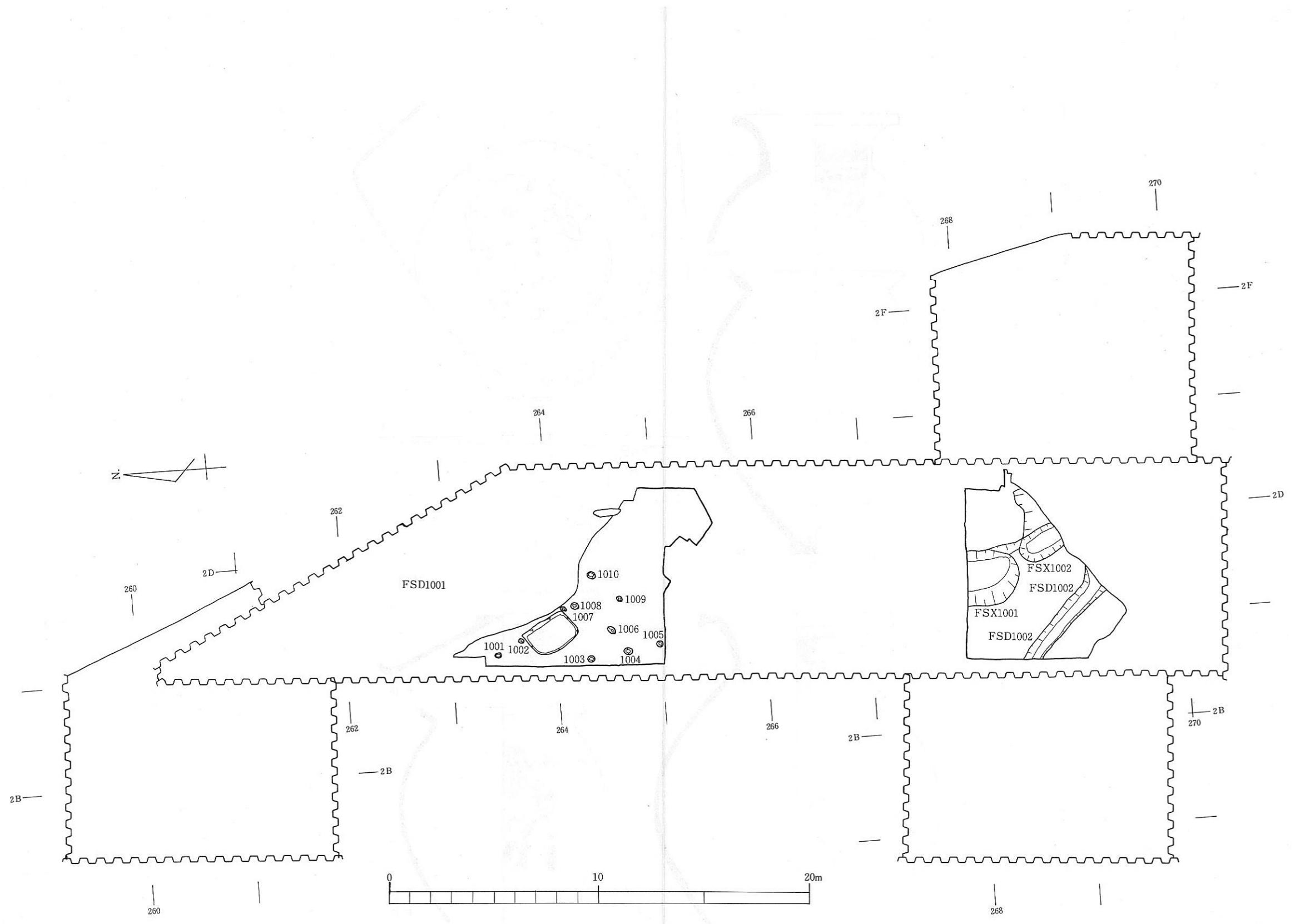


fig.133 F トレンチ 第10面（縄文時代晩期・弥生時代前期遺構面）

は大きく3層に分けられ、上層が灰黒色粘土、中層が青灰色土・灰色粘土・灰色粘土の混じった青灰色粘土、下層が青灰色粘土である。遺物は弥生時代中期の土器（fig.132 F-15~17）を出土した。

F S X0901は、2B・2C260で検出した、不整円形の落ち込みである。径は2.5~3.5m、深さは0.1~0.15mを測る。埋土は灰黒色粘土である。遺物は弥生時代中期の土器を出土した。この遺構は、第9面の青灰色微砂がF S D0902に向かって北から低くなっていく斜面に再堆積した暗青灰色微砂を除去した面で検出した。これと同様の遺構にはS X0901がある。

以上が弥生時代中・後期の遺構であるが、部分的に中期の遺構が1層下になっている。しかし、そのような堆積のないところでは明確な遺物の出土がない限り、遺構の時期の限定は困難である。F S D0902は集落の南限を画すような規模を有するが、両方の岸にあるテラス状の造りは橋をかけるようなものであったのかも知れない。竪穴住居の存在が集落の南限を否定するようであるが、時期的なズレがあれば問題はない。遺物を観ると中期の可能性は十分に考えられる。F S K0901はE S K0905等と形態が似ており、溝に近いところにあること等共通点が多い。これも中期の可能性がある。また、F S K0904が形態から井戸の可能性を考えると、竪穴住居も中期でも良いかも知れない。このように考えると、どのようにでもなるようである。ただ、集落の南限はどのように考えてもF S D0906の川であり、城山遺跡（その3）調査区では居住域と考えられる遺構はない。

第10層（縄文時代晩期・弥生時代前期遺物包含層、Eトレンチ第10層）

灰青色の微砂層である。厚さは0.1~0.35mを測る。北端部では極端に低くなっている。遺物は縄文時代晩期と共に弥生時代前期の土器を僅かに出土した。

第10面（縄文時代晩期・弥生時代前期遺構面、Eトレンチ第10面、fig.133）

灰青色粘土層の上面であり、北端でT.P.+7.1m、南端でT.P.+7.15mを測る。ほぼ水平な面である。遺構はピット、溝、川等を検出した。

F S D1001は2E264・265から2B260・261で検出した、南東から北西に流れる川である。両端と北岸は調査区域外に続く。検出長は28.0m、検出幅は7.0m、深さは1.8mを測る。埋土は、最上層が灰褐色粘土で、下層が灰色砂礫である。砂礫層の最も厚いところは1.1mを測る。遺物は縄文時代晩期の土器（P.L. 188）と弥生時代前期かと考えられる土器の底部を出土した。

F S D1002は2D270から2C269で検出した、南東から北西に流れる自然流路である。南東端はF S D0803により切られており、2C268で消えてしまっている。検出長は5.0m、幅は0.7~1.0m、深さは0.1~0.15mを測る。遺物は全く出土しなかった。

FPit1001~1010は2C264・2C265・2D265に点在するピットである。直径は0.15~0.3m、深さは0.1~0.25mを測る。埋土は黒褐色粘土である。遺物は全く出土しなかった。

F S X 1001・02は2 D269で検出した橢円形の落ち込みである。検出長径は2.0～2.5m、短径は1.1～2.3m、深さは0.1～0.2mを測る、遺物は全く出土しなかった。

以上が縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての状況であるが、川が流れているということ以外は何も解からないようである。ピットは人間の手によるものかどうか不明である。ただ、川の中から土器が出土するのであるから、周辺に人が住んでいたと考えられる。

第11層（E トレンチ第11層）

灰青色の粘土層であり、厚さは0.2～0.3mを測る。遺物は全く出土しなかった。

第11面（E トレンチ第11面）

青灰色微砂層の上面であり、北端でT.P.+6.8m、南端でT.P.+6.85mを測る。比較的平坦な面である。遺構は確認し得なかった。

第12層（E トレンチ第12層）

青灰色の微砂層であり、厚さは0.15～0.2mを測る。遺物は全く出土しなかった。

第12面（E トレンチ第12面）

紫黒色粘土層の上面であり、北端でT.P.+6.45m、南端でT.P.+6.5mを測る。比較的平坦な面である。遺構は確認し得なかった。

第13層（E トレンチ第13層）

黒褐色の粘土層であり、厚さは0.05～0.1mを測る。遺物は全く出土しなかった。

第13面（E トレンチ第13面）

黄白色粘土層の上面であり、北端でT.P.+6.35m、南端でT.P.+6.4mを測る。比較的平坦な面である。遺構は確認し得なかった。

第14層（E トレンチ第14層）

白色の粘土層である。厚さは0.2m前後で次第に砂礫やシルト層に変化していく。この層までを調査の対象としてきたが、ここでも遺物は全く出土しなかった。

以上が縄文時代晩期以前の状況である。周辺で旧石器等が出土しているが、ここでは何も無い。

（藤沢）

第8章 土器胎土の砂礫観察

奥 田 尚

1. はじめに

庄内期の土器胎土の観察を主として行なってきたが、同時期を示す試料、つまり、人々の生活の一時点を示す試料にめぐり会う機会が得られなかった。一括出土の遺物にしても短期間と推定されるが、一月とか一日とかの単位で同時期とはいがたい。今回、観察した試料は焼失家屋内で炭化物に伴なって出土した土器類であることから、時間差をないものと考えられる。つまり、生活の一時点に使っていた時の様子を今に伝える土器類であるといえる。

観察した試料は円形の住居と方形住居の2住居のものである。

土器試料の表面に見られる砂礫の観察をした。初めに、裸眼で全体を観察し、観察良好な部分を倍率30倍の実体鏡で観察した。観察事項は、砂礫種、粒径、粒形、量の4項目である。砂礫中の岩石片については、更に詳しく、造岩鉱物、構成鉱物について観察した。識別された岩石種は花崗岩、流紋岩、砂岩、チャート、火山ガラスで、鉱物種は石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩としたものには、石英・長石、石英・黒雲母、長石・黒雲母がかみ合った岩片がある。粒径は裸眼の場合、粒径が2mm以上を粗粒、2mm未満0.5mm以上を中粒、0.5mm未満を細粒とした。実体鏡下の場合、粒径が1mm以上を粗粒、1mm未満0.5mm以上を中粒、0.5mm未満0.2mm以上を細粒、0.2mm未満を微粒とした。粒形は角、亜角、亜円、円の4段階に区分した。量は個数的に、非常に多い、多い、中、僅か、ごく僅かの5段階に区分した。

2. 砂礫種について

砂礫種について述べる。

花 岗 岩：色は灰色、暗灰色である。礫形は角礫、亜角礫である。礫径は最大7mmである。

造岩鉱物のかみ合わせは、石英・長石、石英・黒雲母、石英・長石・黒雲母である。

流 紋 岩：色は灰白色で、礫形が角礫である。礫径は最大3mmである。石英の斑晶があり、石基はガラス質である。

砂 岩：色は灰色で、礫形は亜円礫である。粒径は最大1mmである。構成砂粒は細粒である。

チャート：色は灰色、灰白色、暗灰色、黒色、暗赤色、淡赤褐色である。礫形は亜角礫、亜円礫で、最大礫径が8mmである。

火山ガラス：色は無色、黒色で、透明である。粒径は1mm未満0.2mm以上である。貝殻状、フジツボ状である。

石 英：色は無色で、透明である。礫形は角礫で、最大礫径が4mmである。結晶面であ

る場合もある。

- 長 石：色は白色で、礫形が角礫である。礫径は最大 2 mmである。
黒 雲 母：色は金色、黒色である。板状を示す場合が多い。礫径は最大 3 mmである。
角 閃 石：色は黒色で、粒径が粒状、柱状である。最大礫径は 4 mmである。柱状で自形を示す場合がある。

3. 類型区分

土器胎土に含まれる砂礫構成をもとに類型区分をした。区分基準については次のようにある。

I 類型：花崗岩類起源と推定される砂礫のみからなる。角閃石が裸眼でも認められ、量が比較的多い。

II 類型：花崗岩類起源と推定される砂礫を主とし、碎屑岩類がごく僅かに認められる場合が多い。角閃石は細粒で少ない。

チャート等の碎屑岩類がごく僅かに認められる。………… II a 類型

碎屑岩類が認められない………… II b 類型

III 類型：花崗岩類起源の砂礫、碎屑岩類が認められる。角閃石は少なく、チャートが比較的多い。

チャートが僅かに含まれる………… III a 類型

チャートが中以上含まれる………… III b 類型

IV 類型：I 類型からIII 類型までのいずれにも属さない砂礫構成である。

4. 各類型の砂礫構成

I 類型からIII 類型の砂礫構成について述べる。

I 類型：構成砂礫種は花崗岩、石英、長石、黒雲母、角閃石である。花崗岩は灰白色で、角礫である。粒径が 1 mm～4 mmで、量が僅かである。造岩鉱物のかみ合わせは、石英・長石、石英・長石・黒雲母である。石英は無色透明、角礫である。粒径が 0.2 mm～3 mm、量が僅かである。長石は白色で、角礫である。粒径が 0.2 mm～4 mm、量が中である。黒雲母は金色・黒色板状である。粒径が 3 mm以下で、量が中である。角閃石は黒色で、角礫である。粒径が 4 mm以下で、量が中である。

II 類型：構成砂礫種は花崗岩、チャート、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。石英、長石、角閃石は全ての試料に認められる。花崗岩は灰色で、角礫である。粒径が 1 mm～7 mmで、量がごく僅か～僅かである。造岩鉱物のかみ合わせは、石英・長石、石英・黒雲母、石英・長石・黒雲母である。チャートは灰色、暗灰色、黒色で、角礫、亜角礫である。粒径が 1 mm～7 mm、量がごく僅かである。火山ガラスは無色透明、黒色透明で、貝殻状、フジツボ状である。粒径が 0.2 mm～1 mmで、量がごく僅か～中である。石英は無色透明、角礫である。粒径が 0.2 mm～4 mmで、量が中

～非常に多いである。複六角錐の結晶が見られるものもある。長石は白色で、角礫である。粒径が0.2mm～1mmで、量がごく僅か～中である。黒雲母は金色・黒色板状である。粒径が1mm以上で、量がごく僅か～中である。角閃石は黒色粒状で、角礫である。粒径が0.2mm～0.55mmで、量がごく僅かである。IIa類型とIIb類型とはチャートの有無により区分したのみである。

III類型：構成砂礫種は花崗岩、砂岩、チャート、火山ガラス、石英、長石、黒雲母、角閃石である。チャート、石英、角閃石は全ての試料に認められる。花崗岩は灰色で、亜角礫である。粒径が1mm～7mm、量がごく僅か～僅かである。造岩鉱物のかみ合わせは、石英・長石、石英・黒雲母である。砂岩は灰色で、亜円礫である。粒径が1mmで、量がごく僅かである。構成砂粒は細粒である。チャートは暗灰色、黒色で、亜角礫、亜円礫である。粒径が0.5mm～8mmで、量が僅か～中である。火山ガラスは無色・黒色透明で、貝殻状、フジツボ状である。粒径が0.2mm～1mmで、量がごく僅かである。石英は無色透明で、角礫である。粒径が0.5mm～5mmで、量が中～多いである。長石は白色で、角礫である。粒径が0.2mm～1.5mmで、量がごく僅か～中である。黒雲母は金色板状である。粒径が0.2mm～1mmであるが、試料によっては4mmに及ぶ。量がごく僅かである。角閃石は黒色で、角礫である。粒径が0.2mm～0.5mmで、量がごく僅かである。IIIa類型とIIIb類型はチャートの量によって区分したのみである。

IIIa類型はチャートの量が僅かであるもので、IIIb類型はチャートの量が中であるものとした。

IV類型：I類型からIII類型のいずれにも属さない試料を集めたものである。

5. 砂礫の採取地

土器出土地により近い距離で、土器胎土中の砂礫と同じ砂礫構成の砂礫が得られる場所を土器の砂礫採取地とする。

土器出土地点の城山付近の砂礫構成は、花崗岩類起源と推定される砂礫を主とし、碎屑岩類がごく僅かに含まれる。碎屑岩は主としてチャートであり、ごく僅かに砂岩、泥岩である。八尾市中田、萱振、山賀のように北方や東方になれば、碎屑岩類が非常に少なくなる。逆に、羽曳野丘陵周辺になればチャート、砂岩等の碎屑岩類が比較的多くなる。堺市から南方になれば、更に多くなる。逆に、花崗岩類起源と推定される砂礫は少なくなる。

城山付近の砂礫構成と同じ砂礫構成の土器は、II類型に属するものである。III類型

器種 類型	カメ	壺	鉢	高杯	器台	合計
I	1					1
IIa	9	8	7	3	5	42
IIb	1	2		2	1	6
IIIa	1	3		3	1	8
IIIb		1			1	2
IV		2				2
合計	12	16	7	18	8	61

第1表 器種と類型

に属する土器の構成砂礫には、チャートが比較的多く含まれ、角が比較的円い亜角礫、亜円礫である。北摂津付近の川原砂にもチャート等の碎屑岩類が比較的多く含まれるが、角ばった角礫、亜角礫であることから堺市付近とは区別される。III類型の土器の砂礫は、羽曳野丘陵周辺から堺にかけてのいざこかであるといえる。

I類型の土器の構成砂礫には、角閃石が比較的多く、花崗岩起源と推定される砂礫を含むことから、生駒山地西麓のいざこかで砂礫が採取された土器であるといえる。

6. おわりに

砂礫の採取地が土器の製作地であるとすれば、約8割の土器が遺跡近くで製作されていることになる。当地に運ばれていると推定される土器は、約2割である。この2割の内、南方から運ばれている土器が約1割5分であり、東方の生駒山地西麓からは僅か1個のみの土器しか運ばれていない。時期的には少し下るが、V様式期の土器を出土している成法寺遺跡では、搬入土器が2割を占めている。城山遺跡北方久宝寺南遺跡1の方形周溝墓出土の庄内式期の土器では、約6割が搬入されており、久宝寺南遺跡2では、6割半が搬入されている。また、搬入先としては、吉備地方、因幡地方、北摂津付近、生駒山地西麓、和泉付近、和歌山市付近が推定されている。

(註) 『成法寺遺跡』八尾市教育委員会 1983

その1

土器番号	泥質	花崗岩	閃長岩	流紋岩	結晶片岩	砂質	粘土質	火成ガラス	火山ガラス	石			物			焼上焼	器種	類型
										30倍	30倍	30倍	30倍	30倍	30倍			
2	1	L-△	L-X					L-△	N-O	M-△	N-△	S-X	S-X	S-X	無	器台	Ia	
3	2	L-△	L-X					L-X	M-X	L-□	N-△	S-X	S-X	S-X	無	器台	Ia	
4	4							L-X	N-X	L-□	N-△	E	M-△	S-X	無	鉢	Ia	
6	5	L-△						L-X	S-X	M-O	S-O	N-△	S-X	S-X	無	高杯	Ia	
7	6	L-X	L-X					L-X		L-□	L-O	H-X	S-△	S-X	無	高杯	Ib	
5	7	L-X						L-X		L-X	S-O	H-X	S-X	S-X	無	力メ	Ia	
8	8	L-X	L-X					L-X		L-□	N-□	L-X	N-□	S-X	無	高杯	Ia	
11	9	L-X	L-X					L-X		M-X	N-C	L-○	N-X	S-X	無	高杯	Ia	
10	10	L-X	L-X					L-X		M-X	L-X	N-△	S-X	S-X	無	高杯	Ia	
12	11	L-X						L-X	M-X	M-△	M-O	M-X	S-△	S-X	無	高杯	Ia	
9	12	L-△	L-X					L-X	N-X	H-□	H-△	N-O	S-X	S-X	無	高杯	Ia	
14	13	L-X						M-X	L-□	M-□	S-X	S-X	S-X	S-X	無	高杯	Ia	
15	14	L-△	L-X					L-△	L-X	L-○	N-△	N-X	S-X	S-X	無	高杯	Ia	
16	15	L-X	L-X					L-△		S-X	L-□	L-O	N-△	S-X	無	高杯	Ia	
18	17							L-□		L-○	N-□	N-X	N-□	S-X	無	高杯	Ib	
13	18	L-X						L-X	L-X	H-X	S-□	N-X	S-□	S-X	無	高杯	Ia	
19	19	L-X	H-X					M-X	L-X	M-X	S-□	L-△	S-△	S-X	無	高杯	Ib	
20	20							M-X	M-X	M-X	L-□	H-X	S-△	S-X	無	高杯	Ia	
21	21	L-X						L-X		L-□	M-△	M-□	N-X	S-X	無	高杯	Ia	
21	21	L-X	L-X					L-X		L-○	H-X	H-△	H-X	S-X	無	高杯	Ia	
23	22	L-X						L-X		H-△	H-X	S-O	S-X	S-X	無	高杯	Ib	
28	23	L-X	L-X					L-X	M-X	L-X	M-○	L-X	S-X	S-X	無	高杯	Ia	
22	24	M-X						L-X	L-X	L-○	L-X	S-X	S-X	S-X	無	高杯	Ia	
24	25	L-X	X					L-X	L-□	H-X	L-△	L-□	L-X	S-X	無	高杯	Ia	
30	29	L-X	N-X					M-X		H-X	N-H	H-X	S-X	S-X	無	高杯	Ia	
26	27	L-△	L-X					L-X		N-□	L-□	M-X	N-△	S-X	無	器台	Ia	
29	28							L-△		L-△	L-△	M-X	S-X	S-X	無	高杯	Ia	
32	29	L-△	N-△							L-□	M-○	L-△	M-X	S-△	無	力メ	Ib	
33	30	L-X	L-X					L-X	L-X	S-X	L-○	M-X	H-X	S-X	無	器台	Ia	
34	31	L-X						L-X	L-X	S-X	L-○	H-○	M-X	S-X	無	高杯	Ia	
35	32	L-△	L-X					L-X	N-X	M-X	L-△	H-O	M-X	S-X	無	高杯	Ia	
40	32	L-X	L-X					L-X		L-□	L-○	H-X	N-X	S-X	有	高杯	Ia	
39	33	L-X	L-X					L-X	L-X	L-○	H-O	M-X	N-□	S-X	無	高杯	Ia	
41	35	L-△	L-X					L-X		N-X	L-□	L-□	S-X	S-X	無	力メ	Ia	
37	36	L-X	L-X					L-X		N-C	L-O	M-△	S-△	S-X	無	器台	Ia	
38	36	L-X	L-X					L-X	L-X	N-X	N-△	N-O	N-X	S-X	無	力メ	Ia	

表1 砂礫観察表

202

視標眼による記号 : L = 直径 2 mm未満 0.5mm以上 S = 直径 0.5mm未満 ○ = 質が非常に多い △ = 質が中 □ = 質が多い ○ = 質が中 SS = 究極 0.5mm未満 0.2mm以上 S = 究極 0.5mm未満 0.2mm以上 ■ = 究極 0.2mm未満 質は△=質が最も大きい

卷之二

第9章 城山遺跡における竪穴住居 焼失材のC-14年代測定について

大阪府立放射線中央研究所 柴田せつ子・川野瑛子・中林武重

1. はじめに

大阪文化財センターから測定依頼をうけた城山遺跡の竪穴住居焼失材に関する5件の試料についてのC-14年代測定の結果について報告する。

2. C-14年代測定法の原理

大気中には宇宙線起因の天然に生成した放射性C-14が極低レベルで炭酸ガスとして存在している。生物はこのC-14を呼吸または摂食などにより生物体内に取り込むので、生きている生物体内のC-14濃度は大気中のC-14濃度とほぼ等しくなっている。しかし、生物が死ぬと大気からの新しいC-14の供給がなくなり、生物遺体のC-14濃度は一定の速度で時間の経過とともに減少し続ける。したがって、試料としての生物遺体のC-14濃度およびその生物が生きていた時のC-14濃度が測定できれば、これらの値を次式に代入することにより、その生物が死滅してから現在までに経過した年数が計算できる。ここで、 t は試料の年代、 $T_{1/2}$ はC-14の半減期、 A は試料のC-14濃度(dpm/gC)、 A_0 はその試料が生きていた時のC-14濃度である。現在、

$$t = \frac{T_{1/2}}{0.693} \times \log_e \frac{A_0}{A} \quad (A)$$

A_0 として、アメリカのNBSで調整された標準シュウ酸のC-14濃度の95%を用いることになっている。C-14年代値は(A)式を用いて計算できるが、この式が成立するためには、大気中のC-14濃度が(1)地球上のどの地域においても同じで(2)過去から現在までのどの時期においても一定であったと言う前提条件が満たされねばならない。これらの条件はLibbyよりほぼ正しいことが確かめられている。

3. 測定方法

試料の木炭を燃焼させ炭酸ガス(CO_2)とし、この CO_2 よりメタノール(CO_2OH)を合成した。このメタノールのC-14放射能を液体シンチレーション法により測定し、その測定値を前項の(A)式に代入することにより試料の年代を計算した。

3-1. 試料の前処理

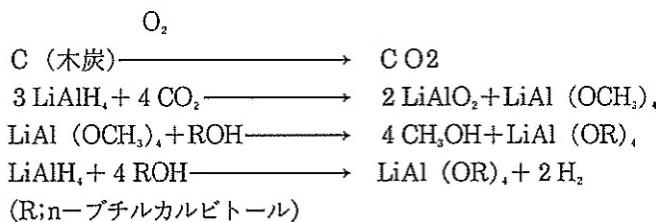
依頼を受けた試料は下記の5件であった。測定用試料として、夫々25~30gの木炭を提供され

当方のコード	遺跡名	地区名	出土年月日	登録番号
OR-18	J YD-5 (1261)	S B0901 (焼失材)	840521	W-11
OR-19	J YD-3 (1166)	S B1001 (〃)	840517	W-4
OR-20	J YD-3 (1203)	S B1001 (〃)	840517	W-41
OR-21	J Y15D	S B1004	851021	W-38
OR-22	J Y15D	S B1004	851021	W-14

た試料からえらび分けた。木炭塊は細かく碎いてビーカーに入れ、IN-HCl水溶液の150~200mlを加えた後、70~80°Cの液温で数時間かくはんしながら試料を処理した。処理後、HCl水溶液を流去し、PH-試験紙が中性を示すまで水洗を繰り返した。なお、この操作中に混在する土砂をできるだけ除去した。処理済木炭粒子は乾燥器中で140°Cで数時間乾燥させた後、電気炉中で300°C、3時間蒸し焼きにしたものをメタノール合成の試料とした。

3-2. メタノールの合成

資料の木炭粒子は図1に示す装置によりメタノールに変換した。また、木炭からメタノールに至る化学反応式は次の通りである。試料としての木炭粒子（約1グラム原子、12g）を直径3cm、



長さ50cmの石英管に酸化銅、スルフィックスとともに充填する。装置内を予め窒素ガスで充分に置換後、酸素ガスを流しながら電気炉で700°Cに加熱して試料を燃焼させCO₂ガスを発生させた。CO₂ガスはLiAlH₄のジエチルカルビトール懸濁液に導き、反応させた。反応終了後、反応フラスコに適量のn-ジエチルカルビトールを滴加しメタノールとした。反応フラスコは室温で一晩放置後精留塔を用いて粗メタノールを留出させた。5件の試料についてのメタノール合成の収率は次の通りである。

コード番号	初めに用いた木炭量(g)	メタノールの収率, %	メタノールの収率は試料の燃焼で生じた水および燃焼管中に残った灰の量を初めに用いた木炭量から差し引いてえられた木炭量にもとづいて計算してある。なお*は酸素消費量からの収率である。
OR-18	10.17	67.0	
OR-19	11.79	58.1	
OR-19	12.25	86.2 *	
OR-20	15.49	67.6	
OR-21	18.49	68.7	
OR-22	15.21	68.5	

上記のようにしてえられた粗メタノールは、活性炭をつめた小さい塔を通した後、再度精留した。えられた精製メタノールを液体シンチレーション測定の試料とした。

3-3. 液体シンチレーションカウンターによるメタノールのC-14放射能測定

液体シンチレーションカウンターとしてはパッカード社製トライカーブ460CD型を用いた。測定領域は19~156KeVに設定し、シンチレーターとしてはPPOの7g、BisMSBの0.5gをp-キシリソールに溶かしたものを用いた。また測定用バイアルは市販の20ml低カリガラス製のものを用いた。各試料から化学合成し、精製したメタノールの6gを測定用バイアルに入れ、全量が14.5gになるように上記キシリソルシンチレーターを加えたものを試料カクテル(S)とした。なお、バックグラウンド計数値は市販スペクトル用メタノールを用いて試料カクテルと同一組成のバックグラウンドカクテル(BG)をつくり、そのものを測定してえた。測定はSカクテルとBGカクテルを夫々100分づつ交互に繰り返すことにより液体シンチレーションカウンターの変動の影響を小さくした。メタノールを含んでいるカクテルの測定に際してはメタノールによるクエンチング作用があるので試料の真の比放射能(dpm)を知るために既知のC-14標識標準化合物を用いての補正曲線を描き、この曲線を用いて実際に測定してえられた放射能(cpm)を補正する必要がある。ここでは、C-14標識安息香酸(7070dpm/mg±0.5%)で作製した補正曲線を用いて試料(S)のメタノールのdmpが計算された。次表に試料(S)、バックグラウンド(BG)のメタノールおよびNBSシュウ酸からのメタノールの放射能測定値を示す。

メタノール量,g						
コード番号	測定時間, 分	BGcpm	Scpm	Sdpm	Sdpm/gcH ₂ OH	Sdpm/gC
OR-18	5.997 5,000	10.202±0.046	13.686±0.087	23.087±0.147	3.850±0.025	10.266±0.065
OR-19	*3.664 5,900	10.212±0.043	8.286±0.071	14.068±0.122	3.840±0.033	10.239±0.088
OR-19	6.000 4,000	10.359±0.056	13.850±0.080	23.422±0.137	3.904±0.023	10.410±0.061
OR-20	6.000 4,000	10.165±0.049	14.099±0.069	23.756±0.116	3.959±0.019	10.558±0.052
OR-21	6.000 4,000	10.263±0.055	13.734±0.097	23.235±0.165	3.873±0.027	10.326±0.073
OR-22	4.318 5,000	10.215±0.049	9.988±0.083	16.846±0.140	3.901±0.032	10.404±0.086
NBSシュウ酸 (SRM4490C)						
	5.003 5,700	10.059±0.038	20.819±0.085	34.456±0.143	6.887±0.029	18.365±0.077

* 測定に際して、市販スペクトル用メタノールを加えてメタノール量は6gとしてある。

4. C-14年代計算結果

前項の表で示したシュウ酸および各試料から合成したメタノールの放射能(dpm/gC)を(A)

式に代入することにより各試料の年代値を計算することができる。なお、計算に際してC-14の半減期としてはLibbyの5568年を使用することが世界的に慣例になっており、ここでもこの値を用いた。また、Aoは次のようにして求めた値を用いた。即ち、NBSの新標準シュウ酸(SRM 4490C)から合成したメタノールの比放射能の実測値は 18.365 ± 0.077 dpm/g Cであった。慣例によればNBSの旧標準シュウ酸の比放射能の95%をAoとして使用することになっており、また、文献によればNBSの新旧標準シュウ酸の比放射能の比は1.2933と記されているので、上記のメタノールの実測値を1.2933で除した値の95%をAoとした。次表にC-14年代測定法により測定した各試料の年代値を示した。表中の年代値の誤差は測定値の標準誤差 1σ のみとした。 1σ とは表示してある誤差値の範囲内に、真の年代値が68%の確立で存在することを意味している。なお、B PはBefore PresentまたはBefore Physicsの略であり、A D 1950年を零年として、この年から何年前であるかを表している。

当方のコード	遺構番号	C-14年代値
OR-18	S B 0901W-11	2190 ± 60 B P (B C 240)
OR-19	S B 1001W-4	2215 ± 77 B P (B C 265)
OR-19'	S B 1001W-4	2083 ± 58 B P (B C 133)
OR-20	S B 1001W-41	1969 ± 52 B P (B C 19)
OR-21	S B 1004W-38	2148 ± 66 B P (B C 198)
OR-22	S B 1004W-14	2087 ± 75 B P (B C 137)
K S U - 1	S B 1004W-14	1970 ± 20 B P (B C 20)

OR-19'はOR-19と同じ試料であるが、依頼者の要請により試料の残部を用いて全く同じ前処理を慎重に実施した後の試料についての再測定の結果である。2者の値は 1σ の範囲で一致している。また、OR-22とK S U - 1の試料は同じものであり、後者は京都産業大学の山田研究室での測定結果であり参考のため併記した。

第10章 城山遺跡出土の動物遺存体

奈良国立文化財研究所 松井 章

Dトレントにおいて検出された溝S D0502より、ウマ (*Equus caballus*) の頭蓋骨、助骨、椎骨、四肢骨が散乱して出土した。出土状態、骨の風化度、骨の所見から、同一個体のものであることがわかる。共伴遺物としては、土師器の暗文が施された皿、須恵器の平瓶 (fig.20) などがあり、それらは平城宮土器III (8世紀中ごろ) に相当する。以下、その概略について記述する。

頭蓋骨

後頭部を人為的に破損されているが、充分に全容をしきることが可能である。全体の色調は茶褐色を示し、保存状態は良好である。内面には部分的にビビアナイトの結晶が析出しているが、小さな範囲にとどまる。性別は犬歯がみられないことからメスであることがわかる。頭骨の成長は既に終わり、縫合は全て終了している。切歯の二重になったエナメル質のうち、内側がかなり円形に近づき、切歯の摩耗によるオルセンの年齢推定法 (Olsen 1964) に従えば、10才近い年齢のものである。前、後臼歯は、外部から観察するかぎりそれほど摩耗が進行しているようには見えない。前頭骨には、斜前方より斧様の鉈器で何回か、打撃を加えて割った痕跡が残る。その内のひとつから推定する刃の幅は、22mmである。このような打撃を加えながら、後頭骨の後頭頸（頭蓋と椎骨をつなぐ関節のある場所）の上方まで注意深く、直線的に脳頭蓋の上半部を取り外している。脳を取りだしたためと思われる。前頭骨から鼻骨にかけては、骨が薄いため、土圧と取上げたのちの乾燥のために亀裂がはいり、破損しているが、出土時の写真からみると完全であった事がわかる。

計測箇所の中でも、最も信頼できる計測点である頭蓋基底長、臼歯列長を例に取り、他の遺跡からの出土例と比較してみる。本遺跡のウマの頭蓋基底長は443mmで、この値は岡山県の川入遺跡（古墳時代）での例（林田1973）、450mmより小さく、現生のトカラウマよりは大きい。臼歯列長は、160.0mmで平城京出土のウマ（松井1984）の170mmよりは小さく、川入遺跡のウマの161mmにちかい。

橈骨（東側）

乾燥のため、ひび割れを生じ、近位端近くで割れて離れているが、接合可能である。内部にはビビアナイトが析出し、非常に脆くなっている。外面は暗褐色、断面部は黄色、内面は深青色を呈している。橈骨最大長 (ML) は、334mmで、他の計測点は部分的な破損のため、計測不可能であった。両端とも骨端部の化骨化は終了している。

中手骨（左右各1）

右側のものは、外面明褐色を呈し、保存状態はよく、遠位端から近位端まで、部分的に側面を欠損しながらも残り、全長を知ることができる。最大長は213mm、遠位端最大幅は44mmであっ

た。化骨化は終了している。左側は暗褐色を呈し、骨の表面がかなり剥離し、保存状態は悪い。表面には、解体の際の刃物の痕跡は見られない。

大腿骨（左側）

遠位端を欠く。近位端幅についても小転子の欠損のため、計測不可能である。骨端部の化骨化は終了している。乾燥のため、骨の表面には亀裂を生じ、裂け目には内面から析出した、ビビアナイトが顔をのぞかせている。大転子の基部（胴体とつながる関節部分）には、鋭利な刃物による切り傷が残る。これは下肢を胴体から切り放す際のもので、縄文時代の遺跡から出土するイノシシやニホンジカに付けられている傷跡の位置と共通する。このことは、明らかに、このウマが溝に放棄されるまえに、解体されていたことをものがたる。

脛 骨（左側）

乾燥のため、縦に亀裂が入り、バラバラになっている。内面には厚くビビアナイトが析出しており、非常に脆い。

距 骨（右）

乾燥による亀裂を生じているが、完形を保っている。褐色を呈し、表面は滑らかである。最大幅（G B）57.5mm、最大高（G H）57.5mm、L m T 59.0mmをはかる。

椎 骨

肋骨突起、棘突起、乳頭突起を欠損する。部分的にビビアナイトを析出するが、保存状態は概してよい。化骨化は終了している。

肋 骨（右3点、左4点）

完形に近いものが多い。乾燥にともなうひびわれが一部に見られるが、保存状態は概してよい。人為的な切り傷は見られない。

以上概略を述べてきたように、城山遺跡から出土したウマは、8部位、15点にのぼる。幸運なことに、保存状態が良好であったため、骨の表面に、多くの加工痕を観察することができた。また、頭骨からは多くの計測値がえられ、良好な資料の少ない古代のウマの研究に大きな成果となるといえよう。以下、短いながら、この資料のもつ文化的な問題について若干触れてみたい。

まず特筆されるべき事項は、四肢骨、肋骨にみられる鋭利な刃物による解体の痕跡と、斧状の鉋器で、頭蓋骨の上面を外して、脳を取りだした痕跡がある。すでに仏教思想から、「牛馬犬猿鶏の牢（肉）を食うことなかれ」という、殺生肉食の禁令が、675年（天武4年）に発令されており、さらに奈良時代になっても殺生禁止令（752、天平勝宝4年）などが発令されていた。事実、平城京右京八条一坊十一坪の西一坊大路坊間路西側溝から出土したウマの四肢骨には、解体した痕跡がなかった（松井1984）。この2つの遺跡のウマの死体処理から、平城京では肉を食べなかったのに対し、河内国では食べたという違いが、地域による違いか否かは、今後、類例が増加すればわかるであろう。また、平城京出土のウマの後頭部が破損していたことについて、報告

書執筆時には、単に土圧によるものと考えていた。それは、資料の保存状態が悪く、破損箇所の観察ができなかったためで、今回の城山遺跡の資料も観察中に、平城京出土のウマの頭骨も同じ場所を破損していることと、後頭骨の後端部は最も堅固な部分であるので、この部分だけが土圧などの自然の営力で破損したとは考えにくいという結論に達し、やはり平城京の資料も人為的に頭蓋を割られた可能性が強いことを、この場で新たに指摘したい。

ウマの脳を取りだした行為については、次の理由が考えられる。1)食用のため(薬用も含める)、2)革なめしに使用するため(脳しょうなめし)、3)呪術のため、4)その他。

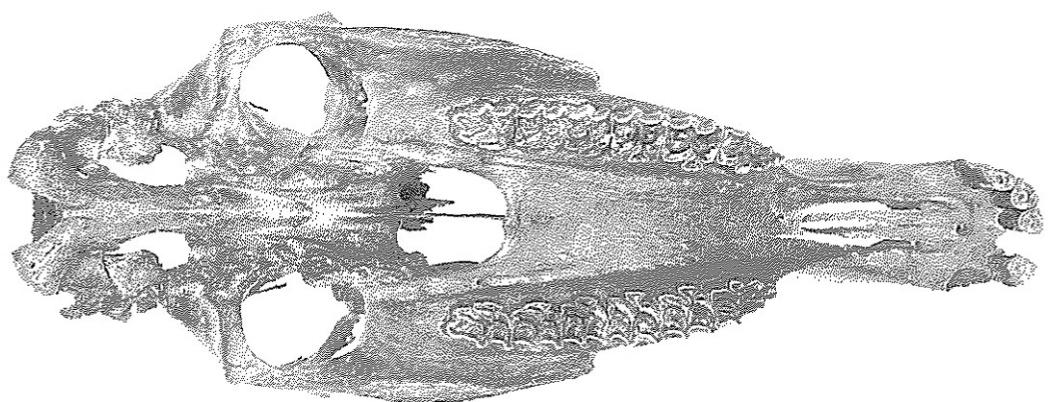
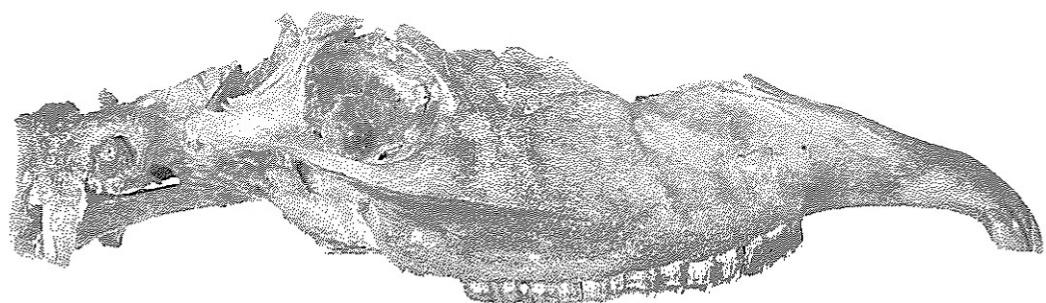
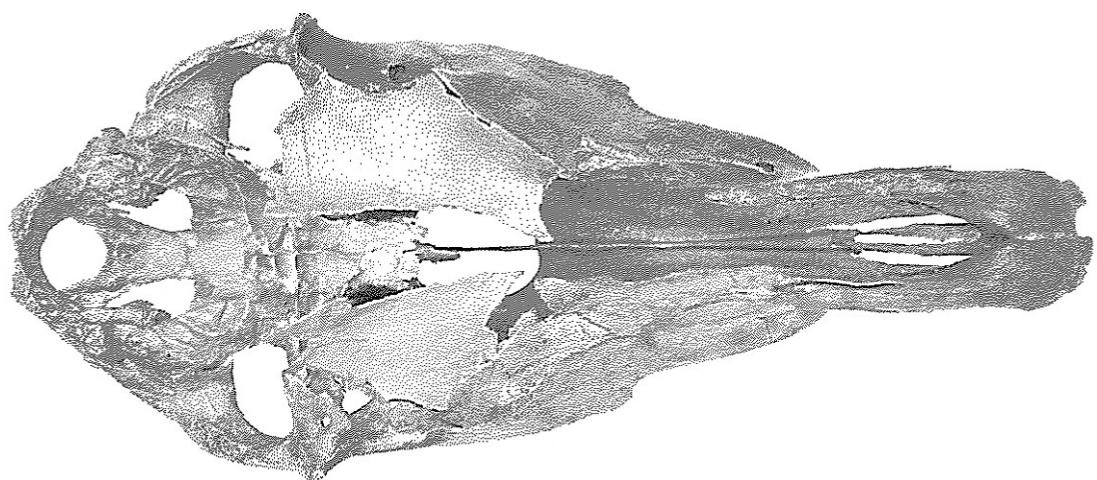
縄文時代以降の遺跡から出土するイノシシやニホンジカの頭蓋が、ほぼ例外なく打ち割られていること、現在でも脳を食用にする事例が我が国においても、広く見られる事実を、1)の例証として挙げることができる。しかし、『養老令』の「厩牧令」にある「官馬牛条」に「凡官馬牛死者。各取皮脳角胆。若得牛黃者。別進。」(官の馬や牛が死んだ場合、その皮、脳、角、胆、[牛の胆囊]を収め、もし、牛の胆石を得た場合には別に進上せよ)とあり、馬が死んだ場合には、その皮と脳が価値を持っていたことがわかる。『令義解』には、この脳の記述について特に「馬頭中髓也」とあり、牛を含んでいない。しかし、何の目的のために公に収められていたかは記されていないが、この表現から判断すると、馬皮をなめすために脳を利用した可能性が強いのではないだろうか。脳をなめしに利用する方法は『延喜式』内藏寮式の造皮の条に、「鹿皮一張、長四尺五寸廣三尺、除毛曝涼一人、除膚浸漬一人、削暴和脳槎乾一人半」(鹿の皮一枚、長さ約135cm、幅約90cm、毛を除きほしさらすのに一人、膚肉を除き、水に浸すのに一人、削りてほし、脳を和え槎(す)り乾かすのに一人半)とする。この場合は鹿皮についてであるがあきらかに脳をなめし剤として使用していることがわかる。ただ、馬皮については、『延喜式』「左右馬寮式」の「造女鞍一具料」の条の「熟馬皮料油」とあり、また「馬瑙御腰帶」の条に、「馬革一条。(中略)作革料油一合、塩三合、糟三升。」とあることから、少なくとも延喜式の成立した10世紀には、馬の皮については、油がなめし剤として用いられていたことが指摘されている。

(小林1962 p. 102-104)。今回の資料をみると、そして、『養老令』の規程をみると、馬の皮なめしも「脳を和える」方法によった可能性が強いのではないだろうか。

最後に指摘したい事実は、古墳時代におけるウマの出土例のうち、頭骨の遺存状態が判明している岡山県川入遺跡、大阪府日下貝塚(林田 前掲書)では、脳を取りだした痕跡が認められていないことである。『日本書紀』の「仁賢紀」に、大和に「熟皮高麗」とよばれた渡来系の皮革製造集団が、新しい技術を持って渡ってきたことを記しているが、もし、この脳をなめしに使うという方法がその様な集団によって伝えられたとすると興味深い。

測定番号	計測値名:(林田1974)による	城山	平城京(比較)	川入(比較)
1	頭蓋最大長	454		491
2		454		
3	頭蓋基底長	443		450
4		263		
5		113.9		
6		251.5		
7				
8				
9				
10				
11		255.9		
12		217.9		
13		287		
14		173.3		
15				
16				
17		203.3		
18	口蓋前部の長さ	251.2		
18 a				
19		275.9		
20				
21	歯槽間縁の長さ	83.4		85
22	臼歯列長	159.9	170	161
22 a		156.4		
23		75.8		
23 a		71.8		
24		86.2		
24 a		86.8		
25	第2前臼歯(長さ×幅)	33.7×23.0		
26	第3前臼歯(同じ)	26.7×25.7		
27	第4前臼歯(同じ)	25.8×26.9		
28	第1後臼歯(同じ)	21.0×25.8		
29	第2後臼歯(同じ)	22.1×24.7		
30	第3後臼歯(同じ)	31.6×22.8		
31	眼窩最大	58.8		
32				
33				
34		81.9		
35		99.7		
36	後頭窩の幅	36.8		
37		37.7		
38				
39				
40				
41	顎幅	200.5		
42				
43		141.5		
44		74.4		
45		63.9		
46				
47		61.8		
48		112.4		
49				
50				
51				
52				
53				
54				

第1表 大阪府城山遺跡出土のウマの計測値(単位はmm)



ウマの頭骨

PL. 2



- 1～4：肋骨
5：下顎臼齒
6・7：中手骨
8・9：橈骨
10：大腿骨

ウマの骨

第11章 ま と め

調査の結果で見えてきたように城山遺跡（その2）調査区では、途中ほとんど遺構の無い時代・時期もあるが、縄文時代晚期から現代までの各時代の面がある。以下簡単に内容を記す。

Dトレンチの第15層がE・Fトレンチでの第14層であり、大阪府下の埋蔵文化財の担当者間で「長原地山」と呼ばれている粘土層である。城山遺跡（その3）調査区や大阪市が過去に行なった長原遺跡では、この層から旧石器等が出土しているが、当調査区ではそれらしき遺物は全く検出し得なかった。この層が緩やかに北に向かって下がっていくことが確認された。しかし、人間の生活の痕跡は全く無かった。

人間の生活の痕跡が確認されたのは、この上に約0.5mシルトや粘土が堆積した、Dトレンチ第13層・E・Fトレンチ第11層の上面からである。この間に数千年が経過している訳であるが、約0.5mの堆積にすべての時間を費やしたのではなく、堆積と削平の繰り返しの結果が約0.5mに成っただけであろう。この面では、自然の川以外にも溝が確認され、どちらからも多量とまではいかないが土器の破片が出土している。大部分は縄文時代晚期の土器（P.L. 188）であり、いわゆる船橋式、長原式の甕であるが、中に弥生時代前期の土器らしき破片もある。また、Eトレンチの第10層からは弥生時代前期の壺（P.L. 156 E-50）も出土している。そのため、この面を人間が利用している時期の限定はできない。縄文時代晚期から弥生時代前期までの可能性を考える必要があるが、あまり明確な生活の痕跡がないために、居住域や生産域ではなかったのであろう。ただ、調査で確認した面は一面であるが、縄文時代や弥生時代の人間が生活していた時には、調査成果とは全く異なっていたであろうことは十分考えられる。また、縄文時代から弥生時代への移行期の問題にも関わってくるであろう。

弥生時代中期はDトレンチ第12層、E・Fトレンチ第10層上面である。この時期には、溝や土坑等色々な遺構が確認されている。遺物の量も増加し、土器だけではなく、木器・石器も出土している。住居跡や墓といったような直接人間を連想させる遺構は検出されなかったが、東に百数十メートル離れたところでは、大阪市の調査でそういった遺構も検出されている。直接の居住域ではないが、近接地であることには違いない。

弥生時代後期はDトレンチ第11層、E・Fトレンチ第10層上面である。Eトレンチでは、弥生時代中期に部分的に深かったところもあり、そこにはほぼ同質の土が中期の遺構を覆って堆積し、後期の面となっているところもある。この時期の住居跡や墓や溝等が、中期とは比較にならないほど検出された。中期とは違って、居住域に変化している。住居跡は大阪市が調査したものも含めると10棟をこえる。南北約200メートルの範囲に点在している。火災により焼失したものがあり、完形の土器が45固体出土したもの（S.B.1001）もある。すべての竪穴住居が焼失している訳

ではなく、焼失していないもの（F S B 0903）もある。この竪穴住居の場合は、遺物が後の土砂の流入により入ったと考えられる土器の破片しかなく、柱の抜き取った痕跡がはっきりと確認された。意識的に取り壊している。また、住居といえるかどうかというような非常に小規模で柱も炉跡も無いような竪穴（F S B 0902）がある。溝には住居域を画すると考えられる溝（S D1015・F S D0902）と住居域内で生活用と考えられるような溝（S D1018・E S D0906）とがある。確かに、S D1015から北は、面自体が急激に粘土に変化しており、遺構も細い溝（S D1007）程度しか無い。S D1018とE S D0906は同一と考えられている溝であり、相当長期間利用されていたようである。この溝は明らかに掘り直し、掘り変えが行なわれている。Eトレソチでは、当初の溝が或る程度埋まった段階で、その中央部だけを掘り直しており、断面がU字形をしていたものが、幅が狭くなつてV字形になり、底が以前より深くなっている。Dトレソチでは、真っ直ぐ北に伸びていた溝が、途中で掘り直され、そこから向きを東に変えている。溝の掘り変え等からも居住域のなかでの住居地の変化等が考えられる。少しずつ変化しながら長期間居住しているようである。

古墳時代はDトレソチ第10層、E・Fトレソチ第9層上面で人間の生活の痕跡が確認されている。竪穴住居（E S B 0901）が営まれたり、大量の土器（fig.30～33）を土坑（S X0743）に廃棄したり、下層の溝の影響で溝条に窪んだところ（E S D0804）に完形の土器（P L. 151）を並べたりしている。他には堤（S X0701etc.）や畔（S X0721etc.）があり、水田が営まれている。遺構の埋土と切り合い関係から時間的に幅があり、古墳時代前期は明確ではないが、中・後期を通じて、調査区域及びその周辺に居住しているようである。しかし、次第に住居域ではなくなっていくようである。

古墳時代の終わり頃から奈良時代にかけてはD・E・Fトレソチ第8層上面で人間の生活の痕跡がある。直接的な生活に関わる遺構ではなく、祭祀の可能性が考えられるような馬骨と土器を出土した溝（S D0502）、水田の畔（F S A0701etc.）と平行する溝（F S D0701）等である。主として生産域になっていたようである。

奈良時代の後半に水田面を覆う砂の堆積があり、その後0.8～1.0mの厚さで粘土が堆積している。この粘土は、各層から出土する遺物を観るかぎり、奈良時代末から鎌倉時代の間に堆積したようである。

鎌倉時代の水田の畔（D S X0301・E S A0601・F S A0501etc.）を多数検出しており全面的に生産域になっていたようである。

以後は、東除川の氾濫によると考えられる砂の堆積が絶えず生産の妨げとなっていたにも拘らず、水田や畠が営まれていたようである。江戸時代に大和川の付け替え工事終了後、それもなくなり、生産域としてずっと続いていたのである。中央環状線の建設をもって完全に『土砂が堆積しないところ』になった。

以上が今回の調査の極く簡単なまとめである。

（藤沢）

財 団 法 人

大阪府埋蔵文化財協会蔵書

第 0271号

()

城 山

(その2)

近畿自動車道天理～吹田線建設に伴う
埋蔵文化財発掘調査概要報告書

昭和61年3月31日発行

大 阪 府 教 育 委 員 会

財團法人 大阪文化財センター

大阪市城東区蒲生2丁目10番28号

印 刷 所 株式会社 中島弘文堂 印 刷 所
大阪市東成区深江南2丁目6番8号